

関西学院考古

No. 9

目 次

—調査報告—

滋賀県高島郡高島町白鬚神社古墳群

.....関西学院大学考古学研究会 1

高島町白鬚神社所蔵の須恵器

.....関西学院大学考古学研究会 11

長尾山の古墳群（V）——天満神社古墳——

.....関西学院大学考古学研究会 13

滋賀県蒲生郡日野町における藏王産花崗岩製中世石造美術の分布

——日野町石造美術石材分布調査概要——

.....兼 康 保 明 23

—研究ノート—

近江における鋳物師

.....白 井 忠 雄 39

中世後期東国における土鍋の復活と鉄の流通事情

.....坂 井 秀 弥 47

—論 文—

畿内における初期横穴式石室の一形式

——勝福寺古墳北墳・雲雀丘C北4号墳の位置づけ——

.....岡 野 廉 隆 54

1991. 10

関西学院大学考古学研究会

正誤表

P.	L.	誤	正
3	6	破片が出土している。	破片が出土している。
3	9	堅穴式石室	堅穴式石室
6	11	墳径約2m	墳径約1.2m
9	23	もつ立ちあがりが、の丸い立ちあがりが	もつ立ちあがりが、 17長尾山古墳
14	2	17長尾山古墳群	17長尾山古墳
14	16	31中山莊因古墳	31中山莊因古墳
31	23	高さ215m	高さ215cm
38	7	政太郎氏や、	政太郎氏や、
50	9	(2)精錬鍛冶(3)鍛錬鍛冶	(2)精錬鍛冶(3)鍛錬鍛冶
50	11	鍛冶は	鍛冶は
56	3	勝福寺北墳	勝福寺北墳
68	8	についてについて	について
76	7	C形式あられた	C形式にあられた
78	1	類似	類似
80	23	瑞應寺6号墳	伊勢の瑞應寺6号墳
72	8-9-11	キタハラ5号墳	タキハラ5号墳
73	2	見られないが	見られないのが
75	22	技法をとるとや	技法をとることや
79	27	とらえるが	とらえられるが

—調査報告—

滋賀県高島郡高島町

白鬚神社古墳群

関西学院大学考古学研究会

Iはじめに

滋賀県高島郡高島町所在の白鬚神社古墳群は、過去の分布調査によって2基の存在が確認されていた。当古墳は白鬚神社の敷地内に位置し、将来土地開発等によって破壊される危険性は少ないが、墳丘上に根をはる大木などの、自然の力による損傷が著しい。

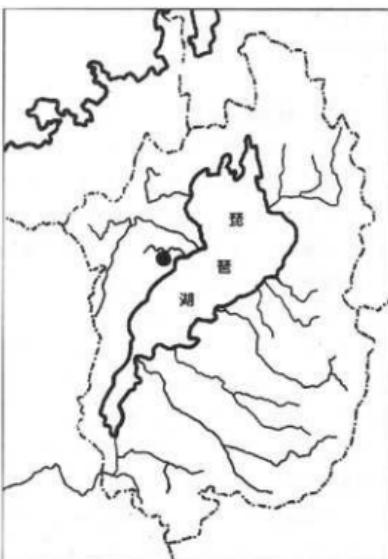
これらの事情から、関西学院大学考古学研究会では、改めて古墳群の規模、墳形などを確認し今後の研究、保存にむけての資料作成を行うことを目的として、今回の調査を行った。

なお、調査にあたり滋賀県教育委員会文化財保護課技師兼康保明氏、高島町教育委員会技師白井忠雄氏のお二人から多大なご協力と、ご指導をいただいた。また、本稿の作成にあたって随時ご教示くださった財大阪文化財センター技師森本徹氏、快く調査の許可を下さった白鬚神社の方々など今回の調査に際してご協力いただいた皆様に、この場をもちまして厚く御礼申し上げます。

<註>

① 滋賀県教育委員会『国道161号線・高島バイパス遺跡分布調査概要報告書』1971年

II 地理的環境



第1図 白鬚神社古墳群位置図

って形成された三角州であり、湖西最大の平野である。この…帯は、行政的には高島郡と呼ばれ高島町はその最南端に位置する。

高島町は、北は安藝川町、西は朽木村、南は滋賀郡志賀町と境を接し、東には琵琶湖が広がる。また高島町の西部を南北に走る比良山系は、鴨川をはさんで東西に分かれ、西側は粘板岩やチャートからなり、白鬚神社の所在する東側は、花崗岩によって形成され、琵琶湖岸で急峻な断崖となってそびえ立っている。この比良山系の東端部の、南側には鶴川集落が形成されており、中央部の岬は明神崎、その南約800mに広がる浜は白鬚浜と呼ばれている。今回調査した白鬚神社古墳群は、この白鬚浜にほどちかい丘陵上に位置する。

<参考文献>

高島町役場『高島町史』1983年

III 歴史的環境

高島町域で確認されている最も古い、人の生活の痕跡は、宿鶴遺跡から出土した縄文時代早期のものと考えられる山形押型文土器である。この土器片は、1979年のほ場整備の際発見された古墳の封土中に混在していたもので、封土の土は宿鶴遺跡の近辺から運ばれたと考えられている。^①また、同遺跡からは縄文時代後期と思われる磨削繩文土器片や石器類も出土している。^②しかしこれらの遺物の生産基盤となるべき遺構については、まったく確認されていない。

弥生時代の遺物としては鴨遺跡から前期土器が出土しているが、遺構に関してはやはりほとんど確認されておらず、現在の南鴨の集落との重複が指摘されるに留まっている。^③

このように、縄文・弥生時代の高島町についてはいまだ不明の点が多いが、つづく古墳時代に関しては、比較的多くの遺物、遺構が知られている。

高島町内では、現在まで前期古墳は確認されていない。確認されている最も古いものは、南部の山麓に所在する押戸古墳群である。

押戸古墳群は、3支群に分かれ26基が確認されているが、そのうちの第3支群第10号墳は、芯石を有する二段築成の帆立貝式前方後円墳で、築造年代は5世紀と考えられている。また第2支群が方墳1基、前方後円墳1基、初期形態の横穴式石室を有する円墳1基を含む円墳9基からなる事も確認されている。

6世紀代に入ると、数多くの古墳が町域に築かれる。中でも代表的なものとして、宿鶴の鴨荷山古墳がある。鴨荷山古墳は全長45mの、南面する前方後円墳で、横穴式石室の内部に安置された家形石棺は上二層の白色凝灰岩で造られている。また、朝鮮半島との深い関係をうかがわせる豪華な副葬品も、1923年の調査時に出土している。その後1978年に現状実測調査が行われ、1980年の県道工事にともなう周濠確認調査では、周濠は確認されなかったが、埴輪片が出土している。なお、当古墳の南方に埋没するかたちで方形墳が存在することが知られており、鴨荷山古墳とともに古墳群を形成すると考えられている。^④

一方、南部の山麓地帯には阪畠、白鬚神社、音羽、押戸、東山の各古墳群がそれぞれ群をなし

ている。

押戸古墳群に関しては先述の通りである。音羽古墳群については、1982年から1984年にかけて石穴支群の7基が発掘調査されている。その結果、6世紀後半から7世紀初頭にわたる古墳群の造営が確認された。多数の遺物も出土し、特に14号墳からは銀象嵌の刀の鍔が検出されている。また、同古墳の北に位置する音羽遺跡では、1985年から3ヶ年にわたる、ほ場整備とともに発掘調査で形象埴輪の破片が出土している。音羽遺跡の北には永田遺跡が位置するが、1987年、遺跡内の馬塚1号墳の発掘調査が実施され、周溝をもつ全長28mの、6世紀代の円墳であることが確認された。^⑦

この時代の集落跡としては、1980年の調査で鴨遺跡から検出された、6世紀代の堅穴式住居が知られており、鴨から宮野にかけて集落が存在したと考えられている。^⑧

＜註＞

- ① 高島町役場『高島町史』 1983年
- ② ①と同じ
- ③ ①と同じ
- ④ 高島郡教育会『増補 高島郡誌』 1972年
- ⑤ 関西学院大学考古学研究会『滋賀県高島郡高島町押戸古墳群第3支群第10号墳現状実測調査報告』『関西学院考古』第8号 1987年
- ⑥ ④と同じ
- ⑦ 浜田耕作・梅原木治『近江国高島郡水尾村の古墳』(京都帝國大学文学部考古学研究報告第8号) 1923年
- ⑧ 鴨遺跡調査会・高島町教育委員会『鴨柳荷山古墳周辺確認調査－県道小浜・朽木・高島線道路改良工事に伴う鴨遺跡発掘調査報告書一』 1981年
- ⑨ ①と同じ
- ⑩ 高島町教育委員会『音羽古墳群』－石穴支群調査概要報告－ 高島郡高島町大字音羽所在』(高島町文化財資料集-3) 1984年
- ⑪ 高島町教育委員会『高島郡高島町音羽遺跡』「ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』(高島町文化財資料集-10) 1988年
- ⑫ 高島町教育委員会『高島郡高島町水田遺跡』「ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』(高島町文化財資料集-9) 1987年
- ⑬ ①と同じ

IV 調査の経過

当研究会は1988年8月に白鬚神社古墳群の1号墳および3号墳の実測調査を行った。翌89年8月、1号墳の石室実測調査を、11月には2号墳の墳丘測量調査を実施した。

調査の経過は以下の通りである。

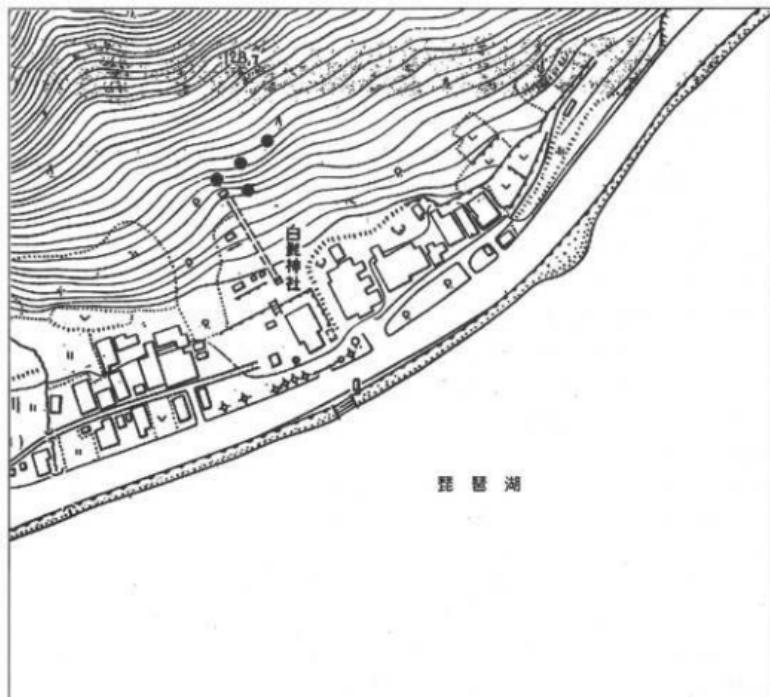


- | | | |
|------------|------------|----------|
| 1. 鳴稻荷山古墳 | 2. 鳴遺跡 | 3. 永田遺跡 |
| 4. 東山古墳群 | 5. 拝戸古墳群 | 6. 音羽遺跡 |
| 7. 四十八跡古墳群 | 8. 白鬚神社古墳群 | 9. 菩提古墳群 |

第2図 周辺の遺跡分布図

調査日誌抄

1988年 8月 1日	8月22日～25日
墳丘測量のための平板ポイントを設定する。	1号墳の石室実測を行う。
8月 2日	8月26日
未設定部分の平板ポイント設定と3号墳の 墳丘測量を開始する。	石室内の細部観察を行う。
8月 3日～7日	11月22・23日
1号墳および3号墳の墳丘測量調査を行う。 その後周辺の地形測量を行う。	4号墳の墳丘および周辺の地形測量を行う。
1989年 8月21日	11月24日
1号墳の石室実測の為の割り付けを行う。	2号墳の墳丘測量を行った後、細部の観察 をもって現地の作業を終了する。



第3図 白嶺神社古墳群分布図

V 調査の概要

(1) 位置と現状

今回調査を行った白鬚神社古墳群は、比良山麓部の、琵琶湖に南面する斜面に位置する。1号墳および2号墳はすでに知られていたが、今回の調査で新たに3号墳と4号墳を確認した。

古墳の周辺は神社の参拝路となっており、四方に小径が走っているが、比較的旧地形を留めていると思われる。なお3号墳に関しては古墳でない可能性もある。

(2) 調査結果

1. 白鬚神社古墳群 1号墳

<墳丘> (第4図)

当古墳は、封土の流出や、横穴式石室をまつる施設として祠を墳丘上に設置していることなどの事情から、原形が損なわれており旧状は明確でないが、墳径約2mの円墳で、墳丘高は南で約3.4mであると考えられる。

<石室> (第5図)

当古墳は前述のごとく石室が白鬚神社の祭祠に使用されているため、保存状態は比較的良好である。しかし、祠の設営に際して開口部及び羨道の一部にセメントによる補強がほどこされており、若干築造時の構造と異なると思われる。以下現状での計測値と観察の結果を記す。

石室は主軸をN-8°-Wにとり、ほぼ真南に開口する横穴式石室である。

玄室は長さが右側壁2.29m、左側壁で2.73m、幅が奥壁で1.9m、玄門部で2.00m、高さ1.07mを測り、これに長さが右側壁で現存3.45m、左側壁で3.83m、幅が玄門部で1.20m、開口部で1.05m、高さが現状で0.90~1.10mの羨道が両袖式に接続している。

玄室の壁は、奥壁の基底石に最も大きな石材を据え、これより上は各段ごとに少しづつ小さくなる石材を2段に積み、石材間の空間を小型の石を積むことで解消している。

側壁については玄室で4~5段、羨道で3段に、各段ごとに高さをそろえながら順に積みあげていったと思われる。玄室全体は緩やかに持ち巡っているが、天井石自身は玄室内から観察できる部分だけでも約1×2mという巨石一石で構成されている。それに対して羨道部はやや小ぶりの2石と、羨道の残り具合から、すでに欠損しているが最低もう1石の、3石程度で構成されていたと考えられる。また石室前壁を構成する石材の上に、もう1石、いわゆるみあげ石が天井にむかって傾斜するように積まれている。

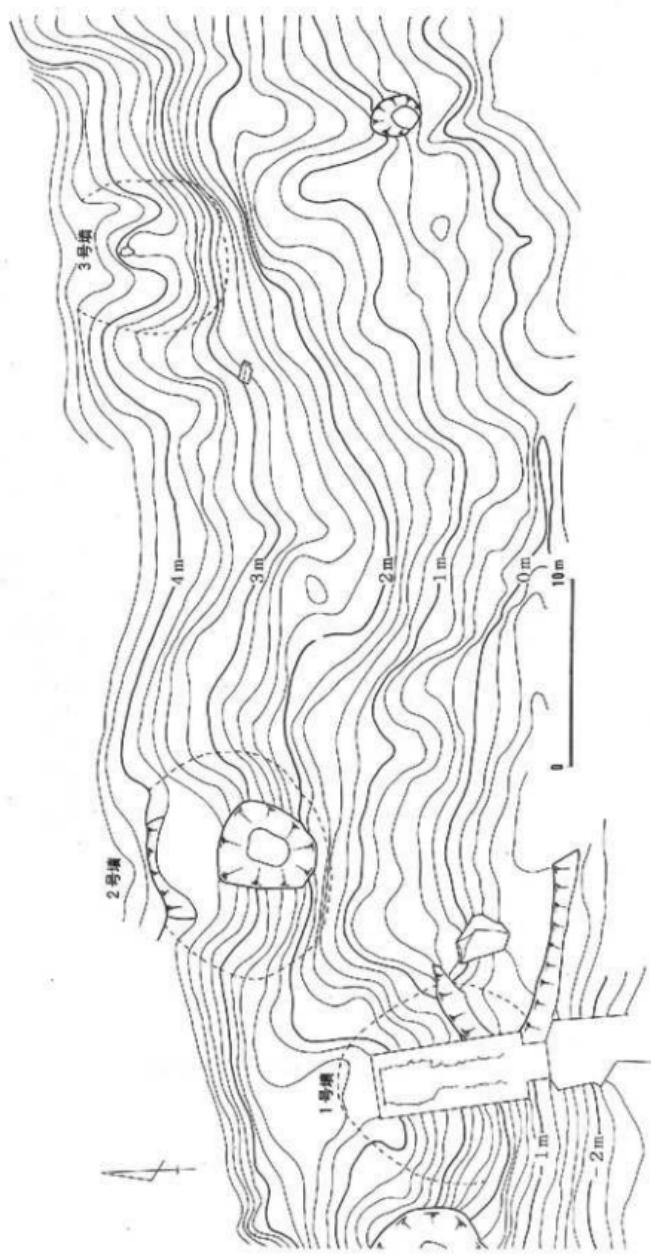
玄室平面は胴張り型を呈し、袖部は左右で形態が異なり、特に右側は強調するかのように比較的大きな石材を基石にすえている。

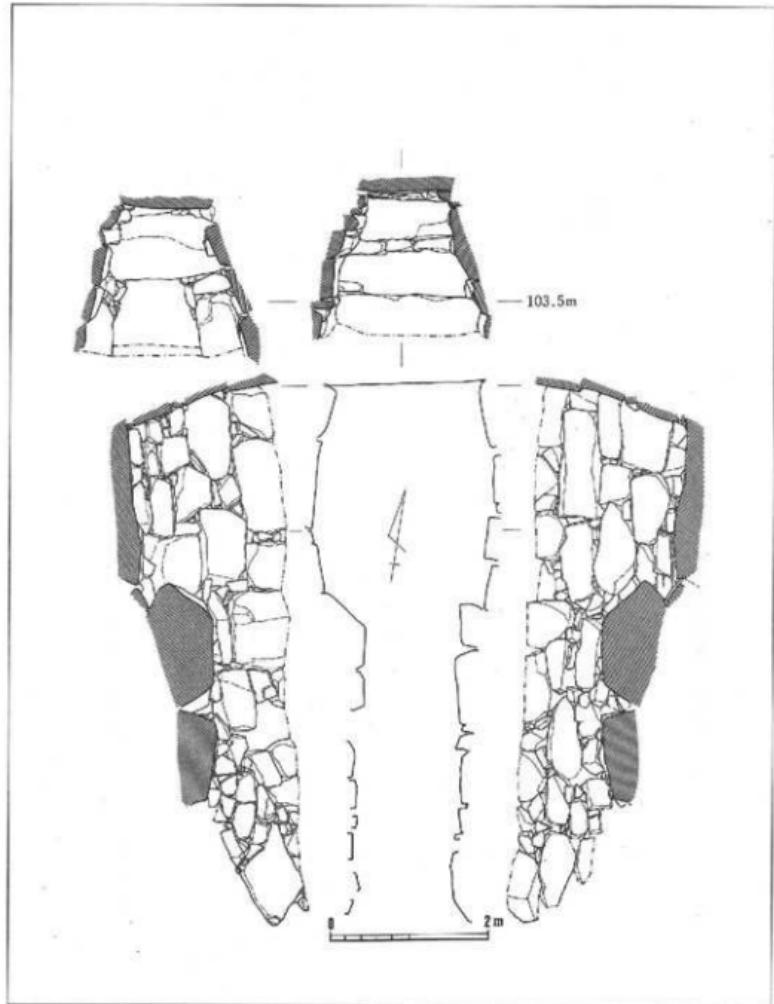
石室を構成する石材は花崗岩であり、1号墳の東の墳裾部に大型の転石がみられるが石室との関連は定かでない。

2. 白鬚神社古墳群 2号墳

<墳丘> (第4図) よび<石室>

第4图 白鹤神社古坟附近测量图





第5図 白樺神社古墳群1号墳石室実測図

当古墳は1号墳の北東に位置する。封土の流出、背後斜面からの土砂流入が著しく、墳丘中央部は大きく陥没して旧状を留めていない。墳丘規模が径10mの円墳で、現存する部分での墳丘高は2.2mである。墳丘の傾斜は南にむかっている。

石室は墳丘中央の陥没にもかかわらず、石材等はまったく確認することができなかった。そのため形態および規模は不明である。

3. 白鬚神社古墳群3号墳

〈墳丘（第4図）および石室〉

3号墳は、2号墳の東方にやや離れて位置する。封土の流出が著しく、墳丘の形態、規模は不明である。傾斜方向は南である。

また石室も、墳頂部に小型の石が露出し、墳丘の南側にも転石が認められるものの、それらが石室石材であるかどうかは明確でなく、規模、形態とも不明である。

4. 白鬚神社古墳群4号墳

〈墳丘（第6図）および石室〉

当古墳は1号墳の南東に位置し、他の3基が並列するように並んでいるのに対し、比較的独立した位置を占めている。墳丘の周囲、北と東の方向に参拝用の徑がひらかれ、墳丘の北側にわずかに削平がみられるが、全体に保存状態は良好ではばく旧状を留めていると思われる。今回の調査結果によると、墳径11mの円墳で、墳丘高は1.2mを測る。

まだほぼ完全に封土が遺存するため石室石材は確認できず、石室の形態および規模は不明である。しかし、今回の調査中、当墳丘上から数点の遺物を表面採集している。

採集遺物はいずれも須恵器の小破片である。そのうち2点は甕の体部で、内面に同心円文叩き目が認められる。もう1点は、杯身の立ちあがりから受け部におよぶ部分で、残存率が低く実測に耐えるものではなかった。しかし立ちあがりと受け部の形は、やや短めで内傾し、丸い端部をもつ立ちあがりが、の丸い立ちあがりが、長めで端部の丸い受け部に続く形で、型式的には6世紀後半ごろのものであろうと思われる。

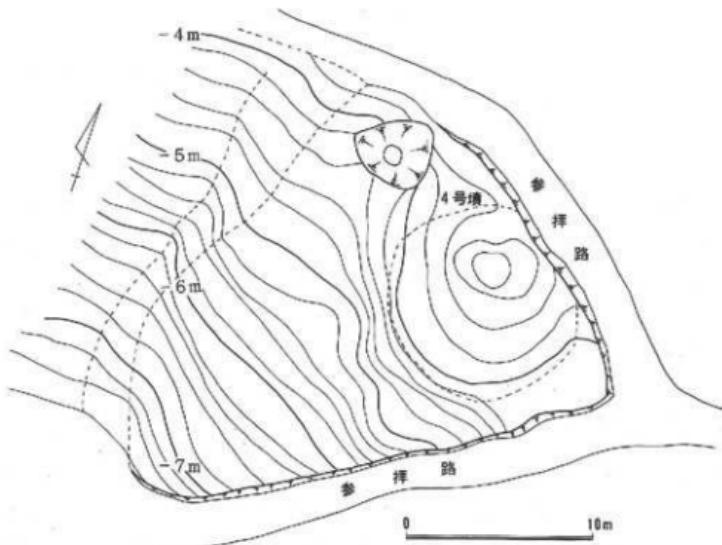
〈註〉

① 中村浩氏の編年による。『和泉陶邑窯の研究』（柏書房 1985年）

VII まとめ

今回の調査の結果、従来の2基に加え、新たに2基、計4基の古墳を確認した。これらの古墳はいずれも墳丘規模10m程度の円墳である。

石室に関しては、現在確認可能なものは1号墳のみであるが、1970年の分布調査時には2号墳の石室も観察可能であったと報告されている。



第6図 白鬚神社古墳群4号墳測量図

報告によると、2号墳の墳丘から露出した石材の隙間から内部の観察が可能であり、石室の規模、種類とともに1号墳と同程度であったといわれる。また、その数十年前までは2号墳も開口しており、当時副葬品はすでに取り去られていたと伝えられる。

1号墳の特徴としては、玄室は胴張り型の平面を持ち、両袖式で、玄室は持ち送っている点、玄室前面は二段で構成され、天井石は巨大な一枚岩である点、玄室の約1.5倍の長さの羨道を有し羨道、玄室ともに側壁石材の表面は比較的平らなものでそろえられている点などがあげられる。

6世紀後半は全国的にも群集墳造営がピークを迎える時代であるが、高島町域においてもほとんどの群集墳がこの時代に營まれている。

以上の点から、当古墳群は6世紀後半に造営されたと考えられる。

なお、当古墳の所在する丘陵斜面は、下りきったところですぐに琵琶湖岸に至り、古墳群は湖をごく近くに見降ろすかたちで造られている。このことから、被葬者集団と琵琶湖との関連一たとえば水上交通一を想定することもできる。しかし現在当古墳群の生産基盤となるような遺構は確認されておらず、想像の域をこえるものではない。

白鬚神社古墳群の周辺には、同じように湖岸に營まれる四十八軒古墳群や阪畠古墳群が存在している。これらの古墳群との比較を含め、より体系的な調査、研究を今後の課題としたい。

(石島)

—資料紹介—

高島町白鬚神社所蔵の須恵器

関西学院大学考古学研究会

1. 経過

関西学院大学考古学研究会が、1988年夏、滋賀県高島町に所在する白鬚神社古墳群を調査していた折、同町教育委員会の技師である白井忠雄氏より、白鬚神社に完形の須恵器が宝物として所蔵されているとのお話をうかがい、その後同神社側のご好意で実測の機会を得ることができた。

以下に紹介する須恵器4点はいずれも白鬚神社本殿の背後に位置する白鬚神社古墳群から出土したと伝えられている。しかし、これらの遺物の出土状況は明確でなく、安易に同古墳群の年代比定の資料として用いることは好ましくない。したがって、白鬚神社古墳群の調査報告とは別稿の形で紹介することとした。

2. 遺物（第1図）

須恵器は杯身二点、短頸壺1点、平瓶1点の計4点で、いずれも完形、あるいはほぼ完形である。

(1)は杯身で、口径は14.8cm、器高は3.3cmと低い。立ち上がりは厚く、直下に下がる形を呈する。端部は丸く、受け部は短い。底部はヘラ削りが、体部および内面全体にはロクロナデが施されている。内面中央部はさらに横ナデによって仕上げられている。胎土はやや荒く、焼成は良好。色調は淡灰色を呈する。全体に整形が不良で、粗品であるとの印象を受ける。

(2)の杯身は(1)よりも小型で、口径は10.2cm、器高は3.5cmを測る。立ち上がりは短く、内傾し、端部は丸くおさまる。受け部は外上方にのびているが短く、先端は丸い。底部は丸く、ヘラ削りが施されており、体部および内面はヘラ削りののち、ロクロナデによって仕上げられている。色調は灰色で、胎土、焼成ともに良好である。

(3)小型の短頸壺で、口径7.4cm、器高10.2cm、口縁は短く、直立し、端部は丸い。肩はやや張りをもち、二条のヘラ書き沈線を有する。底部は丸く、ヘラ削りが施されており、体部および内面は丁寧なロクロナデで仕上げられている。焼成は良好で、胎土はやや荒い。色調は灰色。なお、この短頸壺は肩部にヘラ記号を有する。

(4)は平瓶で、口縁部は漏斗状を呈する。内外面ともロクロナデを施し、端部は丸く、口縁部中間に沈線をめぐらす。器体はヘラ削りののち、体部上側3分の2にカキ目調整を行っている。全体に丸みをおびた器形で稜線を見ないが、底部はヘラ削りにより、平らに仕上げられている。体部上面には、2cm大の円形の粘土粒1個を貼付している。器高は13.6cmで、体部最大径は16cmを測る。胎土、焼成とも良好で、色調は暗灰色を呈する。

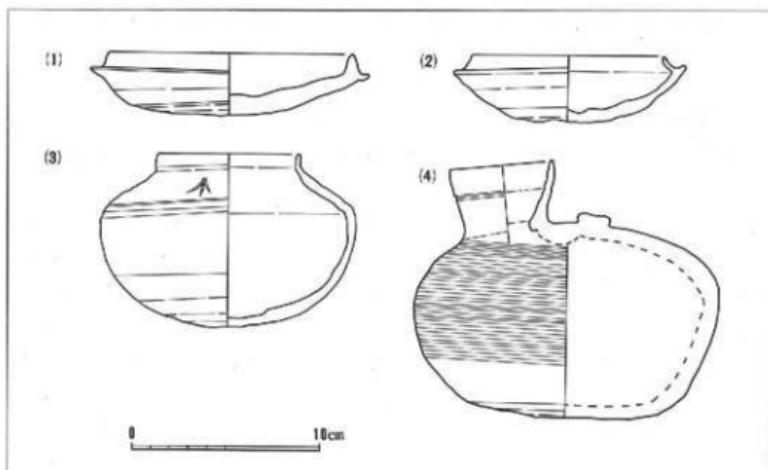
3. 小 結

以上の須恵器4点は、その形態から、6世紀後半～7世紀初頭のものと考えられる。(1)の杯身に関しては、やや古い可能性も考えられるが、他の遺物と比して大きく陥たるものではないと思われる。遺物は白鬚神社古墳群1号墳の推定年代とは同一であるが、先述の通り出土状況が不明である以上、当古墳群の性格を論ずる際の資料として用いることはできない。しかし、周辺地域に存在する同時代遺跡からの出土遺物との比較などを通して、今後何らかの意味づけが与えられることが望ましい。

(石島)

<註>

- ① 中村浩『和泉陶邑窯の研究』(柏書房 1985年)による。



第1図 白鬚神社所蔵須恵器実測図

長尾山の古墳群（V）

—天満神社古墳—

関西学院大学考古学研究会

Iはじめに

関西学院大学考古学研究会は、1976年より、西摂平野、とくに長尾山をフィールドとして研究活動を行い、長尾山に存在する後期古墳群に関する基礎資料として「長尾山の古墳群」と題した調査報告書を続けている。その活動の一環として、今回は長尾山の古墳群のうち、山本古墳群C支群にただ一基現存する天満神社古墳について報告する。

なお、今回の調査にあたり、宝塚市教育委員会の直官憲一氏、芦の芽ケループの古川久雄氏のお二人からご指導、ご協力をいただいた。誌上ではありますが、厚く御礼申し上げます。



第1図 長尾山の古墳群の位置図

II長尾山丘陵周辺の環境

兵庫県南東部と大阪府西部にわたる地域に位置する西摂平野は、北は北摂山地、東は千里丘陵、西は六甲山地に囲まれ、南は大阪湾に面している。この平野の東部に猪名川、西部に武庫川が南流し、それらにはさまれた伊丹段丘は細かな起伏のある洪積台地である。

長尾山丘陵はこの西摂平野の北、北摂山地に属し、そのうちの猪名川以西の、比較的ゆるやかな丘陵である。この丘陵の南の尾根を勅使川、最明寺川、天神川が流れ、猪名川や武庫川と合流する。

この一帯標高50mから200m付近には約200基に及ぶ古墳の存在が知られている。
前期のものとしては宝塚市万籜山古墳と呉の紀年銘鏡を出土した宝塚市安倉高塚古墳があげられる。中期に入ると、前方後方墳といわれる宝塚市長尾山古墳があげられるが、あるいは前期とも考えられており、その他に中山寺境内に「安産の手洗鉢」として知られる舟形石棺が遺存するのみである。後期には、川西市勝福寺古墳や、長尾山丘陵南斜面の数々の群集墳などが築かれる。長尾山の古墳群は川西市豆坂古墳群を東端に、最明寺川以東に雀山山西尾根、雀山東尾根、平井の4古墳群、最明寺川と天神川の間の地域に今回調査した山本および、山本奥の2古墳群が、天神川・勅使川間の地区には中筋山手、中筋山手東の2古墳群がそれぞれ分布している。その他



第2図 天満神社古墳周辺の古墳分布図

1 藤福寺古墳	17 長尾山古墳群
2 豆板古墳群	18 山本古墳群 A 支群
3 雲雀丘古墳群 A 支群	19 同 B 支群
4 同 C 北支群	20 同 C 支群
5 同 C 北支群	21 山本奥古墳群 B 支群
6 同 C 南支群	22 同 C 支群
7 万葉山古墳	23 同 D 支群
8 雲雀山東尾根古墳群 A 支群	24 同 E 支群
9 同 B 支群	25 同 F 支群
10 同 C 支群	26 同 G 支群
11 雲雀山西尾根古墳 A 支群	27 同 H 支群
12 同 B 支群	28 中筋山手東古墳群
13 同 C 支群	29 中筋山手古墳群
14 平井古墳群 A 支群	30 中山寺白鳥塚古墳
15 同 B 支群	31 中山莊園古墳
16 同 C 支群	32 安倉高塚古墳

単独墳として中山寺境内の白鳥塚古墳、八角形墳の中山莊園古墳が存在する。

なお、古墳時代の集落遺跡としては、川西市加茂遺跡、下加茂遺跡、小戸遺跡、柴根遺跡など
が弥生時代から続く遺跡として知られている。

<註>

- ① 宝塚市教育委員会『摂津万葉山古墳』(宝塚市文化財調査報告第7集) 1975年
- ② 梅原末治「小浜村赤鳥七歳出土の古墳」『兵庫県史跡名勝天然記念物調査報告』第14輯 1939年
- ③ 梅原末治「中山寺一其ノ境内ノ古代ノ遺跡遺物」『兵庫県史跡名勝天然記念物調査報告』第17輯 1930年
- ④ 横本誠一「長尾山古墳外形測量調査報告」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第1集 1971年
- ⑤ 川西市教育委員会『川西市史』第4巻 1976年
- ⑥ 岡野慶隆「川西市花屋敷出土の須恵器」『兵庫考古』第14号 1981年
- ⑦ 関西学院大学考古学研究会「長尾山の古墳群Ⅰ」『関西学院考古』第4号 1978年
宝塚市教育委員会『長尾山の古墳群Ⅱ』(宝塚市文化財調査報告第14集 1980年)
- 石野博信「宝塚市長尾山古墳群」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第1集 1971年
- ⑧ ⑦の石野に同じ
関西学院大学考古学研究会「長尾山の古墳群Ⅲ」『関西学院考古』第6号 1980年
- 関西学院大学考古学研究会「長尾山の古墳群Ⅳ」『関西学院考古』第8号 1987年
- 宝塚市教育委員会『宝塚市雲雀山古墳群』(宝塚市文化財調査報告第6集 1975年)
- ⑨ ⑦の石野に同じ
- ⑩ ⑧の宝塚市に同じ
- ⑪ 宝塚市教育委員会『平井古墳群分布調査報告書』(宝塚市文化財調査報告第2集 1975年)に同じ
- ⑫ ⑦の「長尾山の古墳群Ⅰ」に同じ
- ⑬ 宝塚市教育委員会『宝塚市史』第4巻 1977年
- ⑭ ⑬に同じ
- ⑮ 「中山莊園古墳発掘調査報告書」(宝塚市文化財調査報告第18集 1985年)
- ⑯ 【摂津加茂】(関西大学文学部考古学研究第3冊 1967年)
- 川西市教育委員会『川西市加茂遺跡』 1982年
同 『川西市加茂遺跡第81~83・85~91次発掘調査報告』 1988年
- ⑰ 川西市教育委員会『小戸遺跡第6次調査概要(現地説明会資料)』 1989年
- ⑱ 兵庫県教育委員会・川西市教育委員会『柴根遺跡』 1982年
川西市教育委員会『川西市柴根遺跡第一回発掘調査報告書』 1989年

III 長尾山の古墳群の調査・研究動向

—1980年代以降を中心として—

長尾山に数多く分布する古墳・古墳群に関し、ウィリアム・ゴーランドの白鳥塚・山本古墳群の研究をはじめとして、これまで数多くの調査・研究がなされてきた。

当研究会においては、1976年以降、長尾山の古墳群を対象として調査・研究を行ってきたが、以下、最近の調査・研究動向についてのべてみたい。

これまでの調査・研究を総括的に振り返ってみた場合、最も注目すべきものに1959年の石野博信氏による雲雀山東尾根古墳群B支群の発掘調査があげられる。この調査によって一支群を完掘したという点に加え、この支群が七世紀代の無袖の横穴式石室と箱式石棺を内部主体とした古墳で構築されていることがわかり、注目される。またこの調査結果を資料とした論文も数多く発表されている。^①

1980年には、直宮憲一氏が、当時の段階での長尾山の古墳群の特質および展開を総合的に述べられている。^②

1982年には、浅岡俊夫氏によって平井窟跡の調査報告がなされた。^③

同じく1982年に宝塚市教育委員会によって宝塚市埋蔵文化財分布調査が行われた。^④

白石太一郎氏は同年、畿内の群集墳について、消滅時期による三種類の型式分類を行い7世紀の第2四半期から一部第4四半期に消滅する古墳群を「長尾山型」とされ、雲雀山東尾根古墳群B支群を代表例とされている。^⑤

1983・84年には、宝塚市教育委員会によって中山莊園古墳の発掘調査が行われた。^⑥

中山莊園古墳は、天皇陵とされる古墳以外では、数少ない八角形墳で、特異な石室形態から築造年代は7世紀第2四半期初め頃と考えられている。また当古墳は飛鳥地方の八角墳とは性格が異なり、地方的色彩の強いものとされている。^⑦

1984年から1985年にかけて、当研究会は、1979年に統いて雲雀山西尾根古墳群B支群の実測調査を行った。また、同古墳群は1988年に宝塚市教育委員会によって一部の古墳を除いて発掘調査が行われ、各古墳の存在の確認とともに内部主体、築造年代なども明らかにされ、新たな古墳も発見された。^⑧

1987年には奈良大学により山本奥古墳群C・H支群の発掘調査が行われ、C支群はいずれも円墳で、無袖の横穴式石室であり、2基が基本的なペアとなる11基6支群から構成されていることがわかった。H支群1基も墳丘の大部分が破損しているが、無袖の横穴式石室を内部主体にしている。

同じく1987年に、岡野慶隆氏が、1979年に統いて横穴式石室の平面企画としての倍数企画法を畿内の主要な横穴式石室において検討され、古墳の系譜と縁年を考察されており興味深い。^⑨

以上、現在に至るまでの最近の調査・研究動向を述べてきたが、今後も研究会では、引きつづき長尾山に関する調査活動を行う方針である。

<註>

- ① 石野博信「宝塚市長尾山古墳群」「兵庫県埋蔵文化財調査集報」第1集 1970年
- ② 水野正好「雲雀山東尾根古墳群の群構造とその性格」「古代研究」4 (元興寺佛教民俗資料研究所考古学研究室) 1974年
岡田務「畿内における終末期の群集墳の一形態」「古代研究」4
- 木下保明「七世紀型古墳について」「考古学論集」第1集 (考古学を学ぶ会) 1985年
- ③ 直宮憲一「西摂における群集墳の成立とその展開」「藤井祐介君追悼記念考古学論集」 1980年
- ④ 浅岡俊夫「宝塚市平井窓跡分布調査報告」「大阪文化誌」14号 1982年
- ⑤ 宝塚市教育委員会『宝塚市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表』(宝塚市文化財調査報告第8集)
1983年
- ⑥ 白石太一郎「畿内における古墳の終末」「国立歴史民俗博物館研究報告」第1集 1982年
- ⑦ 宝塚市教育委員会『中山莊園古墳発掘調査報告書』(宝塚市文化財調査報告第19集) 1985年
- ⑧ 直宮憲一「西摂における終末期古墳の一様相」「木永先生米寿記念献呈論文集」 1985年
同「宝塚市中山莊園の多角形墳について」「市史研究紀要たからづか」3号 1986年
同「八角墳再考」「網干菅教先生華甲記念考古学論集」 1988年
- ⑨ 関西学院大学考古学研究会「長尾山の古墳群(Ⅲ)」「関西学院考古」6号 1979年
- ⑩ 関西学院大学考古学研究会「長尾山の古墳群(Ⅳ)」「関西学院考古」8号 1987年
- ⑪ 宝塚市教育委員会『雲雀山西尾根古墳群発掘調査報告書』 1991年
- ⑫ 宝塚市教育委員会『宝塚市山本奥古墳群発掘調査(現地説明会資料)』 1987年
- ⑬ 同野慶隆「横穴式石室の平面企画について」「関西学院考古」6号 1979年
- ⑭ 同野慶隆「横穴式石室の平面企画についてⅡ」「関西学院考古」8号 1987年
同「長尾山丘陵における横穴式石室」「市史研究紀要たからづか」6号 1989年



第3図 天満神社古墳位置図

IV 調査の経過

1989年5月3日～4日	7月21日
石室実測のための石室内部の割り付け作業を行う。	墳丘測量を行う。
5月5日～9日・13日～15日	8月6日
石室実測を行う。	雨天のため、ミーティングの後解散。
6月3日	8月12日～13日
墳丘測量のためのレベル・ポイントを設定する。	墳丘測量を行う。
6月18日	8月17日
平板ポイントを設定する。	墳丘測量を行う。
6月25日	10月10日
墳丘測量を行う。	地形測量作業の後、細部の観察、周辺の路査を行う。
7月1日	10月28日
墳丘測量を行う。	これをもって、現地の作業を終了する。

V 調査の概要

(1) 山本古墳群の概要

長尾山丘陵に存在する後期古墳のうち、東端を最明寺川、西端を犬神川によって区画された地域に、山本古墳群および山本奥古墳群が存在する。このうち特に、尾根部にA、B、Cの三つの支群に分かれて分布しているのが山本古墳群である。

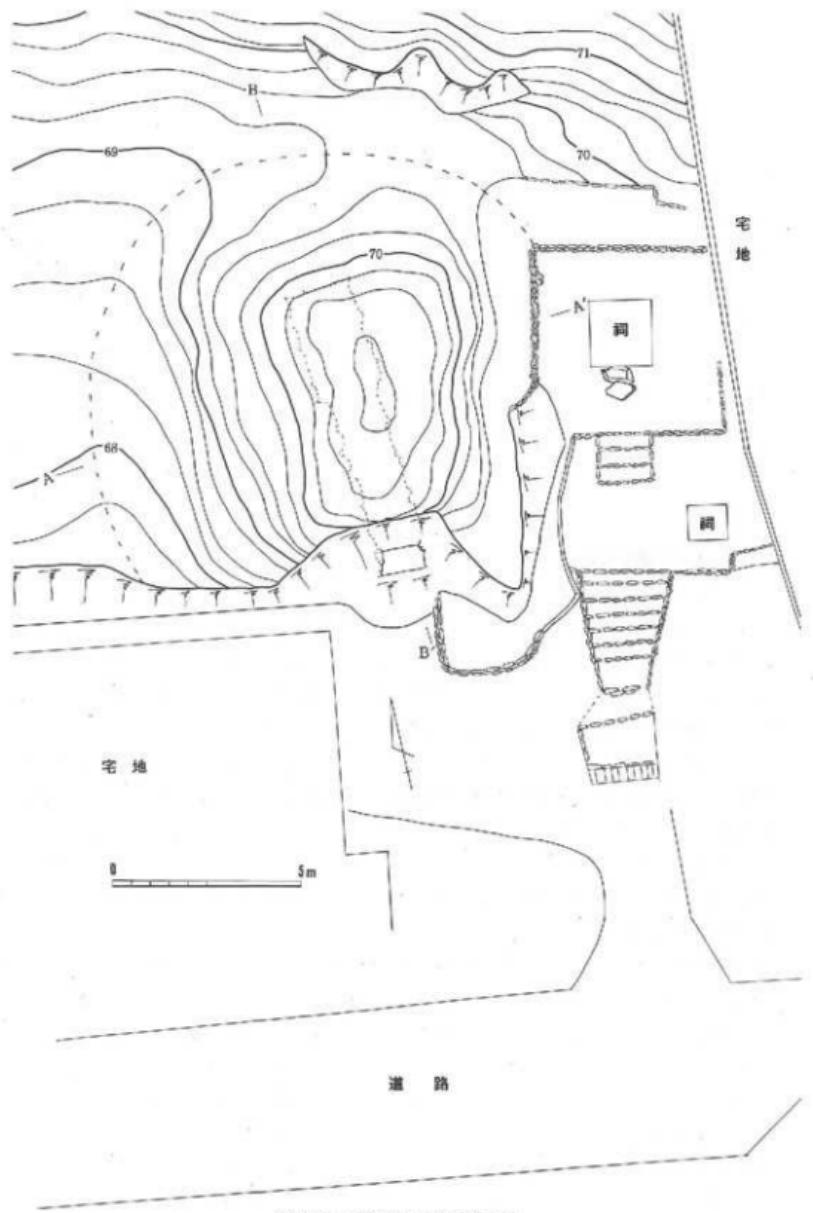
山本古墳群のうち、現存するものはA、Cの各1基のみであり、その他は宅地開発のために消滅している。この、C支群に現存する一基が天満神社古墳である。

山本古墳群の想定復元基數は、A支群5基、B支群11基、C支群4基の計20基である。^①これらはすべて6世紀後半の築造と考えられている。

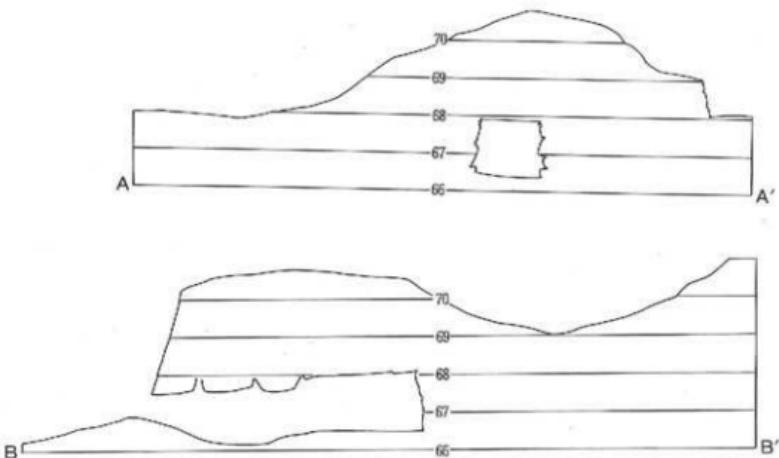
この山本古墳群に関する研究はほとんどなされておらず、古くはゴーランドによる陶棺片を出土した古墳の報告があり、近年では長尾村作成の分布図、石野氏の研究、宝塚市史の記述、そして最も新しいもので、同市の分布地図および文化財資料第5集の記述がある程度である。

<註>

① 宝塚市教育委員会『宝塚市史』第4巻 1977年



第4図 天満神社古墳墳丘測量図



第5図 墳丘断面図

(2) 古墳の調査結果

<墳丘> (第4図・第5図)

墳丘は南北にのびる丘陵の裾部に位置し、その斜面を利用して築かれたと考えられるが、東・西・南の三方向に宅地、神社境内などの造成による地形の改変を受けており、ほとんど旧状を留めていない。とくに南側の削平は著しく、内部主体を切り取る形で、石室羨道部が露呈している。東・西の両側も、比較的ゆるやかにではあるがやはり削平をうけている。

以上のように三方向に削平を受けることで、墳丘は一見方墳状を呈するが、現存する北側の状況から、この古墳の墳形は円墳であり、標高69.25mに基底線をおくと考えられる。その規模は径約14m、高さ1.5mである。

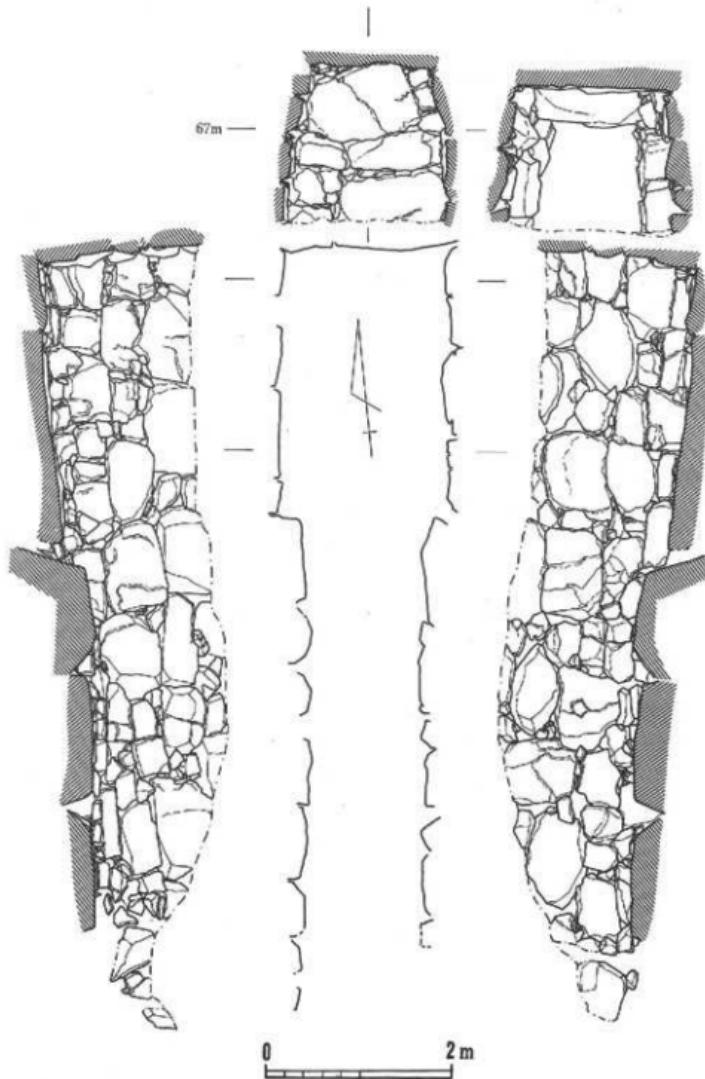
<石室> (第6図)

石室は宅地造成の際、羨道の一部が切り取られ、また開口部からの流土が堆積しているが、石質の保存状態は比較的良好である。

石室は主軸をN-6°-Wにとり、南に開口する横穴式石室である。その規模は、玄室幅が奥壁で1.7m、玄門部で1.82m、玄室長2.72mの玄室に幅が玄門部で1.37m、開口部で1.11m、長さが右側壁で5.24m、左側壁で5.14mの羨道が付随するものである。現状高は玄室で約1.5m～1.6m、羨道で約1.4m～1.5mを測り、開口部では流土のため約0.7mとレベルがあがっている。

石室の平面は、玄室でやや台形気味の長方形をなし、奥壁幅にくらべ、玄室長が短いのが特徴である。玄室はゆるやかに持ち送っている。

石室の構築法でみると、3段積みの奥壁は2段目までは各2石で構成され、三段目に大型の石一石を積んでいる。



第6図 天満神社古墳石室実測図

側壁は、玄室では三一四段積み、羨道では二一三段積みで構成されており、基底部と二段目まではやや大型の石を用い、天井石、石ごとの隙間を人頭大の栗石、割り石で解消している。

天井石は玄室で2石、羨道部は3石で構成されているが、側壁の状況から築造当初もう一石存在したと考えられる。

VII まとめ

今回調査を行った天満神社古墳は、山本古墳群C支群に現存する唯一の古墳である。そのため群単位の調査は不可能であったが、今回の調査についてまとめてみると、

- (1) 天満神社古墳は最明守川と天神川に区画された地域の尾根裾部に位置する径約14m、高さ5mの円墳である。
- (2) 内部主体は南に開口する両袖式の横穴式石室で、規模は約8mである。当古墳は奥壁幅に比べ玄室長が短く、長さ／幅の比率は1.5に過ぎないのが特徴である。
- (3) このような玄室の比率をもつ古墳は、他の長尾山丘陵の古墳では、雲雀丘C北4号墳の1.6^①と中筋山手東2号墳の1.5のみである。
- (4) 石室の形態から、当古墳の築造は6世紀末頃と考えられる。

なお、山本古墳群の測量データとして、1897年にウィリアム・ゴーランドが行った調査の記録が残されているが、その石室の数値が当石室と近いものであることから、天満神社古墳自身のデータであるか、あるいは同様の企画をもつ古墳が山本古墳群内に存在したとも考えられる。

<註>

① 関西学院大学考古学研究会「長尾山の古墳群」『関西学院考古』4号 1978年

② 宝塚市教育委員会『宝塚市史』第4巻 1977年

—調査報告—

滋賀県蒲生郡日野町における 藏王産花崗岩製中世石造美術の分布

—日野町石造美術石材分布調査概要—

兼康 保明

1.はじめに

鈴鹿山麓に近い滋賀県蒲生郡日野町藏王が、近江の中世石造美術製作的一大拠点であることを提唱したのは田岡香逸氏であった。田岡氏は、湖東に分布する石造美術の、構造形式や細部の手法を精密に分析し、比較検討することから、藏王に石造文化圏の核となる花崗岩の「石切場」があることを、仮説として浮かび上がらせた。

田岡氏が石造美術から仮説として導きだした、藏王における中世石材工業の実態を、私は考古学の立場から生産遺跡として実証すべく、藏王の産石地である「かったい谷」の調査を昭和61年に行った。その調査の結果、藏王産の花崗岩（細粒黒雲母花崗岩）が、地元では「米石」とよんでいる、結晶粒の細かい、きわめて特徴のある石材であることに気づいた。そこで「かったい谷」の石材調査以後は、産石地に近い蒲生郡を中心に、藏王産の「米石」を用いた石造美術の分布を確認することに努めてきた。今回ここでは、田岡氏によって石造美術の調査がまとめられ、しかも藏王の石材産地から最も近い、蒲生郡日野町内における米石製の石造美術の分布について報告したい。

2. 調査の方針

藏王産の「米石」を用いた中世石造美術全体については、大小の組み合わせ式五輪塔や、尊像や石塔等を彫った室町時代後期の小形板碑まで含むと、その量は膨大な数におよぶ。そのため現状では、これらを含めての、正確な数字をつかむことは困難である。そこで、比較的資料が限定され、分布の明らかな、鎌倉・南北朝時代を中心とした石造美術について、石材の検討を行った。

調査の基礎資料としては、田岡氏が藏王の石造文化圏設定の資料にされた、「近江の石造美術」³および「民俗文化」発表の論考を用い、現物を再調査し、石質については肉眼観察によって判定した。ただ、資料によっては、風化あるいは石材の表面が地衣類によっておおわれ、観察の困難なものもあったが、概ね日野町内にある藏王産の石材を用いた石造美術の分布と傾向は把握できたものと思う。

3. 日野町主要中世石造美術一覧

ここにあげた個々の石造美術は、石材を検討することが目的であるが、参考までに各石造美術の形式的検討を行ううえでの必要事項についてのみを付記した。したがって、各々の写真、拓本、計測値等について、さらに詳細なデータを必要とする場合は、「近江の石造美術」³を利用願い

^⑤たい。以下、資料の順序は『近江の石造美術』3に準じる。

【凡例】

- 掲載した各石造美術の石材は、すべて広義の花崗岩である。米石とあるものは、藏王産の細粒黒雲母花崗岩で、それ以外の産地のものは×印で標示した。藏王産の石材以外の花崗岩の産地や製品の分布については、岩石学的な検討を行って後、改めてその結果を報告したい。
- 石塔の基礎は、注記の無い場合は、輪郭と格狭間をもつものである。
- 資料番号は、『近江の石造美術』3の通し番号である。
- ここで用いる年代観は、田岡氏の時代区分による。

鎌倉時代 前期 文治改元（1185）～文暦元年（1234）

中期 文暦2年（1235）～弘安7年（1284）

後期 弘安8年（1285）～建武改元まで

南北朝時代前期 建武改元（1334）～文和3年（1354）

中期 文和4年（1355）～応安7年（1374）

後期 応安7年（1374）～応永改元まで

室町時代 前期 応永改元（1394）～応仁元年（1467）

中期 応仁2年（1468）～天文10年（1541）

後期 天文11年（1542）～慶長末年（1615）

- 番号以外にアルファベットをつけたものは、『近江の石造美術』3刊行以後に、田岡氏の調査した資料による。

- 分布調査時の見解は、備考として記入した。

① 層 塔

- 猫田・桜林寺 平安後期～鎌倉初期 ×
基礎・笠4層
- 中山西・金剛定寺 建長4年（1252） ×
塔身・笠3層
(備考) 隣接する池のはとりに、基礎と思われる石材が半ば埋没している
- 寺尻・旧長徳寺 乾元2年（1303） ?
基礎に孔雀文・三茎蓮・開花蓮
県外所有・未調査
- 小御門・旧淨教寺 元応元年（1319） ?
基礎に三茎蓮・開花蓮
県外所有・未調査

② 宝 塔

- 村井・蒲生貞秀墓 鎌倉後期（1290年頃） 米石

		基礎（壇上積式）に孔雀文・宝瓶三茎蓮（二面）・開花蓮
6. 藏王・寂照寺	鎌倉後期（1300年代はじめ）	米石
	相輪を除き完存。基礎に宝瓶三茎蓮（二面）・開花蓮	
7. 西明寺・西明寺墓地	乾元2年（1303）	米石
	基礎（壇上積式）に正面のみ宝瓶三茎蓮	
8. 別所・盛願寺	鎌倉後期（1310年頃）	米石
	基礎	
9. 猫田・禪林寺	正和4年（1315）	米石
	相輪上部を欠失するほか完存。基礎に宝瓶三茎蓮（二面）・開花蓮	
10. 鐘掛・正法寺	正和4年（1315）	米石
	完存。基礎に正面のみ開花蓮	
11. 西大路・晴明寺	元応在銘（1319～1320）	米石
	塔身	
12. 西明寺・西明寺墓地	鎌倉後期（1320年頃）	×
	完存。	
13. 杉・地蔵堂横	鎌倉後期（1330年頃）	米石
	基礎に宝瓶三茎蓮（三面）・散蓮	
14. 安部居・念法寺	南北朝中期（1360年頃）	×
	相輪を除き完存	

③ 宝瓶印塔

15. 藏王・寂照寺	鎌倉後期（1290年頃）	×
	相輪を除き完存	
	基礎に宝瓶三茎蓮（四面）、塔身に仏座像（四面）、笠の隅飾は一弧素面	
16. 北脇・法光寺	鎌倉後期（1295年頃）	×
	基礎に開花蓮・散蓮（三面）、上部は反花式	
17. 佐久良・仲明寺墓地	右塔（寄せ集め）	
基 础	鎌倉後期（1295年頃）	米石
	基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮（二面）・宝瓶二茎蓮・開花蓮、上部	
	は反花式	
笠	南北朝前期（1340年頃）	米石
	隅飾は輪郭付二弧で内部は素面	
18. 日田・野田克躬家	（寄せ集め）	
基 础	鎌倉後期（1295年頃）	？
	基礎（壇上積式）、上部は反花式。木調査	
笠	南北朝中期（1365年頃）	？

- 隅飾は輪郭付二弧で内部は素面。未調査
19. 北畠・八幡神社 正安元年（1299） 米石
各部破損するが完存
基礎（壇上積式）、塔身に種子（四面）、笠の隅飾は輪郭付二弧
20. 十揮寺・比都佐神社 嘉元2年（1304） 米石
相輪を除き完存。
基礎に孔雀文（二面）、開花蓮、塔身に種子（四面）、笠の隅飾は輪郭付三弧で内部は素面
21. 三十坪・誓光寺 鎌倉後期（1305年頃） ×
基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮（三面）、開花蓮
22. 中山東・地藏堂 鎌倉後期（1305年頃）（×）
笠の隅飾は輪郭付二弧で内部に八面とも種子
(備考) 埋没した笠を確認しているが、それが田岡氏の報告しているものかどうか、掘り出して確認していない
23. 村井・信楽院墓地 基 碇 鎌倉後期（1300年代後半） 米石
基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮、開花蓮（二面）、散蓮、上部は反花式
塔 身 延慶元年（1308） 米石
蓮華座上に月輪を線刻し、内部に種子（四面）
笠 鎌倉後期（1310年代後半） ×
隅飾は二弧素面（三面）、輪郭付二弧で内面に蓮華座、種子を配した月輪
24. 村井・晴明寺 鎌倉後期（1308年頃） 米石の可能性もある
塔身は蓮華座に月輪を線刻し、内部に種子（四面）
25. 杉・大屋神社 鎌倉後期（1310年頃） 米石
完存。
基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮（二面）、塔身に種子（四面）、笠の隅飾は輪郭付き二弧で内部は素面
26. 大庭・大庭寺墓地 鎌倉後期（1310年頃） ×
基礎に正面のみ宝瓶二茎蓮、上部は反花式
27. 猫田・共同墓地 鎌倉後期（1310年頃） ×（花崗斑岩か）
基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮、開花蓮（三面）
28. 村井・信楽院 鎌倉後期（1310年頃） 米石
(備考) 基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮（三面）、開花蓮、上部は反花式
元は墓地にあったが、現在は境内の秘仏堂にある。
29. 中在寺・広照庵 正和元年（1312） 米石

- 基礎（壇上積式）の上端に矩形の奉籠孔を彫る
30. 中在寺・津島神社 鎌倉後期（1315年頃） 米石
- 基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮（三面）、上部は反花式
31. 三十坪・清徳寺 鎌倉後期（1315年頃） ×
- 笠の隅飾は輪郭付二弧で各面蓮華座上の月輪に種子
- a. 村井・僧樂院 文保元年（1317） 米石
- 基礎（壇上積式）に獅子文、上部は反花式。基礎の一面のみの残欠
32. 西明寺・西明寺墓地 鎌倉後期（1318年頃） 米石
- 笠の隅飾は輪郭付二弧で、内部に二弧の隅飾形・内部素面（三面）
33. 河原・妙楽寺跡 鎌倉後期（1317年頃） ×
- 相輪上半を欠失する他は、完存。
- 基礎（壇上積式）に開花蓮（三面）・散蓮、塔身に種子（四面）、笠の隅飾は二弧素面
34. 内池・摂取院墓地 元応2年（1320） 米石
- 相輪を除き完存
- 基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮（三面）、塔身に種子（四面）、笠の隅飾は輪郭付三弧で内部は素面
35. 中在寺・津島神社 元応3年（1321） 米石
- 相輪の上下を欠失する他は、完存。
- 基礎（壇上積式）、塔身に種子（四面）、笠の隅飾は輪郭付二弧で内部は素面
36. 小谷・宗福寺墓地 鎌倉後期（1320年頃） 米石
- 基礎（壇上積式）、上部は反花式。笠の隅飾は二弧素面、相輪は請花・宝珠を欠失
37. 三十坪・雪光寺墓地 鎌倉後期（1320年頃） ×
- 塔身に仏座像・線刻した月輪内に種子（三面）
38. 中山東・隆護寺 鎌倉後期（1320年頃） ×
- 笠の隅飾は一弧素面
- （備考） 位牌堂の改築時に鎌倉後期頃と推定される米石製の笠が出土している。
詳細な観察は行っていないが、笠の隅飾は輪郭付三弧で内部は素面と思われる。
39. 西明寺・西明寺 鎌倉後期（1320年頃） 米石
- 塔身に線刻した蓮華座と月輪内に種子、蓮華座の無いもの（三面）
40. 北脇・法光寺 嘉慶2年（1327） 米石
- 相輪の上部と笠・塔身の一部を欠失するが完存
- 基礎（壇上積式）に孔雀文・三茎蓮（二面）・開花蓮、塔身に種子、

	笠の隅飾は輪郭付二弧で内部は素面
41. 西大路・法雲寺	鎌倉後期（1328年頃） 米石
	笠の隅飾は輪郭付三弧で内部は月輪を配する
42. 別所・盛願寺	嘉慶4年（1329） 米石
	基礎（壇上積式）、笠の隅飾は輪郭付二弧で内部は素面
43. 小谷・宗福寺	鎌倉後期（1330年頃） 米石
	基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮、塔身に線刻した月輪内に種子、種子のみ二尊
44. 中山東・隆讃寺	鎌倉後期（1330年頃） ×
	笠の隅飾は一弧素面
45. 下駒月・西照院	鎌倉後期（1330年頃） ×
	塔身に仏像と線刻した蓮華座・線刻した月輪内に線刻した蓮華座と種子（三面）
(備考)	『近江の石造美術』3には、安楽寺境内とあるが現状は隣接する西照院境内にある。
46. 大窓・慈眼院	暦応2年（1339） 米石
	完存。基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮（三面）・散蓮、塔身に種子（四面）、上部は反花式。笠の隅飾は輪郭付二弧で内部は素面
47. 野出・託仁寺	南北朝前期（1345年頃） ×
	特殊宝瓶印印塔。基礎（壇上積式）、上部は反花式。笠の隅飾は輪郭付二弧で内部は素面
48. 音羽・雲迎寺	貞和5年（1349） 米石
	相輪上部を欠失する他は完存。
	基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮（三面）、上部は反花式。塔身に種子（四面）、笠の隅飾は輪郭付二弧で内部は素面
49. 中之郷・正住寺	南北朝前期（1350年頃） 米石
	基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮（二面）・散蓮、上部は反花式。笠の隅飾は輪郭付二弧で内部は素面
(備考)	『近江の石造美術』3にある觀音堂は、改修され正住寺とよばれいる。
50. 下迫・清寿庵	南北朝中期（1365年）以降 ×
	基礎に開花蓮（三面）、上部は反花式
51. 里口・八幡神社	貞治5年（1366） 米石
	相輪を除き完存。
	基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮（三面）・散蓮、塔身に種子（四面）、笠の隅飾は輪郭付二弧で内部は素面

52. 増田・善善寺 貞治6年(1367) 米石
完存。
基礎(壇上積式)に宝瓶三茎蓮(二面)、塔身に種子(四面)、笠の隅飾は輪郭付二弧で内部は素面
(備考) 各部とも花崗岩であるが、相輪の石材のみ塔身・基礎と異なる
53. 中山西・会所横 南北朝後期(1375年頃) 米石
基礎(壇上積式)に宝瓶三茎蓮(三面)、四隅に細い素弁の反花を刻出
54. 下迫・清寿庵 南北朝後期(1375年頃) 米石
基礎(壇上積式)、反花式。笠の隅飾は輪郭付三弧で内部は素面
55. 木津・薬師堂横 康暦元年(1379) 米石
完存。
基礎(壇上積式)に宝瓶三茎蓮(三面)・散蓮、塔身に種子(四面)、笠の隅飾は輪郭付二弧で内部は素面
56. 三十坪・賢光寺墓地 南北朝後期(1380年頃) 米石?
基礎(壇上積式)に宝瓶三茎蓮(三面)・散蓮、反花式。
57. 西大路・法雲寺 南北朝後期(1380年頃) 米石
基礎(壇上積式)に宝瓶三茎蓮(四面)
58. 藏王・閑空寺 南北朝後期(1380年頃) 米石
相輪の一部を欠失する以外は完存。
基礎(壇上積式)に宝瓶三茎蓮・開花蓮(二面)、塔身に種子(四面)、笠の隅飾は輪郭付二弧で内部は素面
59. 熊野・熊野共同墓地 南北朝後期(1380年頃) 米石
基礎(壇上積式)に宝瓶三茎蓮(四面)、笠の隅飾は輪郭付三弧で内部は素面
60. 中山西・会所横 南北朝後期(1385年頃) 米石
基礎(壇上積式)に宝瓶三茎蓮(三面)
61. 原・原共同墓地 明徳元年(1390年頃) 米石
相輪を除き完存。
基礎(壇上積式)に宝瓶三茎蓮(二面)・開花蓮、塔身に種子(四面)、笠の隅飾は輪郭付三弧で内部は各面蓮華座上の月輪に種子
62. 原・原共同墓地 南北朝後期(1390年頃) ×
基礎(壇上積式)に宝瓶三茎蓮・開花蓮(三面)、反花式。
63. 十桿寺・比都佐神社 南北朝後期(1390年頃) 米石
基礎(壇上積式)に宝瓶三茎蓮(三面)
64. 錦掛・正法寺墓地 南北朝後期(1390年頃) 米石

		基礎（壇上積式）に三茎蓮（四面）
65. 鎌掛・原古野地蔵堂	南北朝後期（1390年頃）	？
		基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮（三面）。未調査
66. 奥の池・八幡神社	室町前期（1400年頃）	米石 相輪が折れているが完存。
		基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮（四面）、塔身に種子（四面）、笠の隅飾は輪郭付三弧で内部は各面蓮華座上に月輪
67. 安部居・念法寺	室町前期（1400年頃）	米石 相輪が折れているが完存。
		基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮（三面）、塔身は素面、笠の隅飾は輪郭付三弧で内部は素面
68. 佐久良・仲明寺墓地（中塔）		
基 築	室町前期（1400年頃）	米石
		基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮（三面）
笠	鎌倉後期（1330年頃）	米石 隅飾は輪郭付二弧で内部は各面月輪
69. 蓬草寺・信楽寺	室町前期（1410年頃）	米石？ 相輪を除き完存。
		基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮（三面）、上部は反花式。塔身に種子（四面）、笠の隅飾は輪郭付二弧で内部は素面
70. 杉・地蔵堂	室町前期（1430年頃）	米石
		基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮（四面）
71. 大窪・大型寺墓地	室町前期（1440年頃）	× 完存。 基礎上部は反花式。塔身に種子（四面）、笠の隅飾は輪郭付二弧で内部は素面
72. 中山西・金剛定寺	室町中期（1450年頃）	× 笠の隅飾は輪郭付二弧で内部は素面
73. 中在寺・広照庵墓地	室町中期（1500年頃）	？ 基礎上部は反花式。塔身に種子（四面）
	(備考)	不明
74. 中山西・中山西共同	永正元年（1504）	米石
墓地		相輪を除き完存。 基礎（壇上積式）に三茎蓮（四面）、上部部は反花式。
		塔身に種子（四面）、笠の隅飾は輪郭付二弧で内部は素面
75. 佐久良・仲明寺墓地（左塔）		

基 础	室町後期（1530年頃）	米石
	基礎（壇上積式）に宝瓶三茎蓮（三面）	
笠	室町前期（1430年頃）	米石
	隅筋は輪郭付三弧で内部は素面	

④ 五輪塔

76. 小谷・宗福寺墓地	鎌倉後期（1330年頃）	米石
	塔身残欠、正面に種子	
77. 西明寺・民 家	南北朝前期	？
	塔身残欠、正面に種子、奉龍孔有り。未調査	
78. 中在寺・広照庵	南北朝前期（1345年頃）	
	笠・・・× 塔身・・・米石	
	塔身正面に種子、笠は素面	
(備考)	『近江の石造美術』3では、「塔身に対して笠がやや小さすぎる感があるが、この程度のものは珍しいことではない。石質がよく似ているし、構造形式も一致しているから、まず、一具のものと見て差し支えがないであろう」としているが、笠と塔身の石材は異なっており、寸法の違いも含めて2基の寄せ集めと考えるべきであろう。	
79. 村井・晴明寺	室町後期	米石
	基礎に種子（四面）	
80. 西大路・法雲寺	伝蒲生賢秀墓 室町後期	×

⑤ 板 碑

81. 村井字音谷・杜氏墓	延慶3年（1310）	×
地	碑伝形板碑	高さ215m
82. 上野田・正覚寺	応安3年（1370）	米石？
	亜形式板碑	高さ176cm
83.. 錦掛・笠尾峰	明応9年（1500）	？
	亜形式板碑	高さ204cm
84. 西明寺・西明寺	室町後期	？
	弥陀…尊板碑	高さ46cm 三茎蓮有り
(備考)	不明・未調査	
85. 西明寺・西明寺	室町後期（1535年頃）	米石
	宝座印塔板碑	高さ76.6cm
	薄肉彫りした宝座印塔の基礎は壇上積式で、三茎蓮を刻出	
(備考)	背面に原石肌を残す。河原石か？	

86. 西明寺・西明寺 室町後期（1535年頃） 米石
 双宝座印塔板碑 高さ47.2cm
 （備考） 背面に原石肌を残す。河原石か？
87. 別所・盛願寺 室町後期（1545年頃） 米石
 弥陀二尊板碑 高さ51cm 格狭間に宝瓶三茎蓮

⑥ 笠塔婆

88. 中山西・会所横 室町後期（1530年頃） 米石
 基礎・塔身・笠より成る
 塔身に地藏立像を二軸並べる。笠は一部欠失

⑦ 無縫塔

89. 別所・盛願寺 室町後期（1540年頃）
 請花・・・米石か？ 塔身・・・×
 重制無縫塔

⑧ 石燈籠

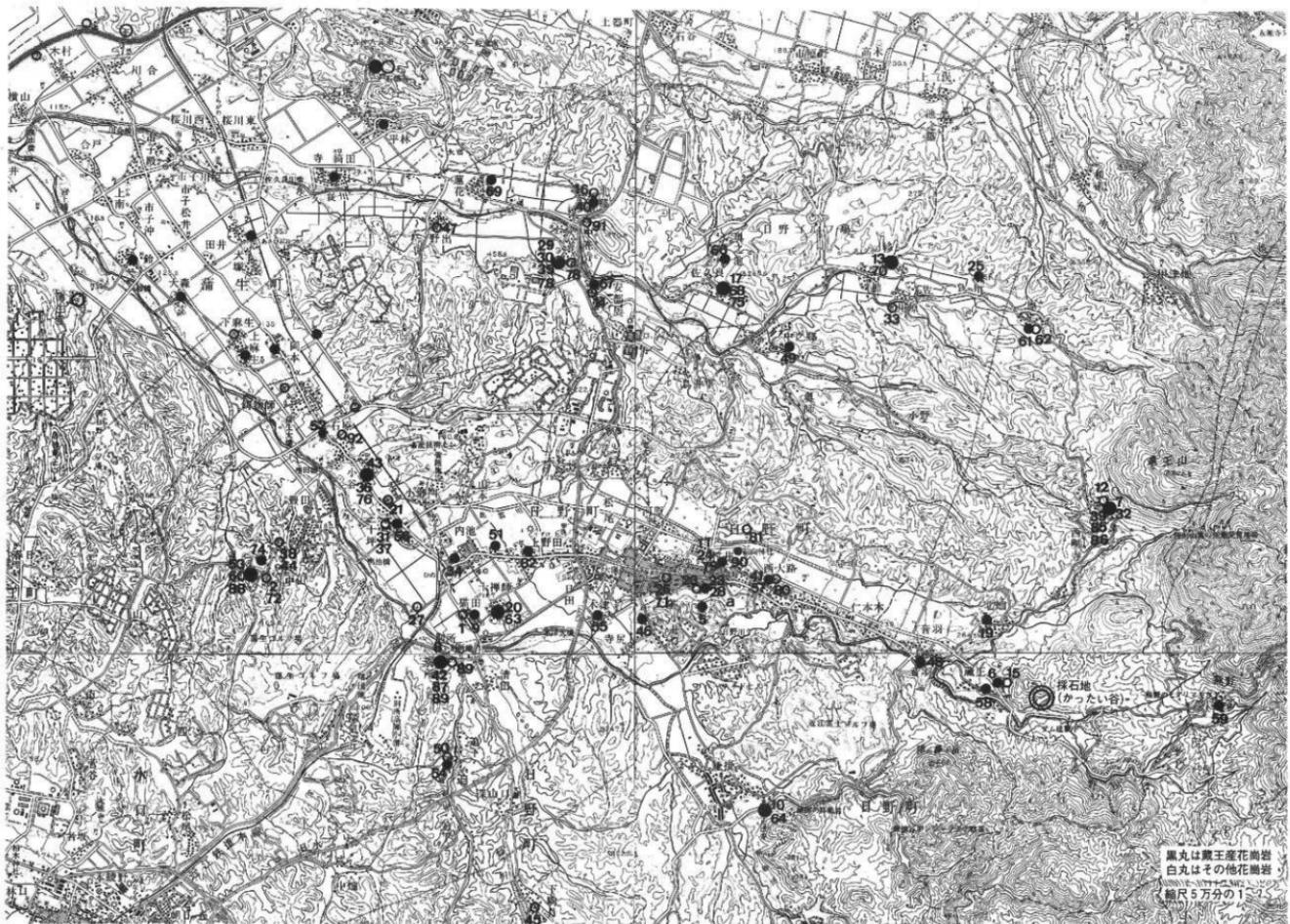
90. 村井・総向神社 鎌倉後期（1330年頃） 米石か？
 （備考） 風化のため観察が難しい
91. 北脇・諸木神社 南北朝前期（1340年頃） ×
92. 石原・石原神社 貞和4年（1348） ×（花崗斑岩）
93. 河原・妙楽寺跡 応安2年（1369） ?
 （備考） 盗難

4. 石造美術の種類と米石

日野町の主要な石造美術の石材は、さすがに産石地に近いだけあって、藏王産の細粒の花崗岩——「米石」が顕著である。しかし一方では、藏王付近では見られない、粗粒の花崗岩もかなり使用されている。粗粒の花崗岩については、まだ产地の比定はできていないが、石造美術の石質の観察によれば、少なくとも「米石」以外に2種類は認められそうである。

藏王と対極を成す、蒲生郡の西に位置する近江八幡市岩倉産の花崗斑岩を用いた石造美術は、鎌倉・南北朝時代のものはほとんど日野町内に入っておらず、わずかに2例を教えるのみである。しかも、日野川流域の、岩倉に近い町域の西部に限定されている。

この一覧表だけをみると、層塔や板碑、石燈籠など石造美術の種類によっては、一見、「米石」を使用していないような印象を与えるものもある。しかしそれぞれ、隣接地域に所在するものや、日野町内でも残欠まで調べると、いちがいにそうとは言えないことが判る。例えば層塔は、隣接する日野川流域の蒲生町上麻生の旭野神社にある元徳元年（1329）七重塔が「米石」で、日野町



内においても、杉の地蔵堂横で、幅36cm、高さ19cmの軸部と一体になった笠の残欠がある。また、石燈籠についても、やはり日野川流域では蒲生町岡本の高木神社にある正和4年（1315）石燈籠^⑨が、「米石」である。また、八日市市神田の河原御河辺神社にある延慶4年（1311）石燈籠^⑩も「米石」の特性を生かした優品である。ただ、鎌倉・南北朝時代の板碑のように、1m以上の長さのあるものについては、中世の花崗岩の採石が岩盤からの切出しではなく、玉石によるものであることを考えると、藏王のかったい谷にある玉石では、本格的な板碑に用いるような、長い石材を採るのに適した玉石は求めにくい。そのため、本格的な板碑の製作には不向きであったことは言うまでもない。しかし、室町後期の小形板碑については、その大きさの石材が十分に得られることから、一覧表以外にも多数の資料がみられる。

結論から言うと、現状では日野町内で確認されていなくても、鎌倉・南北朝時代には、藏王の石材は、種類を特定して用いられるのではなく、層塔、宝塔、宝篋印塔、五輪塔、石燈籠などすべての石造美術を製作している。

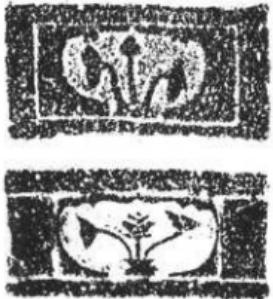
5. 藏王産石材使用の上限

日野町内の鎌倉・南北朝時代の主要な石造美術の石材を検討した結果、すでにみてきたように、藏王産の「米石」以外にも、粗粒の花崗岩がかなり使用されていることが判った。中でも注目されるのは、採石地のかったい谷に近い藏王の寂照寺境内にある鎌倉時代後期でも早い時期に考えられている、笠に一弧素面の開脚をもつ宝篋印塔（15）である。この宝篋印塔の石材は、「米石」ではなく、粗粒の花崗岩である。ところが同じ境内に並列して建つ宝塔（6）は、「米石」で作られている。田岡氏の編年観によれば、寂照寺の宝篋印塔（15）は宝塔（6）より、わずかに年代的には古いものと見られているが、良質の石材産地の膝元に、藏王以外の場所で産出する石材で作った塔があることは、どう考えれば良いのであろうか。

ちなみに、日野町内の石造美術を年代順にみると、鎌倉時代後期の1290～1300年頃を上限に「米石」が使われはじめ、それ以前の鎌倉時代中期より古いもの（1、2）については、「米石」の使用が認められない。日野町に隣接する蒲生町内においても、「米石」を用いた石造美術は、現在のところ鎌倉後期の1300年を越す例は知られていない。

このように「米石」を用いた石造美術の上限を求めて行くと、鎌倉時代後期の1290～1300年より以前の作品は見られず、まだ石造美術に藏王の石材の利用がなされていなかったと考えるべきであろう。さらに、石材の違いだけでなく、寂照寺宝篋印塔（15）の基礎にみられる三基蓮のつくりが、そう時間を経ずして現れる、「米石」を用いた宝塔や宝篋印塔などの石造美術の基礎に彫られた三基蓮と、タッチ、茎の太さ、宝瓶の形態などが異なっていることも注意すべき点であろう。タッチや茎の太さについては、石材の質によって左右される要素もあるが、宝瓶の形態の相違については、石工の意匠の違いとしか言いようがない。寂照寺宝篋印塔（15）にみられる三基蓮は、格狭間内における宝瓶の口縁部の配置、三基蓮のタッチ、茎の太さなど、伊香郡木之本町西徳寺にある弘安10年（1287）七重塔の基礎に見られる三基蓮と同系統のものである。

おそらく藏王で石造美術の製作がなされる以前から、別な石工とそれに関連する采石地があっ



第2図 二種の三基燈

(上) 藏王・寂照寺(15)1290年頃

(下) 佐久良・仲明寺墓地(17)1295年頃

たのだろう。そのため、日野においても両者が並存して石造美術を供給していた時期があったため、寂照寺境内にみられるように、きわめて近い時期に作られた、石材と細部部の意匠の異なる石造美術が残されたのであろう。

こうしてみると、藏王産の石材を用いて、細部の装飾に独自の意匠を生みだした藏王の石工が活躍するのは、現存する石造美術からみて、すでに述べたように鎌倉後期の1290~1300年頃からで、14世紀の第一四半期にはもう日野町内では、他の石材を用いた石造美術を圧倒するようになり、1300年~1400年の100年間に、名実共に藏王の石造文化圈を形成するようになってゆく。

6. 藏王産石材使用の終焉

日野町各所にみられる、室町時代の小形の組み合わせ式の五輪塔や板碑については、ここでは詳細に触れるつもりはない。しかし、藏王の「米石」の使用については、これまでからの調査で得た感触からすれば、鎌倉時代後期より中世を通じて、一貫して室町時代後期まで使用され続けている。「近江の石造美術」3に収録された資料では、(85)~(87)の小形板碑がこれに該当する。三基燈を施さない小形板碑は、藏王を中心にかなりの数が認められる。製作工程については、背面に原石の皮膚を多く残すもので、かって湖東北部の資料でその製作工程を復元したものと共に通する。皮肌の風化はスペベしており、川原石の肌を思わせるものも多く、犬上郡甲良町金屋の金山神社境内の小形板碑の木製品群のように、日野川の河原石の利用も考えられる。また、小形の組み合わせ式の五輪塔の残欠については、町内全域にその分布がみられるが、基礎の比率などからみて、時期的には室町後期よりも遅るものも含まれていると見て良いだろう。このような記年銘をもたず、装飾などに特色の無い、量の多い石塔については、編年観の確率と実態の把握が今後に望まれる。

そうした中で、一石五輪塔は大半が花崗岩製であるにもかかわらず、「米石」を用いたものは全く目につかなかった。角柱状の一石五輪塔ではあるが、近江では犬上郡甲良町金山神社例にみられるように、河原石からでも製作されており、小形板碑から推定される藏王付近に露頭している土中の玉石や、日野川の河原石からでも十分製作が可能なはずである。ところが「米石」の一石五輪塔がみられず、また一石五輪塔と同時代の、一石五輪塔に代わる石塔をも製作していないことは、室町時代後期の第3四半期頃を境に急速に衰退し、第4四半期には藏王での石造美術の製作が途絶えたとしか考えようがない。さらに時代が下がって、記年銘の入る江戸時代初期の墓標を見ても、花崗岩の利用は続いているが、やはり「米石」を用いたものは見られず、近世では「米石」の使用は無くなっている。

こうした事から考えて、藏王での採石と加工の終焉は、一石五輪塔が盛行し始める、室町時代

後期の16世紀後半頃と推定され、「米石」が中世だけで利用の止まる石材であることが改めて証明された。

＜註＞

- ① 田岡香逸『近江の石造美術』3（民俗文化研究会 1976 大津）
田岡香逸『近江の石造美術』6（民俗文化研究会 1973 大津）
田岡香逸「近江魔王の石造文化園 付石大工平景吉の系譜とその作品」1～5（『民俗文化』195～199 滋賀民俗学会 1979～1980 大津）
- ② 長野保明「中世の花崗岩石切場を訪ねて——滋賀県蒲生郡日野町藏王勝手谷跡査定記——」（『関西学院考古』8 関西学院大学考古学研究会 1987 西宮）
- ③ 田岡香逸『近江の石造美術』3（民俗文化研究会 1976 大津）
- ④ 田岡香逸「近江の石造美術補遺——獅子文と組紐式三基連——」1～4（『民俗文化』242～245 滋賀民俗学会 1983～1984 大津）
⑤ 註③と同じ。
- ⑥ 広義の花崗岩とは、石造美術研究者が呼んできた湖東地域の「花崗岩」の意味で、岩石学的にみると、この中には、花崗岩以外に花崗斑岩（近江八幡市岩倉産）や湖東流紋岩なども含まれている。
- ⑦ 田岡香逸「近江の石造美術補遺——獅子文と組紐式三基連——」1（『民俗文化』242 滋賀民俗学会 1983 大津）
- ⑧ 田岡香逸「近江蒲生郡の石造美術——蒲生町上麻生と日野町中寺・安部居・村井——」（『民俗文化』219 滋賀民俗学会 1984 大津）
- ⑨ 田岡香逸「近江蒲生郡と甲賀郡の石造美術」（前）（『民俗文化』130 滋賀民俗学会 1974 大津）
- ⑩ 近藤豊・渡辺順頃「建造物・石造遺宝・工芸」（『八日市市史』第2巻 八日市市役所 1983 八日市）
- ⑪ 長野保明「赤人寺石造七重塔の新知見——蒲生郡蒲生町下麻生——」（『滋賀考古学論叢』3 滋賀考古学論叢刊行会 1986 大津）
- ⑫ 田岡香逸『近江の石造美術』3（民俗文化研究会 1976 大津）
- ⑬ 田岡香逸「近江湖北・湖東の石造美術」（『民俗文化』50 1967 大津）
- ⑭ 長野保明「彦根市妙楽寺遺跡出土の湖東流紋岩製小形板磚と製作工程」（『滋賀文化財だより』121 滋賀県文化財保護協会 1987 大津）
- ⑮ 長野保明「金山神社境内未完成石塔群の調査」（金山石造品調査団 プリント 1987 大津）
⑯ 註⑮と同じ。
- ⑰ 例外として、藏王金峯神社の手水鉢が江戸時代後期のものとしてある。石材は切出しではなく、玉石加工である。

＜追記＞

藏王のかつたい谷の調査から、もう5年が経った。その間、石材产地の調査として、犬上郡甲良町金屋、近江八幡市岩倉、坂田郡伊吹町曲谷などで、中世石造美術の石材加工技術の調査を行

ってきた。そのかいあって、ようやく鎌倉・南北朝時代の硬質石材の採石、加工の技術について、私なりの見通しがたってきた。さらに、近世前期の様相を製品から多角的にとらえようと、日下水連洞俱楽部同人の米田実氏とともに、蒲生郡安土町淨嚴院墓地の調査を継続中である。こうした一連の調査の中から生まれた問題点を踏まえて、再びなつかしい藏王の石材の評価を試みたものが、本報告である。

調査にあたっては、全て現物を検討したが、はじめて近江式装飾文の研究をまとめられた川勝政太郎氏や、その研究を深めるべく、さらに近江で中世石造美術の精査を行われた田岡香逸氏の、長い研究活動がなければ、中世石造美術に考古学的な調査法を用いることも難しかっただろうと思う。半世紀近い研究の土台の上に立って、石材調査という目的的限定された調査を行うとき、学恩という言葉を改めて喰みしめ、感謝の気持ちでいっぱいである。また、日野町内の石造美術の調査に当たっては、日野町教育委員会日永伊久男氏より、格別の協力と配慮を得た。記して謝意を表したい。

近江における鑄物師

白井 忠雄

1. はじめに

近年の発掘調査によって、全国的に鑄物師関連遺跡の調査が増加する傾向にある。そこで、ここでは近江における中世から近世の鑄物師集団について述べてみることにする。

2. 近江古代・中世の梵鐘作品

近江古代・中世鑄物師の梵鐘作品は第1表の通りである。この第1表近江の中世鑄物師梵鐘作品表は、梵鐘研究家の第一人者である坪井良平氏著『日本の梵鐘』昭和45年版と、原田一敏氏著『日本金工師名譜』『東京国立博物館紀要第22号』昭和62年刊より橋本鉄男氏が近江の鑄物師に関する資料を抽出され、それを表にしたものである。

原田一敏氏は、近年発見された三重県袋井市教育委員会蔵の參河国滋美郡東絵里岡寺の平治二年（1160年）梵鐘銘に「大鑄師藤原満長、小鑄師息長法修、同定房」と、滋賀県志賀町正源寺の正応三年（1290年）梵鐘銘に「大工矢田部宗次」があることから、坂田郡に息長姓と矢田部姓の鑄物師が居住していたと推定している。

また、息長系鑄物師は14世紀以降は八田部氏や樋氏を含めて発展していたようである。

愛知郡にあっては、瀬東町長村鑄物師が愛知郡東漸寺鐘に「大工長村道鉄」の名前をとどめている。

つぎに、八日市鑄物師であるが、八日市の金屋には中世以来鑄物師が活動していく、よく知られている。

ここで全国に目をむけると、平安時代の末から鎌倉時代にかけて、河内鑄物師が活躍する時代がある。彼らは時の朝廷の灯籠供御人となり、朝廷用の灯籠を進上し、併せて全国自由に鑄物の営業をする特権を獲得して、権力を拡大し組織を広げる。

しかし、その後にあっては河内鑄物師だけでなく、全国的に地元の鑄物師が生まれて活躍したり、室町時代から戦国時代にかけては、全国統一的な灯籠供御人の組織はほとんど解体状況へと向かう。16世紀の天文年間に蔵人所小舎人となった真継家は、解体状況にある鑄物師集団の再組織化に乗り出し成功をおさめて、江戸時代を通じて鑄物師集団の頂点に立つのである。

つぎに考古学の遺跡・遺構・遺物を通して、古代末から中世の近江における鑄物師の足跡をながめてみることにする。

考古学からみた古代末から中世にわたっての主要な铸造関係遺跡は、大津市長尾遺跡・大津市坂本八条遺跡・愛知郡秦荘町軽野正境遺跡・栗太郡栗東町辻遺跡等が挙げられるが、他にも遺物だけが発見されている遺跡もある。

名 称	在 銘	年 代	備 考
袋井市教育委員会蔵鐘 鎌師息水法修同定房	大工矢田部宗次	12世紀	三重原
滋賀郡志賀町正源寺鐘	大工弥田部家	13世紀	
浅井郡上許曾神社鐘	橋末經		
伊香郡横山大明神鐘	治工左衛門尉橋末安	14世紀	滋賀県
大津市葛川明王院鐘	大工長村道欽		
伊香郡黒田觀音鐘	大工兵衛尉八田部共義		
愛知郡東漸寺鐘	大工落合河八田部守友		
坂田郡春照村泉神社鐘			
今堀日吉神社洪鐘			
蒲生郡十桙寺鐘			
神崎郡三河部大明神鐘			
甲賀郡惣社油日大明神鐘			
長命寺鈔口			
大工八日市太兵衛			
16世紀	16世紀	16世紀	橋氏は息長系
タ	タ	タ	
現在していない。			

第1表 近江の中世鎌物師梵鐘作品

(橋本鉄男「近江の鎌物師伝承」「近江の鎌物師」2 1988年刊より作成註-1)

長尾遺跡は大津市滋賀里町字長尾に所在する。この遺跡の発掘調査は昭和52年に実施された。調査によって平安時代前期の梵鐘鋳造施設及び瓦窯を検出した。(図-①)

梵鐘鋳造遺構は2基検出され、第2号遺構と呼ばれている鋳造遺構の平面は隅丸方形で東西約3.1m、南北2.9m、深さ中央で0.8mの規模を有する。埋土からは木炭・灰・焼壁片・銅渣の固着した焼壁片・銅滓焼土・瓦・須恵器・蝶が出土した。坑底には東西2条の溝があり、両端に円形ピットが設けられ、北側両隅に柱穴跡があり南壁両隅には斜めにピットが設けられている。坑底にある東西2条の溝は梵鐘鋳造の際、鋳型を固定するための掛け跡である。

第4号遺構は平面が方形で南北3.2m、東西3.6m、深さ南辺1.5m、西0.9mの規模がある。坑底には第2号遺構と同じく3条の浅い溝があり、両端にピットが設けられている。坑内の四隅には柱穴が検出された。埋土からは木炭・灰・梵鐘鋳造と考えられる鋳型片・銅渣の固着した焼壁片・羽口片・銅滓・土器片・蝶などが出土した。

第1号と第3号遺構とよばれているのは溶解炉施設である。

第1号遺構は平面が梢円形で長径2.9m、短径1.1m、深さ0.7mの規模を有する。坑底はU字状で埋土から木炭片・銅滓がみとめられた。

第3号遺構は平面が梢円形で長径が約4mである。埋土は第1号遺構と同じく木炭・灰・土器類・銅滓・焼壁片が多量に出土した。梵鐘鋳造関係の出土遺物としては梵鐘の乳が第3・4号遺構から出土した。

長尾遺跡の性格については、報告者である林博通氏が、検出された梵鐘鋳造掘込み施設（第2・4号遺構）と銅溶解炉施設（第1・3号遺構）は第1号と第2号遺構・第3号と第4号遺構がセット関係にあると考え、掘込み施設については、「四隅のピットは高架物の柱穴、数条の浅い溝は丸太材を固定した跡とみられ、鋳型の定盤の下にかました丸太と対応する形に鋳型の上端に置いた棒を繋縛することによってそのズレをなくしたものと考えられる。そして、溝両端のピットはその作業のための空間を作り出すためのものかもしれない—中略—2組の鋳造遺構のうち1組は崇福寺用、1組は梵祇寺用と解することも可能であり、南滋賀庵寺との強い関連もうかがわれるため、ここで鋳た梵鐘は南滋賀庵寺に供給した可能性も考慮する必要があろう。」と説得力のある説明をしている。

私は梵鐘鋳造の基本は寺域内外で行うのが本来のすがたであろうと考える。近年の調査例からみると、奈良県東大寺・兵庫県多可寺・福井県豐原寺などからは寺域内外から鋳造遺構が確認されている。坂本八条遺跡は大津市坂本に所在する。

坂本八条遺跡からも長尾遺跡と同じく梵鐘鋳造遺構が検出されている。遺構は隅丸方形を呈した土坑で南北1.7m、東西1.96m、深さは現高0.4mの規模を有する。坑底からはやはり掛け跡として東西に2本の溝があり両端にピットが設けられ四隅に柱穴が検出されている。埋土よりめずらしく梵鐘の竜頭部分の鋳型片と銅滓・焼土・炭等が出土した。(図-④)

坂本八条遺跡の調査者である吉水真彦氏は、鋳型を据え溶解した湯を注ぎ込んで梵鐘を鋳造する施設であることを確認し、平安時代後期の年代をあたえている。

輕野正境遺跡は愛知郡桑莊町大字輕野字正境に所在する。昭和52・53年の発掘調査によって鋳

造工房群が検出され、鋳型や錫の羽口他が出土した。操業年代については足裏型坑内の版築状土層内から室町時代末期の信楽焼の陶器の破片が含まれていたことから同時代であろうと考えられている。^⑩

この遺跡の性格については報告者である近藤滋氏は「中世の一梵鐘等の鋳造工場跡と考えられ、第1次調査での諸土坑群は長尾遺跡では未確認である鋳造準備をする工房群であり、やや離れた所に溶解坑があり、ここから槽により溶けた銅等が流され、一段低くセットされた鋳造坑の鋳型に致って梵鐘等の大型の製品から作られたと考えられるのである。」と述べられている。

軽野正境遺跡の性格は近くに湖東町の長村がひかえており、長村鉢物師の出吹跡と考えるのが妥当であろう。(図-②)

辻遺跡は栗太郡栗東町大字高野字辻に所在する遺跡である。昭和58年に高野字やどや地区が発掘調査され、そこから炉跡と考えられる構造が4基検出された。出土遺物は鉄滓と鋳型片が確認され、他に黒色土器・土師器・羽釜類がある。出土した遺物より12世紀後葉から13世紀代の年代が想定されている。

この調査結果から調査者である平井寿一氏は、辻村が平安時代末期より「鉄」の操業が営まれていたのではないかとの指摘がされている。

中村遺跡は栗太郡栗東町大字御園に所在する遺跡である。平成元年に調査された地区から2基の溶解炉跡が検出され、1号炉の北側には通風跡と考えられる長方形土壙がある。この土壙には上部にタカラ板を有するタカラ踏み場が施設されていたと想像する。年代としては出土遺物より9世紀前半と考えられる。(図-③)

矢倉口遺跡は草津市東矢倉に所在する古墳時代から中世にかけての集落遺跡である。平成元年度の調査でSE01と呼んでいる井戸跡から鋳型(ナベ)・ルツボ・炉壁片等が出土した。時期としては出土した土器から8世紀中頃から9世紀中頃と考えられる。(図-⑤)

他の鋳造関係遺跡は、古代にあっては大津市瀬田南大萱芋町の鉢物遺跡から和銅錢とルツボが出土したと伝えられている。また、昭和46年に実施された湖西線関係遺跡の大津市南滋賀工区からピット内に焼土とその周辺からフイゴの羽口や鉄滓・銅滓と銅製止め金具の出土をみた。大津市瀬田にある近江国衙からは鍛冶炉20基以上とフイゴの羽口や塊形滓が出土した。大津市錦織遺跡・愛知川町畑田廃寺遺跡などからは鋳造関係の遺物が出土して、野洲町福林寺遺跡・蒲生郡宮井廃寺などからは鍛冶関係の遺物が出土している。

湖北地域にあっても、高月町井口遺跡をはじめ断片的な鋳造関係遺物を見ることができる。これらは、古代末に国衙や郡衙以外の集落にでも鉄や銅の鋳造技術が受け入れられた証であり、今後これらの遺跡の調査が進めばより一層の鋳造技術のあり方が判明するものと思われる。

また、中世の終わりごろから戦国領主層や有力寺社層が金属工房をだきこむ形で発展をつづけるようである。

近江国守護職佐々木氏の被官後藤氏の居館である八日市市後藤館遺跡からは、ルツボが出土し鋳造工房が考えられる。日野町小御門遺跡や野洲町上永原遺跡(在地永原氏の居館)などからも鋳造関係遺物が出土している。

有力寺社層としては安土町浄嚴院に關係した慈恩寺遺跡などで鑄造関係遺物が出土している。これらは、近江國の中世鑄物師の活動に対する少い遺物であって、本來はもっと多くの事例があると考える。それを解明するには、中世の遺跡を調査する際に特に遺物等（鑄造関係）に気くばりながら調査を推し進めるなかにあってはじめて解明されるであろう。

3. 近世鑄物師と宮野鑄物師

近江における近世鑄物師を真継家が作成した『諸國鑄物師名寄記』（文政11年～嘉永5年）から見るとつぎのようである。（図-⑥）

栗太郡辻村鑄物師・滋賀郡和邇南浜村鑄物師・甲賀郡寺庄村鑄物師・蒲生郡八幡多賀村鑄物師・蒲生郡八日市金屋村鑄物師・坂田郡長浜企尾町鑄物師・神崎郡三俣村鑄物師・高島郡宮野村鑄物師の名前が見える。これらに加えて、滋賀郡納村鑄物師・蒲生郡日野町鑄物師・坂田郡小田村鑄物師・坂田郡大久保村鑄物師・坂田郡大野木村鑄物師・浅井郡平塚村鑄物師がいる。

これらの鑄物師集団は、中世以来發展して近世に活躍した諸集団であろうと考えられる。鑄物師集団のあり方を見ていると、湖東から湖北にかけて多く分布している。やはりこれらは鑄物の需要と供給を如実に表しているものであろう。

栗太郡では、辻村を中心に梅木村と高野庄久保村に鑄物師がいた。辻村鑄物師は、中世からの歴史があり、近世になっていちはやく全國に出職・出店をもち、大きく發展した。

甲賀郡では、望月姓の鑄物師がいたことが『諸國鑄物師名寄記』からわかる。

蒲生郡では、八幡多賀村に望月や国松姓の鑄物師がおり、八日市金屋村には田中・松吉・北岡・北沢・堤・金屋・釜吉などの姓の鑄物師がいる。

この八幡多賀村鑄物師と八日市市金屋村鑄物師との間には、ひとつの論争がある。それを『八日市市史』第3卷—近世—（昭和61年刊）から見てみよう。

亨保四年（1719）、蒲生郡豊浦村（蒲生郡安上町）にある天台宗東南寺の鐘鑄造をめぐって栗太郡辻村から八幡多賀村（近江八幡市）に出店を出していた国松伊兵衛と、金屋村鑄物師と間で、各村の庄屋・領主から真継家、京都町奉行所にまで至る、以後九年間に及ぶ大論争が展開される。

本文を続けると長くなるので要約するが、この大論争については『治工由緒記』（石川県立郷土資料館所蔵武村家文書）に辻村側に残された記録がある。

東南寺の鐘鑄造をめぐって、寺が費用見積書を受け取ったところ、八幡多賀村の伊兵衛に決定した。これに対し、八日市市金屋村鑄物師が勅許鑄物師として蒲生郡の總領職を司っているのだから、銘文をこちらに入れることを主張はじめた。

そして争いは、「八幡伊兵衛・辻村」と「金屋・真継家」という図式へと發展していったのである。この争いによって、真継家の鑄物師支配およびそれに基づく各郡の總領職を認めるかにしばられた。

そして、結果的に辻村側は享保11年（1762）から翌12年にかけて、一切の課役のないことを条件に真継家と和解し、その支配下に入った。

東南寺の鎌銘は

御免御鉄師

八幡住

国松伊兵衛藤原重定

蒲生郡豊浦

仏立山正覺院

東南寺現住

大阿闍梨法印秀憲代

亨保四歳亥八月

(『近江蒲生郡史』五卷)

とある。

東南寺釣鐘銘文事件で辻の鎌物師仲間が真難家と和談することになるのである。

日野町鎌物師には富田姓のものがいる。日野町の近くには蒲生町の竹田神社（旧蒲田神社）がある。竹田神社は多くの鎌物師から信仰を集めているが、これは竹田神社の所在地が蒲生町の鎌物師にある村社であるがゆえ信仰を集める結果となつたのであろう。

神崎郡では八日市金屋村鎌物師が所在している。この金屋村鎌物師は蒲生・神崎両郡に多くの鉄造品を残している。五個荘町三俣には徳田氏一系統の鎌物師がおり、西澤氏が安政年間（1854～59）に徳田氏を継ぎ現在も占い形式で梵鐘等の鳴り物の鉄造を行っている。

愛知郡湖東町長村に黄地・中村・藤村姓の鎌物師がいた。長村鎌物師の歴史も古く中世からであろう。長村では黄地氏が現在も金誂堂という鉄造所を営んでいる。

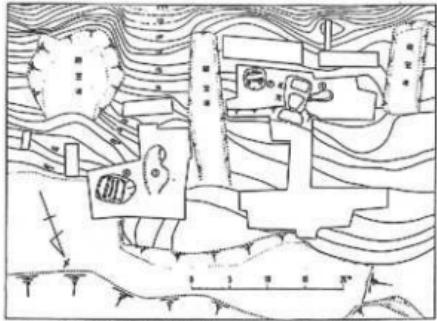
坂田郡では、長浜金屋の西川姓の鎌物師がいる。山東町では息長系鎌物師の系譜持つ矢田部姓の鎌物師が在居していたと推測される。

湖西地方には、滋賀郡和邇南浜村に我孫子姓の鎌物師が住んでおり、高島郡では官野村に白井・閑・笠屋姓の鎌物師が活動していた。

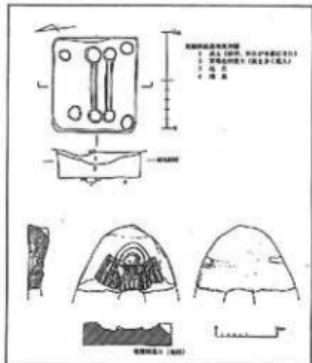
ごく大づかみに近江の近世鎌物師をながめてきたが、彼らの鉄造作品はほとんどが第2次世界大戦の当時に供出されており、いまひとつその実態が把握しづらい面がある。

そもそも鎌物師は、古代において銅鐸・銅剣・銅鉢・銅戈・銅矛等を鉄造しており、その形態は遍歴の鎌物師集団であった。律令期になると鎌物師は大藏省典鉄司に属すが不明なことが多い。古代末から中世になると丹治姓の鎌物師は「土鎌物師」と呼ばれる組織を作り、また、広階姓の鎌物師は「廻船鎌物師」の組織を作り諸国にその力を広げていった。これらは「座」と呼ばれる中世の職人集団に合うものである。しかし、これらの集団に属さない遍歴の鎌物師も活動をつづけている。

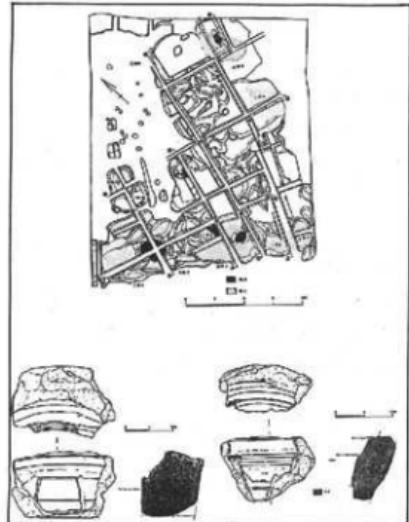
これらは当時の社会不安が如実に職人集団にもあらわれていると思う。ちなみに近江の鎌物師がどのような行動をとっていたかについては定かでない。しかし、全国的にみると鎌倉時代後期



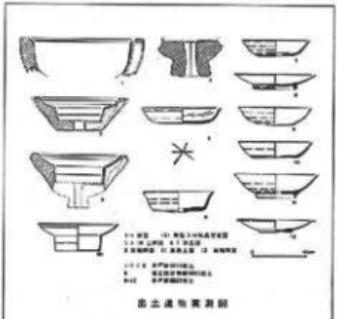
①大津市長尾遺跡遺構配置図 ①⑥・銅冶解炉施設
(註-3より) ②④・梵鐘鋳造掘込み施設



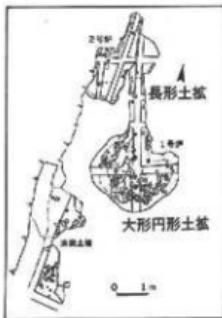
④大津市板本八条遺跡梵鐘鋳造遺構と鋳型
(註-4より)



②栗莊町輕野正燒遺跡遺構配置図と鋳型 (註-5より)



⑤草津市矢倉口遺跡出土鋳型等 (註-7より)



③栗東町中村遺跡鋳造遺構図
(註-6より)



⑥近江における近世鋳物師分布図

になると鎌物師職人の定着がみられるようになり、近江国でも中世遺跡から出土する鎌造関係を遺物はこれらの傾向を示すものかもしれない。鎌物師集団は庄園・有力領主ならびに寺社層の支配下に組みこまれていったのである。

しかし、16世紀に入ると職人所小舎人で御蔵の職であった真継家が全国の鎌物師の編成に成功し大きな権力を有することになった。

近江の山村鎌物師は遅くまでその組織に入ろうとしないが、東南寺釣鐘銘文事件（1763）以降は真継家の支配に含まれていくようである。

今後の研究課題としては中世遺跡から出土する鎌造関連遺物がいかなる鎌物師集団の手によって鎌造された商品かを解明することによって遷歴する鎌物師の実像がみえてくるものと考える。

<註>

- ① 滋賀県教育委員会『近江の鎌物師』1・2 (滋賀県教育委員会 1987・88年)
- ② 原田一敏「日本金工師名鑑」(『東京国立博物館紀要』第22号Ⅱ 1987年)
- ③ 林博通「長尾遺跡の梵鐘鉄跡」(『古代研究』27 助元興守文化財研究所 1984年)
- ④ 吉水真彦他 「坂本八条遺跡発掘調査報告」『滋賀里・穴太地区遺跡発掘調査報告書Ⅲ』(大津市教育委員会 1985年)
- ⑤ 近藤滋他『輕野正境遺跡発掘調査報告書』(栗莊町教育委員会 1979年)
- ⑥ 『埋藏文化財発掘調査1989年度年報』(栗東町文化体育振興事業団 1990年)
- ⑦ 谷口智樹「矢倉口遺跡調査概要(第23次)」「季報みちるべ43号』(草津市史編さん委員会 1990年)
- ⑧ 石原道洋『内堀遺跡・後藤館遺跡発掘調査報告書』(八日市市教育委員会 1983年)
- ⑨ 中川通士「上永楽遺跡発掘調査」「昭和58年度野洲町遺跡群発掘調査概報」(野洲町教育委員会 1984年)
- ⑩ 石橋正嗣「慈恩寺遺跡」「ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』X 5-1 (滋賀県教育委員会 1982年)
- ⑪ 村内政雄「山崎鎌物師人名録」(『東京国立博物館紀要』第7号 1972年)
- ⑫ 「諸國出職明細録」『滋賀県の民具』9 (滋賀県教育委員会 1989年)
近江国栗山郡高野庄村にあって、三州・越後・美濃・若州・羽州・信州・丹後・伊勢・駿州・遠州・江戸・勢州・加州・大阪への出店や出職の状況が書き添えられている。
- ⑬ 「治工由緒記」一武村家文書—『滋賀県の民具』9 (滋賀県教育委員会 1989年)
- ⑭ 滋賀県蒲生郡役所編『近江蒲生郡志』卷5 (八幡町・滋賀県蒲生郡役所 1922年)

中世後期東国における土鍋の復活と鉄の流通事情

坂井 秀弥

1. はじめに

東国においては、ほぼ11世紀中葉を境にして土器から鍋・釜という煮炊具が消える。これに対して西国ではこの時期以降もほぼ中世を通じて土製煮炊具が存在し、この点が両者の土器様相における決定的な相違点のひとつとなっている。土器から鍋・釜が消滅することは、ほかの素材で鍋・釜が作られたことを示す。一部の意見を除けば、鉄製の鍋・釜が土製の鍋・釜にとて変わるというのが大方の意見である。

ところで、中世の後期になると、内耳鍋に代表される土鍋が東国の一帯の地域にみられる。この事実は何を意味するのだろうか。ここではこの現象を中世後期独特の鉄の生産と流通事情を反映するものと考え、思いつく点を述べることにしたい。

2. 中世の土鍋・土釜

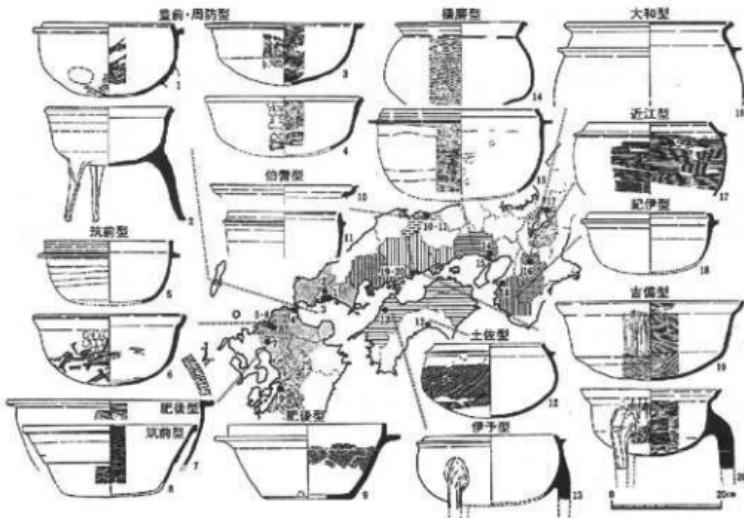
中世の土製煮炊具といえば、西国とくに畿内の羽釜が代表的である。畿内では飛鳥時代から奈良時代にかけて、鉢をもつ臺が出現するが、いわゆる羽釜として定着するのは古代末以降のようである。西国ではこの羽釜が中世を通じて一般的に使われ、近世初期に至る（第1・2図）。畿内社会においては、古代には土器の生産と流通の機構が完成しており、中世に至ってもこの機構が根強く維持されたと考えられる。中世の土器構成をみると、煮炊具のほかに土製の食膳具の代表である「瓦器碗」が普遍的に存在しており、畿内社会では土器生産が活発に行われていたことがわかる。古代から中世のさまざまな社会の変化をこえて、土器文化を維持しようとする畿内の保守的な意識が感じられる。その意識は土器の生産と流通に強く関与していた勢力によって形成されているように思われる。

ただし中世の絵巻物には鉄鍋・釜を使用している様子がしばしば描かれており、西国においても鉄製煮炊具がかなり使用されていることは確実である【菅原1989】。このことから西国では鉄製品があらゆる階層まで普及せず、これを使用できる階層とで

国	世紀	11	12	13	14	15
大河内		■■■■■		■■■■■	■■■■■	■■■■■
和泉		■■■■■		■■■■■	■■■■■	■■■■■
山城		■■■■■		■■■■■	■■■■■	■■■■■
滋賀		■■■■■		■■■■■	■■■■■	■■■■■
近江		■■■■■		■■■■■	■■■■■	■■■■■
伊豆		■■■■■		■■■■■	■■■■■	■■■■■
丹波		■■■■■		■■■■■	■■■■■	■■■■■
播磨		■■■■■		■■■■■	■■■■■	■■■■■
美濃		■■■■■		■■■■■	■■■■■	■■■■■
因幡		■■■■■		■■■■■	■■■■■	■■■■■
伯		■■■■■		■■■■■	■■■■■	■■■■■
備		■■■■■		■■■■■	■■■■■	■■■■■
備		■■■■■		■■■■■	■■■■■	■■■■■
安芸		■■■■■		■■■■■	■■■■■	■■■■■
讃岐		■■■■■		■■■■■	■■■■■	■■■■■
佐賀		■■■■■		■■■■■	■■■■■	■■■■■
長崎		■■■■■		■■■■■	■■■■■	■■■■■
伊周		■■■■■		■■■■■	■■■■■	■■■■■
長崎		■■■■■		■■■■■	■■■■■	■■■■■
豊前		■■■■■		■■■■■	■■■■■	■■■■■
肥後		■■■■■		■■■■■	■■■■■	■■■■■

■ 土師器皿 ■■■■■ 土師器鍋・釜 ■■■■■ 瓦器鍋・釜

第1図 西日本における煮炊用具の変遷
〔菅原1989原図〕



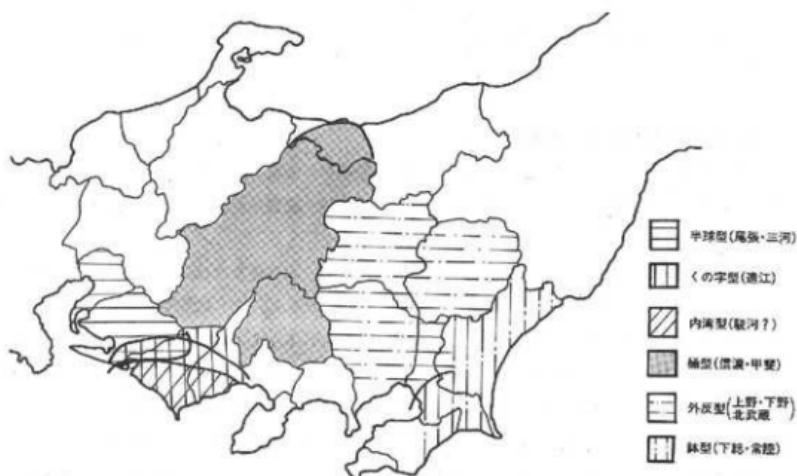
第2図 西日本における出現期の土器鍋・釜 [菅原1989原図]

きない階層とが存在すること、とみる意見もある。一方では鉄製と土製では使用形態、たとえば調理内容がちがうといった見方もできるかもしれない。

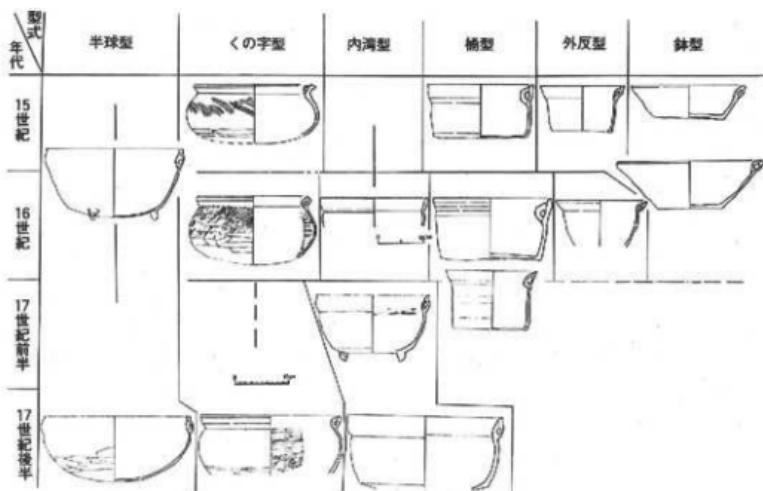
これにたいして、東国では古代10世紀頃、関東地方を中心にして甕から羽釜への変化がかなり普遍的にみられる〔服部1988〕が、それも11世紀後半以降ほとんどみられなくなる〔福田1986〕。関東地方以外、たとえば北陸地方ではこの時期まで甕が主体である。東国では煮炊具の他に食膳具においても土製の椀はほとんどみられなくなる〔浅野1987〕。この点も西国との大きな相違点である。中世東国では、在地の土器生産が一部の陶器生産だけに衰退し、日常雑器の煮炊具・食膳具はほかの素材に変化している。煮炊具はあらゆる階層まで鉄製品が普及し、食膳具は漆器を代表とする木製品に変化したと考えられる。鉄製品と土製品を比較すれば、鉄製品がより高価なものと一般的には考えられる。東国では西国とくに畿内のような、古代の土器生産と流通体制の保守性ではなく、容易に生産体制が解体したことが知られる。東国と畿内とは、土器をとりまくさまざまな環境が根本的に相違していたと言えるであろう。また、東国で速やかに鉄製煮炊具に変化することは、鉄そのものが古代よりも容易に入手できる状況になったことを示す。

ところが、東国的一部の地域においては中世後期のはば15世紀頃から、土製の鍋が再び出現する。いわば、「土鍋の復活」とも言うべき現象がみられるのである。土鍋の形態はいわゆる内耳鍋が代表的である。足立順司氏の研究〔足立1987〕によれば、この土器の分布は北海道をのぞけば、関東・甲信・東海地方にはば限定できるという（第3・4図）。

それまであらゆる階層まで鉄製品が使用されていながら、この時期になって土鍋が作られるこ



第3図 内耳鍋の分布 [足立1987原図]



第4図 内耳鍋縦年図(桶型、外反型、鉢型、縮尺不同) [足立1987原図]

とは説明しにくい現象といえる。吉岡康暢氏は北東日本海域の陶磁器組成の特質を列記するなかで、この点を「土製煮沸器は11世紀後半以降激減し、土鍋・土釜が13世紀代まで少量使用されるが、中世後期には石鍋と畿内産土釜が散見されるにすぎない。これを鉄鍋の民間普及地帯と確定するには、なお、関東における中世後期の土製煮沸器の復活現象、ならびに鉄器生産のあり方を整合的に説明する必要がある」と指摘している〔吉岡1989a〕。吉岡氏はこの中世後期の土鍋の

復活現象を合理的に説明できない以上、東国における11世紀後半以降の土製煮炊具の激減を、鉄製品への交代とは安易に結論できないとしている。

3. 中世の鉄の生産と流通

鉄製か土製かという煮炊具における素材の違いの問題は、吉岡氏が指摘するように中世における鉄・鉄器生産と関連すると考えられる。中世における鉄・鉄器生産はどのような状況であったのであろうか。

近年、古代の鉄生産については考古学的な資料が増加し、北陸地方ではかなり具体的に解明されており〔関1989〕、東国の一地域のあり方を知ることができる。鉄・鉄器生産の工程は一般的には、(1)製鍊、(2)精錬鍛冶、(3)鍛鍊鍛冶・鋳鉄、に分けられる。(1)の製鍊は砂鉄や鉄鉱石などの原料を木炭とともに炉で燃焼させ、鉄素材(原料鉄)を得る工程であり、(2)はその鉄素材から不要な成分をさらに取り除き、(3)は鉄製品を製作する工程である。製鍊はおもに丘陵上で、鍛冶は集落で行うのが一般的である。北陸地方において鉄生産の第1段階の製鍊工程が開始されるのは、ほぼ律令制の成立にともなっており、各地域ごとに生産の拠点が形成され、郡単位に近い生産と供給がおこなわれていたことが判明している。これは律令政府の基本的な手工業生産に関する理念を表わしている。すなわち、効率が悪くとも各地域ごとに生産の拠点をつくり、地域ごとの生産力を高めることをねらっていると考えられる。しかし、このような状況は律令制の弛緩・崩壊とともに変質し、各地域ごとの生産は解体する。その時期については必ずしも明確ではないが、おおむねの鉄遺跡の時期はほぼ11世紀を下限とする。

これに対し、中世の鉄の生産状況については不明な点が多い。古代の北陸地方では、丘陵上に多くの製鍊遺跡が営まれていたにもかかわらず、これまでの発掘調査例では中世と確定されたものはない。^{補注}北陸地方で中世の製鍊遺跡と推定されるのは能登で指摘されているくらいである。現在のところ、明確に中世の製鍊遺跡の調査例はないが、その可能性をもつ遺跡はかなりあるという〔小嶋1987〕。平安後期(1世紀初め頃)に成立したとされる『新猿楽記』には「能登釜」とみえ、能登は中世に至るまで鉄器(鉄製品を製作する工程)の生産地であったと考えられる。

一方、中世遺跡で鉄滓が出土することは多い。それらの鉄滓の多くは製鍊滓ではなく、精錬を含む鍛冶滓か鋳鉄に伴うものと考えられる。したがって、中世においては製鍊という鉄生産の第一段階の製鍊作業が、古代のように各地域で行われるのではなく、特定の地域で大規模におこなわれ、そこで得られた大量の鉄素材が広域に流通していたと推定される。

このような鉄生産のあり方は古代・中世の土器生産と類似する。古代の須恵器生産は鉄と同じように各地域で行われていたのであるが、古代末には終焉を迎える、中世には特定地域に生産地が成立し、その製品が広域に流通する。北陸においては能登の珠州焼が能登・越中以東の日本海側に広く流通する〔吉岡1989 b〕。

中世では特定の地域で生産された鉄素材が広域に流通し、それが各地域で鍛冶・鋳鉄の工程を経て製品化されるものと考えられる。具体的な鉄器の生産地の例としては、新潟県出雲崎町寺前遺跡〔坂井はか1990〕がある。この遺跡は12世紀後半から13世紀頃の集落遺跡で、一定の階層の

崖敷と推定される一画から、溶解炉・鍛冶炉の溶壁・鋳型が大量に出土しており、ここで鍛冶と鋳鉄が行われたことが知られる。鐵滓は肉眼観察によるかぎり、古代の鐵滓で言うところの製錬滓は含まれていない。今後の冶金学的な分析をへたうえでの検討を要するが、この遺跡においては砂鉄などの原料から鐵素材の生産は行われておらず、他地域から鐵素材を入手したものと考えられる。

以上のように中世の鐵生産を想定すると、中世後期の土鍋の復活は、どのように考えられるであろうか。中世後期の土鍋は形態からみても明らかに鐵鍋を模倣したものであり、鐵鍋を補うものとして存在する。中世前期に土鍋がほとんど使用されていないことは、当時の生活必需品である鐵鍋の原料になる鐵素材が、需要に応じるだけ豊富に供給されていたことを示すであろう。それが中世後期に至り、鐵鍋を補う土鍋が出現することは、当時の鐵の流通事情が中世前期と変化したことを見出すのではなかろうか。

中世後期は守護領国制、あるいは大名領国制と言われる時代である。史実かどうかはともかく、「上杉謙信が武田信玄に塩を送った」というような逸話が伝えられる時代である。物資が簡単に領国をこえて流通しない状況が生れやすいことは考えられよう。当時の社会生活に重要な必需品である鐵は、このような時代には特に貴重なものになったと思われる。鐵は農工具・武器・釘などさまざまな器具、調理具の原材料である。塩と同じくなくてはならないものである。そして、製錬の作業は原料となる砂鉄・鐵鉱石の所在や、中世前期の鐵生産状況からみて、どの地域においても容易におこなえないものである。実際に鐵素材の流通が政治的に阻止されたかどうかは不明である。しかし、そのような状況が実際に起りうる社会であったことは考えられる。鐵素材の供給が制限されたとき、考えられる対応は、あらゆる鐵製品のなかでほかの素材で代用できるものについては、その方策をとることである。ほかの素材で代用できるのは煮炊きの調理具である。中世の東国において各家庭の必需品である鍋・釜を土製にすれば、かなりの鐵素材を節約することができよう。

さてこのように考えたとして、もう一つの問題が残る。東国の全域で土鍋が復活してはいないことである。東國の中世鐵生産の実態が不明なまま推定することになるが、土鍋が復活する地域は、復活しない地域よりも鐵の入手が困難な地域と考えておきたい。北陸地方では土鍋は復活しない。これは中世を通じて、能登あるいは山陰、さらには大陸からの鐵があり、北陸地方全域にこの地方の鐵素材が豊富に供給され、領国体制上、政治的にそれが阻まれることがない状況であったことと考えたい。

4.まとめ

これまで東国における中世後期の土鍋の復活について述べてきた。要点を列挙してまとめとしたい。

- (1) 中世においては古代とことなり、国・郡などの各地域ごとで鐵生産をおこなってはいない。ここにいう鐵生産とは砂鉄や鐵鉱石という原料から鐵素材を作る製錬である。
- (2) 土鍋は鐵鍋を補うものであり、鐵素材の需要と供給が中世後期には変化したことにより、

この時期になって土鍋が復活すると考える。その変化は守護領国制・大名領国制という政治体制のもとで、鉄素材が自由に流通しない状況になったか、あるいはそのような事態が生じる可能性が想定されることになったことに起因する。

(3) このような鉄不足という重大な事態に対処するため、鉄製品のうち鉄以外の素材でも機能できる土鍋が生産された。北陸地方などでは生産地をもつか鉄素材の流通を阻む要素がなかったと思われる。

(4) したがって中世東国の煮炊具は鉄製品が主体である。

＜参考文献＞

- 赤沼英男 1990「平安期から中世における東北北部出土鉄器」「北の鉄文化」岩手県立博物館
浅野晴樹 1987「関東における中世在地出土器について」「埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要」第4号
足立順司 1987「内耳鍋の研究」「静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要」2
小嶋芳孝 1987「能登半島の古代鉄生産序説」「考古学と地域文化」同志社大学考古学シリーズⅢ
坂井秀弥ほか 1990「寺前遺跡」「新潟県埋蔵文化財調査だより」6 新潟県教育委員会
皆原正明 1989「西日本における瓦器生産」「国立歴史民俗博物館研究報告」第19集
閑 潤 1989「北陸における鉄生産」「北陸の古代手工業生産」「北陸古代手工業生産史研究会」
田中 琢 1967「畿内と東国」「日本史研究」90 日本史研究会
豊田 武 1982「中世日本商業史の研究」「中世日本の商業」豊田武著作集 第2巻 吉川弘文館
橋本久和 1988「中世成立期の土器様相」「日本史研究」330 日本史研究会
服部英喜 1988「関東地方における平安時代後半期の土器様相」「神奈川考古」第24号
福田健司 1988「南武藏における平安時代後期の土器群」「神奈川考古」第21号
吉岡康暢 1989 a「北東日本海域における中世陶磁の流通」「国立歴史民俗博物館研究報告」第19集
吉岡康暢 1989 b「日本海域の土器・陶磁」中世編 六興出版

(補注)

1990年10月13日、新潟県北蒲原郡豊浦町北沢遺跡群の中世前期（12世紀末～13世紀前半）と考えられる製鉄炉3基の調査成果が現地説明会資料として公表された〔川上貞雄1990〕。これにより中世の鉄製錬が在地で広く行われたと考えるむきも多くなろう。しかし、筆者はこの遺跡の評価について、現時点ではつぎのように考え、小嶋の論旨に変りはないと考えている。

- 1)ここでは鉄製錬（精錬を含むかどうかは不明）と中世陶器生産（中世笠神窯）が密接な関係をもっていたことが、遺構のあり方から判断される。すなわち、鉄製錬とともに木炭窯が陶器窯に転用されていること、製鉄炉と陶器窯が隣接して存在することから、同じ工人がほとんど同じ時期に鉄と陶器の生産を行ったと考えられる。
- 2)中世笠神窯の製品は能登の珠洲焼のように広く流通するのではなく、越後北部の阿賀北地方には限定して流通している。したがってここで生産された鉄も陶器と同様に狭い範囲に供給されたもので、越後の広い地域に流通していた鉄素材は在地とは考えられない。
- 3)この製鉄遺跡は丘陵地帯に立地し、古代の製鉄遺跡の分布と重なる。このことは中世の鉄製

鍊も基本的には古代と同様な立地条件のもとで行われていたことを示す。したがって、中世の鉄製鍊が平地など古代と立地条件が変化することから、造構の認識が難しく、実態がよく分からぬとは言えず、在地で行われなくなったからこそ造構が見つからないと考えるほうが自然である。

(1990. 10. 28)

(追記) 小稿作成にあたっては赤沼英男・穴沢義功・足立順司・宇野隆夫・荻野繁治・兼康保明・川上貞雄・吉岡康暢の各氏から有益な御教示をいただいた。記して謝したい。

畿内における初期横穴式石室の一形式

—勝福寺古墳北墳・雲雀丘C北4号墳の位置づけ—

岡野 慶隆

1.はじめに

畿内における横穴式石室の研究は、1960年代の白石太一郎氏の初期横穴式石室の系譜や型式編年に関する研究に始まるが^①、以後群集墳としての群構成や被葬者集団の性格とその造墓活動等に関する研究が中心となり、横穴式石室そのものの研究は以外と少なかった。しかし、近年に至り、河上邦彦氏の大和における大型横穴式石室の編年と系譜の研究、北垣聰一郎氏による構築技術面からみた研究、森下浩行氏による畿内型横穴式石室の出現と編年・分類の研究、山崎信二氏による九州・中国・四国・畿内の横穴式石室の地域別比較の研究等がみられる。とくに森下・山崎両氏の研究では、「畿内型」横穴式石室の設定を行い、各々異なるが編年・分類を試みられている点や、河上氏の研究では、石工集団の想定と技術的な系譜とその政治的背景を論じられている点は注目されよう。ただ、各氏の研究とも須恵器編年にもとづく石室編年が中心となっていることや、「形式」及び「型式」設定が明らかでないこと等、横穴式石室そのものの型式学的研究としては今後の課題が多く残されている。

さて、横穴式石室の型式学的研究に際し、最も基本的な問題点は、各石室資料の比較基準をいかに設けるかということである。適確な比較基準設定は、横穴式石室の型式学的研究を可能とし、この時初めて横穴式石室を考古学資料及び歴史資料として正当に評価し得るものと言えよう。しかし、横穴式石室のもつ要素は複雑で、この比較基準設定作業は容易なことではない。

筆者もこの点に関して、不十分ながらも若干の試みを行ってきた。その一つは、まず石室構築にあたった専門技術者を想定したことで、技術者は当初よりなんらかの企画をもっていたと考え、この企画を復元することにより各石室資料の比較や、石室構築にあたった技術者の系譜を明らかにできると考へた。そして、当初の企画を最も忠実に反映すると考えられる石室の平面形を宝塚市長尾山丘陵の横穴式石室で検討した結果、玄室幅を基準長とし、玄室長・羨道長をその倍数値とする倍数型平面企画法を復元することができた。^②また、畿内の大型横穴式石室を対象に検討した場合にも、玄室長を玄室幅のほぼ2倍とするB型企画法が大和を中心として採用されていることが明らかになり、同企画法をもつ技術者集団の広がりとともに、その政治的背景についても指摘することができた。

しかし、この平面企画は実際の横穴式石室を構成する一要素にすぎないことや、石室の形態を決定する要因がこの他にもあったと考えられるため、再度長尾山丘陵の横穴式石室について検討を試みた。そこでは、横穴式石室の形態決定要因を企画と構築技法に分けた。企画は、片袖式・両袖式等の構造と平面・立面企画からなり、石室の基本的な構造とおよその比率と寸法がこれにより決定されると考へた。また、構築技法は、細かい平面形や、側壁・奥壁・前壁・袖部等の石

の積み上げ方等で、石室の細かい形態はこれにより決定されると考えた。つまり、形態のために構築技法を選んだというよりも、技術者のもつ構築技法が形態を決定したという考え方である。この結果、長尾山丘陵ではまず構造より、I型（右片袖式）・II型（両袖式）・III型（複室構造）に分類し、さらに時期とともに変遷する構築技法も含めてⅠ期（I型、6世紀前半）・Ⅱ期（II・III型、6世紀中頃～7世紀前半）の2時期に分けることができた。これにより、当丘陵における横穴式石室構築にあたった技術者の系譜やその背景に迫ることも可能となったのである。

ところが、ここにあげた一つの系譜のなかにもさまざまな要素が混在していることや、当丘陵内で型式的に完結しないといった問題点も残された。おそらく、構築にあたった技術者は広い地域で活動し、一つの地域内でも氏族関係によりいくつかの系譜の技術者が混在していたのが現実であろう。

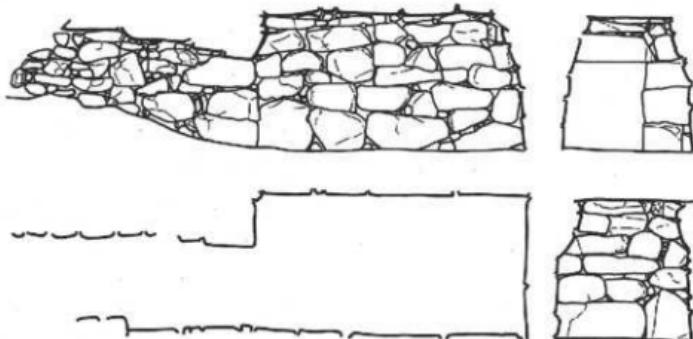
以上の点より、今回は長尾山丘陵の横穴式石室導入期にあたるⅠ期のⅠ型石室である勝福寺古墳北墳と雲雀丘古墳群C北4号墳を対象とし、畿内を中心とした他地域の資料との比較をとおして両石室の構築にあたった技術者の系譜とそれを導入するに至った背景について検討を試みてみたい。

2. 両石室の概要

勝福寺古墳は、長尾山丘陵では東端部に位置し、長尾山丘陵に形成された後期群集墳とは距離をおいて単独に存在する。当古墳は、径約20mの2基の円墳からなっており、南墳の主体部は粘土被であるが、北墳は北に開口する玄室幅約2.3m、全長9mの右片袖式横穴式石室を有する。石室が開口したのは、明治24年の墳土採集時で、この時画像帶神獸鏡・六鈴鏡・金環・管玉・土玉・銀象嵌竜文刀・馬具等が出土した。北墳の時期は、発掘調査による資料でないため明確ではないが、出土須恵器が陶邑編年M T 15～T K 10型式にあたることにより、6世紀前半～中頃の年代が考えられる。なお、この石室は、白石太一郎氏の石室編年では第3期（6世紀前半）とされている。（第1図-1）

一方、雲雀丘C北4号墳は、長尾山丘陵東部の雲雀丘古墳群中に位置する。径約15mの円墳で、玄室奥壁幅2.4m、現存全長3.81mの右片袖式の横穴式石室を有している。発掘調査は行われていないが、1978年関西学院大学考古学研究会により測量調査が実施されたほか、直宮憲一氏により採集須恵器が紹介されている。古墳の時期は、6世紀前半頃とされている。（第1図-2）

さて、この両古墳の石室は、前回の検討では当丘陵における横穴式石室導入期（Ⅰ期）のものとしたが、平面企画と構築技法では、共通する点と相違する点が指摘される。まず共通点は、構造が右片袖式で、構築技法では袖部を横積みで数段積み上げる技法をとることや、前壁を構成する見上げ石に石室幅に足らない石材を用いる点があげられるが、これらはこの時期の両石室に限られる構造と構築技法で、Ⅱ期の石室には見られないものである。一方相違点は、平面企画では勝福寺古墳が玄室幅を基準長として玄室長をその2倍の長さにとする倍数型企画法であるのに対しで、雲雀丘C北4号墳は玄室奥幅を基準とすると玄室長は1.6倍の長さで短い。また、構築技法でも、前者の玄室平面形が長方形であるのに対して後者が逆台形であるほか、奥壁の石積みや持



1. 勝福寺北墳 (資料12)



2. 雲雀丘C北4号墳 (資料13)

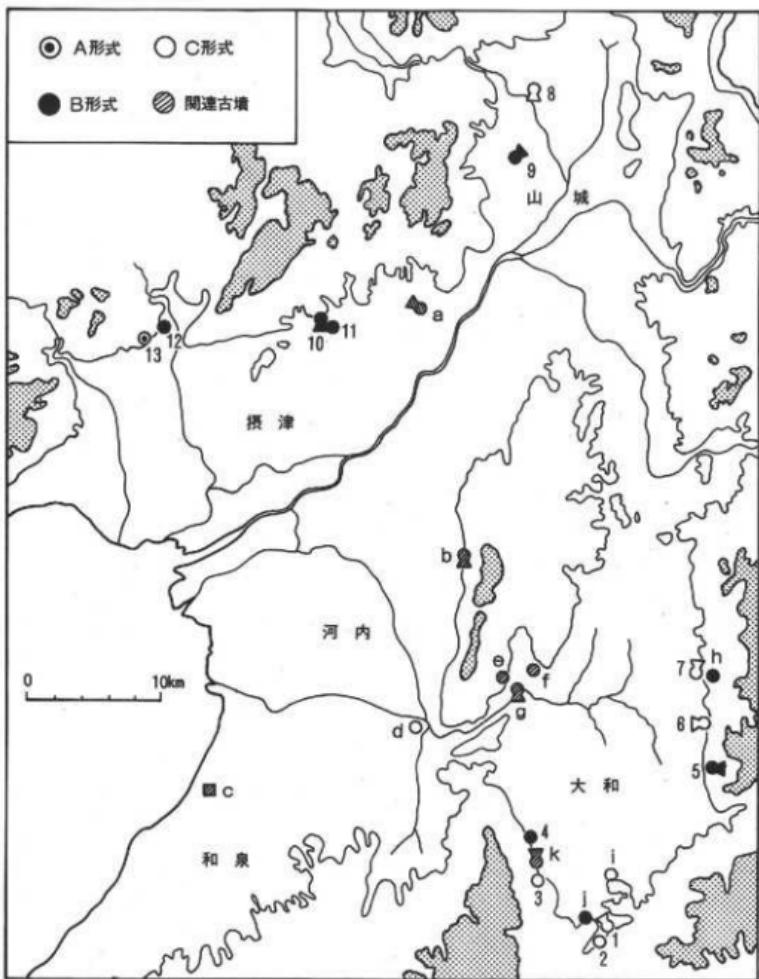
第1図 勝福寺北墳・雲雀丘C北4号墳

ち送り等の技法に相違点が認められる。

この相違点のうち、勝福寺北墳の持つ要素は次のⅡ期の両袖式の石室に継続するものであるが、雲雀丘C北4号墳の要素は当古墳に限られており、勝福寺墳はⅡ期の石室と同一系譜とした。また、勝福寺北墳の企画と構築技法は、大阪府南堺古墳・京都府物集女車塚古墳に類似しており、ともに畿内における初期横穴式石室の一タイプとしたが、雲雀丘C北4号墳の類例は見られないものと考えた。しかし、前回の両石室の検討は不十分なもので、とくに両石室の共通点については十分な評価をせざじまいであった。次章では、対象を畿内を中心とした地域に広げ、両石室の位置づけを試みてみたい。

第1表 第3形式鋼穴式石室一覧表

No	古 墓 名	所 在 地	墳 形	出土 頨器等	文 獻
1	市尾越山古墳	奈良県高取町 前方後円墳(66m)	MT 15・TK 10	河内新羅「市尾越山古墳」浮駕可教育委員会・橿原考古学研究所 1984	
2	椎 桐 常 古 墳	〃 倭所市 円墳 ? (約20m)		佐藤小吉「施設墓古墳」(『奈良県史跡地圖集』会報付第3回 1916)	
3	箭 吹 神 社 古 墳	〃 新庄町 円 墳 (約25m)		坪井良平「大和國随火社の古墳」(『考古学雑誌』3-7 1913)	
4	芝 塚 2 号 墓	〃 当麻町 〃 (約25m)	MT 15	伊藤雅文「当麻町芝塚古墳発掘調査報告」	『奈良県遺跡調査報告』1985年度 橿原考古学研究所
5	珠 城 山 1 分 墓	〃 松井市 前方後円墳(56m)	TK 43	小島俊二・伊達宗泰「珠城山古墳」奈良県教育委員会 1956	
6	東 東 級 古 墓	〃 天理市 〃 (72m)		佐藤小吉「東紀ノ古墳」(『奈良県史跡地圖会報』第3回 1916)	
7	石 上 大 墓 古 墓	〃 (115m)	MT 15	泉林院・河上邦彦「天理市石上・豊田古墳群」II 橿原考古学研究所 1976	
8	天 墓 古 墓	京都府京都市 〃 (71m)		京都考古学研究会「熊野町の古墳時代・鶴ヶ池古墳発掘調査報告」 1971	
9	物 紫 女 平 墓 山 墓	〃 向日市 〃 (45m)	TK 10	秋山浩二・山中草彌「女平坂古墳」向日市教育委員会 1988	
10	南 部 古 墓	大阪府茨木市 〃 (約50m)	MT 15・TK 10	川端清治・金沢忠「枚津豊川河南古墳調査報」(『史林』38-5 1955)	
11	海 北 墓 古 墓	〃 円 墳 ?	TK 13	橋本本治「根津海岸の海北古墳」(『近畿地方古墳墓の調査』2 日本古文化研究所 1937)	
12	勝 福 寺 北 墓	兵庫県川西市 円 墳 (約20m)	MT 15・TK 10	安野恒「川西市史」第4巻 考古資料 1976	
13	安雀丘C北4号墳	〃 宝塚市 〃 (約15m)		關西学院大学考古学研究会「安雀山の古墳群」(『關西学院考古』5 1979)	
14	瑞 故 宮 6 号 墓	三重県松阪市 円 墳	TK 10	松阪市史編纂委員会長阪市史第2巻 考古編 1977	
15	中 宮 1 号 墓	岡山县津山市 帆立貝式 (23m)	TK 10	近藤義郎編「佐治山古墳群の研究」 1952	
16	綠 山 7 号 墓	〃 綾井市 円 墳 (26m)		近藤義郎ほか「岡山県緑井市緑山古墳群」総性山文化振興財団 1987	
17	〃 8 号 墓	〃 (33m)	TK 43・TK 269		
18	三 島 神 社 古 墓	愛媛県松山市 愛媛県松山市	前方後円墳(45m)	森光晴ほか「三島神社古墳」松山市教育委員会 1972	



第2図 篦内における第3形式横穴式石室分布図

1-13-第1表ほか資料番号と一致

- | | | | | |
|----------------|----------------------|------------------------------|-----------|---------|
| a. 今城塚古墳 | b. 芝山古墳 | c. 塔塚古墳 | d. 藤の森古墳 | e. 柿塚古墳 |
| f. 椿井宮山古墳 | g. 势野茶臼山古墳 | h. 石上・豊田古墳群(ホリノツ4号墳・タキハラ5号墳) | | |
| i. 新沢千塚(221号墳) | j. 巨勢山古墳群(タケノクチ16号墳) | | k. 大和二塚古墳 | |

3. 両石室を中心とした型式学的検討

(1) 形式の設定

畿内における横穴式石室導入期の石室は、玄室平面形と天井部の形態により次のとおり分類することができる。

- ①玄室平面が方形・長方形の片袖式で、穹窿状の天井をもつもの
- ②玄室平面が方形に近い両袖式で、穹窿状の天井をもつもの
- ③玄室平面が長方形の片袖式で、平天井をもつもの

①は、奈良県の平群谷に分布する椿井宮山古墳・柿塚古墳・勢野茶臼山古墳等があたるが、各石室の個性も強いものである。時期は、調査例が少ないので明らかではないが、5世紀末～6世紀中頃と考えられる。②は、大阪府の塔塚古墳・芝山古墳の2基があたり、時期は5世紀後半～6世紀前半と考えられる。両石室は、最近では九州の肥後型石室の影響が強いものとされている。③は、今回の対象とする勝福寺北墳と雲雀丘C北4号墳を含むもので、奈良県市尾墓山古墳等類例が最も多く、畿内に広く分布している。時期は、①・②に比べ新しく6世紀前半～後半と考えられる。

これらの石室は、かって白石太一郎氏による畿内の横穴式石室編年で、②の塔塚古墳を1期に、②の芝山古墳と①の椿井宮山古墳を2期に、③の勝福寺北墳を3期に編年されている。しかし、①が平群谷に限定されていること、②は九州の影響が強い石室で少數であること、③は畿内で普遍的に存在しており、それぞれの形態の差が時期的変遷の結果とは考えられないこと等からすると、それぞれ別形式の石室としてとらえるのが妥当ではないかと考えられる。したがって、この①～③の石室を第1～第3形式として扱うことにしてみたい。

ところで、近年森下浩行氏は、畿内型の横穴式石室を平天井のA類と穹窿状天井のB類に分類し、さらにA類を右片袖式の第1群と両袖式の第2群に分け、第1・2群とも6世紀前半に出現したものとされている。ここであげた第3形式は、森下氏のA類第1群にあたることになるが、後にも述べるように、森下氏のいうA類第2群の両袖式石室の出現時期は6世紀中頃で第1群の石室の系譜につながりながらも別形式としてとらえたほうがよいと考えられる。以下、勝福寺北墳・雲雀丘C北4号墳の属する第3形式の石室について検討を行ってみたい。

(2) 企画面での検討

第3形式の横穴式石室をもつ古墳は、畿内では13例あげられる。その分布は、大和では市尾墓山古墳等7例が南部・東部に分布し、山城では物集女車塚古墳等2例が、摂津では勝福寺北墳・雲雀丘C北4号墳等4例が分布し、畿内全般というよりも大和と摂津・山城でも淀川右岸地域が分布の中心となる。また、畿外でも伊勢の瑞巖寺6号墳・備中の緑山7・8号墳・美作の中宮1号墳・伊予の三島神社古墳等があり、ここでは、これらを含めた18例の石室を中心検討したい。なお、構造では石上大塚古墳・天塚古墳・海北塚古墳・絞山7号墳の4例だけが左片袖式で、他はすべて右片袖式である。(第1表・第2～5図)

まず、石室の企画ではこれまで行ってきたように玄室の平面形について、玄室幅を基準長とし

て玄室長を割った数値をもとに、A型（2倍に足らないもの）・B型（ほぼ2倍のもの）・C型（2倍をこえるもの）に分け、さらに玄室高・羨道幅・羨道長との比率についても見てみたい。（第2表）

まず、A型のものは、玄室長比が1.6~1.7の短い石室で、雲雀丘C北4号墳・瑞巖寺6号墳・中宮1号墳等3基が該当する。基準長は、ばらつきがあるが、瑞巖寺6号墳の2.0mと雲雀丘C北4号墳・中宮1号墳の2.4m~2.62mにはほぼ分かれ。玄室高比は、0.8~1.0で、いずれも玄室高は低い。羨道幅比は、雲雀丘C北4号墳・中宮1号墳が0.3~0.4と狭いが、瑞巖寺6号墳は0.6とやや広い。羨道長比は中宮1号墳が1.4である以外は不明であるが、そのほかのものも2倍に達することはないとと思われる。なお、A型の石室の分布は、畿外のものが中心である。

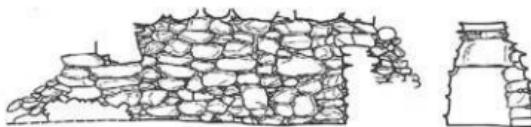
B型の石室は、玄室長比がほぼ2倍の倍数型企画法をもつもので、芝塚2号墳・珠城山1号墳・物集女車塚古墳・南塚古墳・海北塚古墳・勝福寺北墳・綠山7号墳・三島神社古墳の8基が該当する。基準長は、1.65mの珠城山1号墳、2.0~2.1mの三島神社古墳・海北塚古墳、2.3~2.6mの勝福寺北墳・南塚古墳・物集女車塚古墳・芝塚2号墳・綠山7号墳等の3グループに分かれ。とくに、2.3~2.6mのグループのうち、南塚古墳・物集女車塚古墳・芝塚2号墳・綠山7号墳の4基はきわめて近似しており、後にも述べるように尺度を使用した可能性が考えられる。玄室高比は、ほぼ1倍の三島神社古墳・南塚古墳・勝福寺北墳、1.2の珠城山1号墳・物集女車塚古墳、1.4の海北塚古墳等高低差があるが、基本的に玄室高の高いものほど年代が新しいと考えられる。羨道幅比は、0.5~0.7におさまるが、0.5~0.6のものが大半である。また、羨道幅値では勝福寺北墳・海北塚古墳・物集女車塚古墳・綠山7号墳がいずれも1.4mに近い値をとる点は、尺度によった可能性が強い。羨道長比は、三島神社古墳・南塚古墳がほぼ1.0、勝福寺北墳が1.9と倍数値に近く、それぞれB-1・B-2型の企画法が考えられる。また、物集女車塚古墳は2.3、海北塚古墳は2.8と長くなるが、基本的に羨道長の長いものほど年代が新しいと考えられる。なお、B型の石室の分布は、一部大和と畿外を含むが、攝津・山城の淀川右岸地域が中心となっており、とくにこの地域の南塚古墳・勝福寺北墳・海北塚古墳・物集女車塚古墳は、企画面での共通性を多くもっている。また、三島神社古墳・南塚古墳・勝福寺北墳は、玄室長比以外に玄室高比・羨道長比も基準長の倍数値にあたる点も注目される。

C型の石室は、市尾墓山古墳・権現堂古墳・笛吹神社古墳・東乘鞍古墳・石上大塚古墳・天塚古墳・綠山8号墳の7基が該当する。玄室長比が長い石室であるが、比率は大和の市尾墓山古墳・権現堂古墳・笛吹神社古墳・東乘鞍古墳・石上大塚古墳が2.2~2.4に集中し、山城の天塚古墳と備中の綠山8号墳が2.5~2.6と長い。基準長は1.8mと小さい天塚古墳以外は、2.4~2.6mの笛吹神社古墳・東乘鞍古墳・権現堂古墳・市尾墓山古墳と2.8mの石上大塚古墳・綠山8号墳の2グループに分かれ、尺度使用の可能性が考えられる。玄室高比は、天塚古墳・権現堂古墳・市尾墓山古墳がほぼ1.0、笛吹神社古墳が1.3以上、東乘鞍古墳・綠山8号墳が1.4で、基本的に玄室高が高いものほど年代が新しいと考えられる。羨道幅比は、綠山8号墳を除く6基が0.6~0.7で一致するが、羨道幅値は天塚古墳が1.25m、綠山8号墳が1.5mと狭いのに対して、大和の5基は幅が広く1.6~1.7mに集中しており、尺度使用の可能性が考えられる。羨道長比は、市

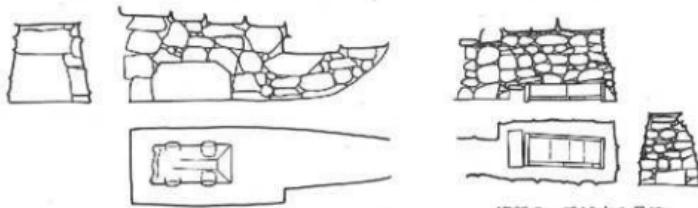
表2表 第3形式穴式石室の特徴と企画

No.	古墳名	種	企画										実施規模(m)				備考
			玄室平面	支室長比	義道長比	玄室高比	義道幅比	幅	長	高	幅	長	高	幅	長	高	
13. 玉作丘北4号墳	右	A	1.6	—	(0.8)	0.44	奥2.4	3.8	(1.6)	1.05	(0.48)	1.4	—	—	—	—	
14. 瑞應宇6号墳	*		1.7	—	1.0	0.60	2.0	3.4	2.0	1.2	—	1.1	—	—	—	—	
15. 中宮1号墳	*		1.6	1.4	0.8	0.34	奥2.62	4.25	2.1	0.9	3.55	1.45	—	—	—	—	
4. 芝塚2号墳	*		2.0	1.2	—	0.58	2.6	5.1	—	1.5	3.0	—	選敷・組合式家形石棺1	—	—	—	
5. 丹波城山1号墳	*		2.1	(0.8)	1.2	0.61	奥1.65	3.4	2.0	1.0	(1.3)	1.6	組合式家形石棺1	—	—	—	
9. 物無女山原古墳	*		2.0	2.3	1.2	0.54	奥2.55	5.07	3.05	1.38	5.83	1.7	選敷・組合式家形石棺1	—	—	—	
10. 南塚吉塚	*	B	2.0	(1.0)	1.0	0.50	2.5	5.1	2.5	1.25	(2.6)	1.6	選敷・組合式家形石棺2	—	—	—	
11. 海北塚古墳	左		2.1	2.8	1.4	0.67	2.1	4.4	3.0	1.4	5.9	1.8	組合式石棺1	—	—	—	
12. 醍醐寺北塚	右		2.0	1.9	1.1	0.59	奥2.32	4.7	2.5	1.36	4.3	1.56	—	—	—	—	
16. 綾山7号墳	左		2.0	2.3	(1.1)	0.54	2.6	5.2	(2.8)	1.4	6.0	(1.0)	—	—	—	—	
17. 三島神社古墳	右		1.9	1.0	1.0	0.55	2.0	3.7	2.0	1.1	2.0	1.35	選敷	—	—	—	
1. 市尾墓山古墳	*		2.3	1.4	1.1	0.65	奥2.6	5.87	2.9	1.70	3.58	1.62	選敷・組合式家形石棺1	—	—	—	
2. 桜現堂古墳	*		(2.2)	(1.3)	0.9	0.68	2.5	(5.5)	2.3	1.7	(3.3)	(1.3)	別独立式家形石棺2	—	—	—	
3. 富士吹神社古墳	*	C	2.3	(2.1)	(1.3)	0.67	2.4	5.6	(3.0)	1.6	(5.0)	(1.5)	別独立式家形石棺1	—	—	—	
6. 東乗轍古墳	*		2.4	2.9	1.4	0.71	2.4	5.7	3.3	1.7	7.0	1.5	別独立式家形石棺1	—	—	—	
7. 石上大原山古墳	左		2.3	—	(1.0)	0.61	奥2.8	6.3	(2.8)	1.7	(1.3)	—	選敷・石棺	—	—	—	
8. 天塚古墳	*		2.6	1.7	1.1	0.69	1.8	4.7	2.0	1.25	3.0	1.5	—	—	—	—	
17. 綾山8号墳	右		2.5	2.9	1.5	0.53	奥2.8	7.1	4.1	1.5	8.0	(1.5)	—	—	—	—	

*玉作邱(基奉地)は、前・奥側の方たち大きいものとった。また、()の数値は、久誤・米朝のため現在既大計削減と比較を示す。

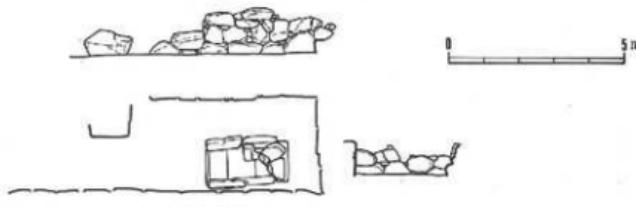


資料1. 市尾墓山古墳

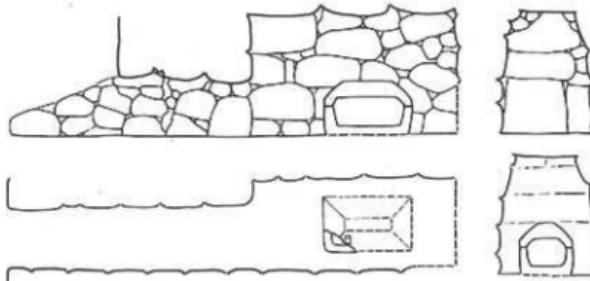


資料2. 椅現堂古墳

資料5. 珠城山1号墳

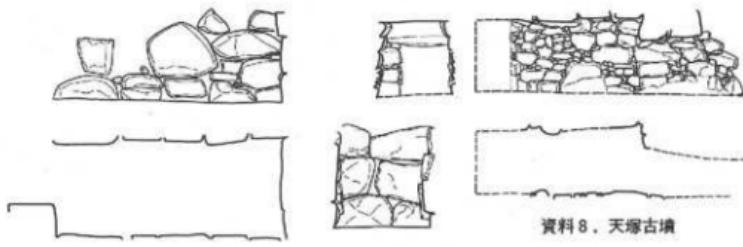


資料4. 芝塚2号墳



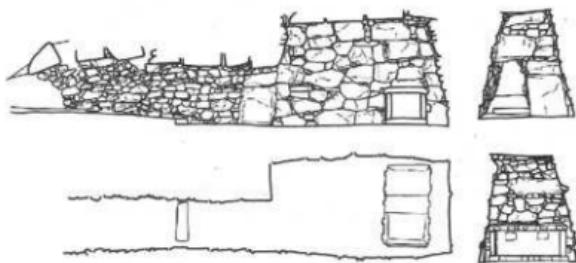
資料6. 東乘鞍古墳

第3圖 第3形式横穴式石室—1

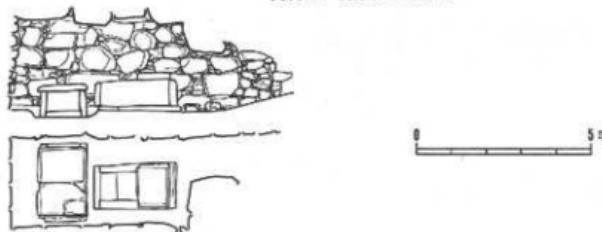


資料7. 石上大塚古墳

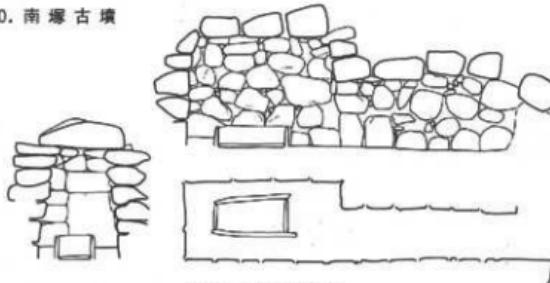
資料8. 天塚古墳



資料8. 天塚古墳



資料10. 南塚古墳



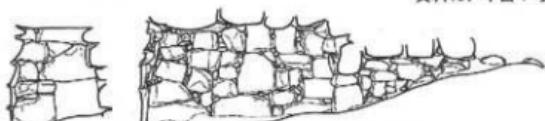
資料11. 海北塚古墳

第4図 第3形式横穴式石室—2

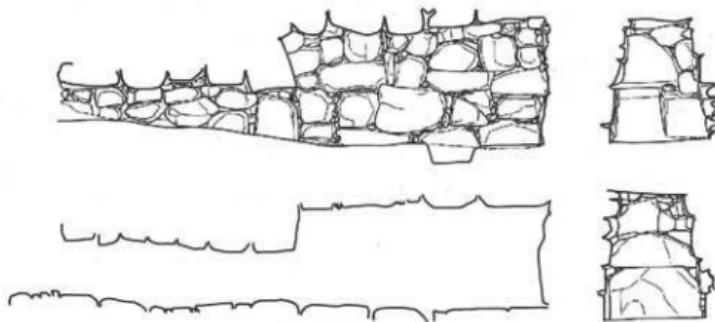


資料14. 瑞巌寺6号墳

資料15. 中宮1号墳



資料16. 緑山7号墳



資料17. 緑山8号墳



資料18. 三島神社古墳

第5図 第3形式横穴式石室-3

尾幕山古墳の1.4から東乘鞍古墳と綠山8号墳の2.9までばらつきがあるが、笛吹神社古墳はほぼ2倍、東乘鞍古墳と綠山8号墳はほぼ3倍で、漢道のみ倍数型企画となる可能性もある。また、玄室高と同じく、基本的に年代の新しいものほど長くなる傾向が認められる。なお、C型の石室は、山城の天塚古墳と備中の綠山8号墳以外は大和に集中するが、大和の5例は、以上のように基準長・玄室長比・漢道幅等の面で共通する企画性をもっている。

以上、A～C型石室の企画についてみてきたが、それぞれ時期的に変化する玄室高比や漢道長比をもちながらも、玄室長比・基準長・漢道幅比や分布地域において特徴をもち、第3形式のなかでもA～Cの小形式に分けて考えることが可能である。

(3) 使用尺度について

尺度使用の可能性については、いくつかの石室の各部分で近似する数値が見られることより考えることができる。

まず、基準長では、A～C形式をとおして2.3～2.6mに11基が集中し、なかでも2.4～2.6mのものがとくに多い。また、2.0～2.1mのものも3基、2.8mのものが2基ある。玄室高では、A～C形式をとおして2.0～2.1mのものが5基、B・C形式で2.3～2.5mのものが3基、B・C形式で約3mのものが4基ある。漢道幅では、A・B形式で1.0～1.1mのものが3基、B形式で1.36～1.4mのものが4基、C形式で大和のものに限り1.6～1.7mのものが4基存在する。(第3表)

ここで仮に1尺を34～35cmとすると、次のような結果が得られる。

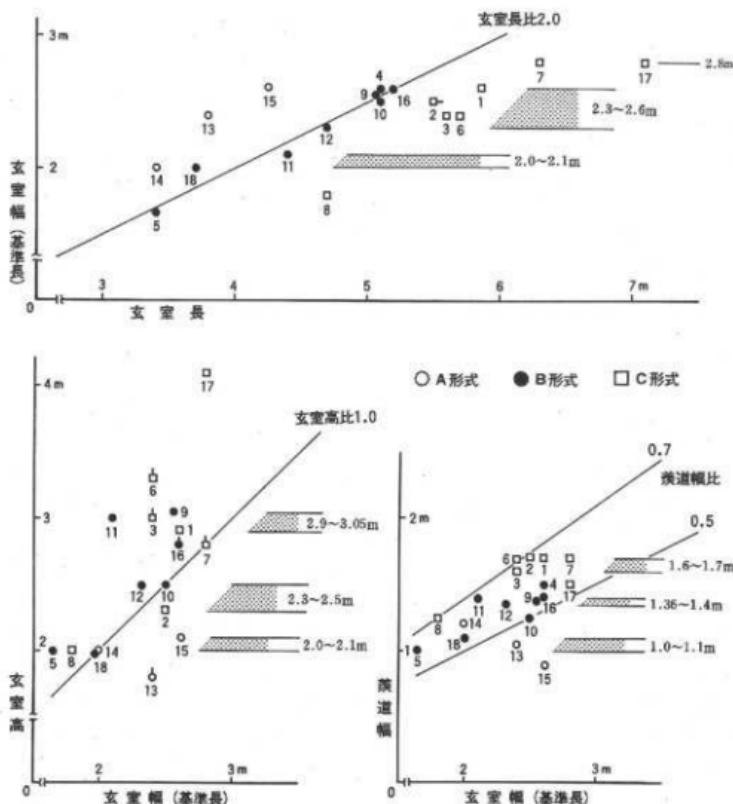
- 基準長 2.0～2.1m (3例) = 6尺 2.3～2.6m (11例) = 7尺 2.8m (2例) = 8尺
- 玄室高 2.0～2.1m (5例) = 6尺 2.3～2.5m (3例) = 7尺 2.9～3.05m (4例) = 9尺
- 漢道幅 1.0～1.1m (3例) = 3尺 1.36～1.4m (4例) = 4尺 1.6～1.7m (5例) = 5尺

この尺度により、石室規模を基準長で表すと、7・8尺を大型、6尺を中心とし、以下を小型と分類することができ、なかでも7尺のものがA～C形式をとおして大半をしめることが知られる。一方、基準長のなかでもとくに多い2.4～2.6mの値を10尺にあて、1尺を24～26cmと考えることもできるが、1尺を34～35cmと考えたほうが該当する数値が多いようである。

さて、横穴式石室使用の尺度については、これまでの研究では唐尺(約30cm)・高麗尺(約35cm)・晋尺(約24cm)等があげられてきた。^⑩しかし、尺度は常に変化するものであり、用途により幾種類もの尺度が併存したと考えられることから、尺度名が知られる尺度に限定してあてはめることは無理があるようと思われる。それよりも実際の資料より得られた数値より帰納して得られた尺度を重視すべきであろう。したがって、ここで得られた1尺=34～35cmという尺度については、高麗尺系統の尺度にあたる可能性が高いという指摘にとどめることにしたい。なお、以前長尾山丘陵の資料で得られた尺度は、1尺=33～35cmで、ここで得られた尺度に近似している。

(4) 構築技法面での検討

前回行ったのと同様に、石室の細かい形態を決定したと考えられる構築技法について検討してみよう。取り扱う技法は、石材・玄室平面形・前壁・奥壁・袖部・玄室天井石・漢道天井石等で、それぞれ次のとおり分類することができる。(第6・7図)



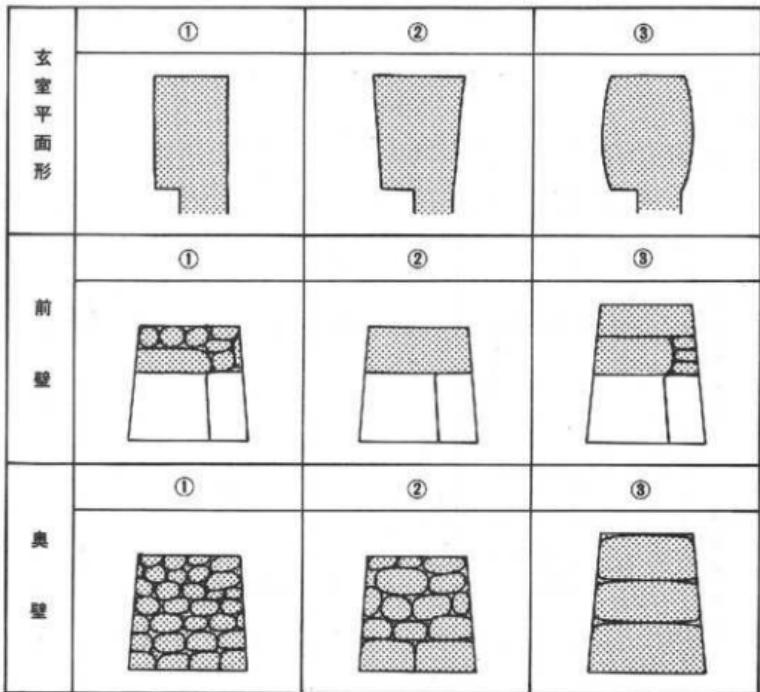
第3表 石窓各部數値比較表

○石材

- ①全体に小石材で構築する。
 - ②長辺約1m以上の比較的大型の石材で構築する。
 - ③長辺約2m以上の大型石材を含み構築するもの。

◎玄帝平而形

- ①玄室前幅と奥幅が等しい長方形のもの。
 - ②玄室前幅より奥幅が広い逆台形のもの。
 - ③玄室中央の幅が広い脛張り状のもの。



第6図 構築技法模式図一

○前壁

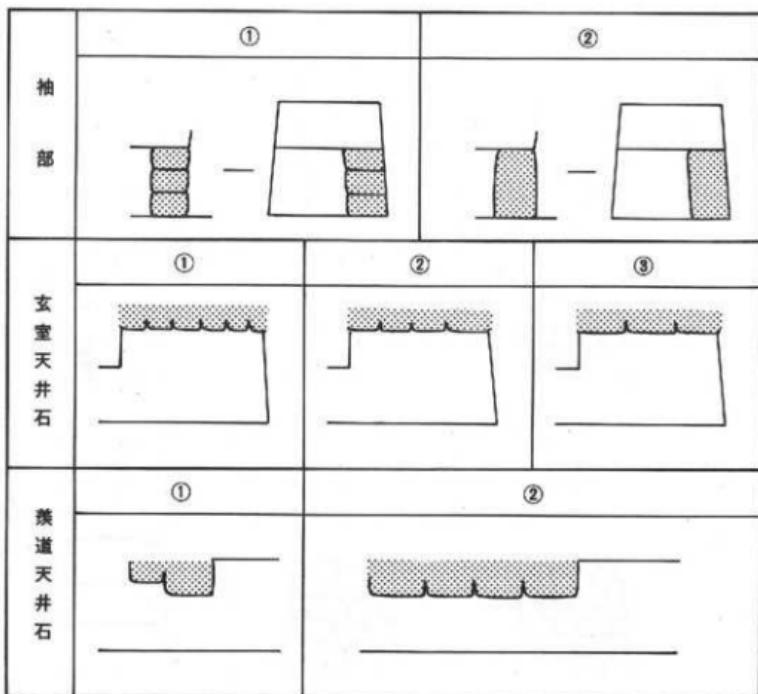
- ①見上げ石が1石であるが、玄室幅に足らず、空いた部分に小石を詰めたもの。見上げ石の長さは短く、袖部の石にかろうじて載っているものが多い。
- ②見上げ石が1石で、玄室幅いっぱいの石材を用いたもの。見上げ石は、袖部の石に十分に載っている。
- ③見上げ石を2石積み上げたもの。

○奥壁

- ①小石材のみで構築するもの。
- ②基底部に大型の石材を用いるもの。
- ③玄室幅いっぱいの巨石を積み上げたもの。

○袖部

- ①すべて横積みで、数段積み上げたもの。
- ②大型の石材の長辺を立てたもので、一石だけのものや、上に小石材を横積みで載せるものもある。



第7図 構築技法模式図—2

○玄室天井石

- ①細長い石材を5~7枚架構したもの。
- ②比較的大型の石材を4枚架構したもの。
- ③大型の石材を3枚架構したもの。

○兼道天井石

- ①短い兼道で、天井石が2枚よりなり、入口側のものが一段上がるもの。
- ②天井石が3枚以上からなり、長い兼道をもつもの。

以上の構築技法について、先にみたA~C形式との対応関係や年代関係についてについてみてみたい。(表4表)

まず、石材では、A形式はすべて①技法で、小石材のみで構築している。B形式では、①技法が3例、②技法が5例あり、C形式では、①技法が1例、②技法が3例、③技法が3例ある。技法の年代については、基本的には①技法→②技法→③技法の変遷が考えられ、小石材から大型石材への流れが認められる。なお、縁山8号墳のように奥壁に長辺約3mの巨石を使用するものも

一部あるが、すべて巨石で構成される石室は第3形式には存在しない。

玄室平面形では、長方形が大半である。逆台形はA形式の雲雀丘C北4号墳・中宮1号墳とB形式の珠城山1号墳の3例、胴張りはB形式の物集女車塚古墳と緑山7号墳の2例しか存在せず、A形式に逆台形が多いという以外にとくに形式や年代との関係は認められない。なお、奥幅の狭くなる台形の石室は当形式では存在しない。

前壁は、①技法が10例と最も多く、②技法が4例、③技法が1例である。A～C形式との関係では、A形式はすべて①技法、B形式は珠城山1号墳を除きすべて①技法である。これに対してC形式では、①技法が2例、②技法が3例、③技法が1例で、各技法が見られるものの②技法がやや多い。また、地域別にみると、A・B形式が中心の摂津・山城の淀川右岸地域と畿内ではなくて①技法で、C形式が中心の大和では②技法が多く、前壁技法とA～C形式及び分布地域との対応関係は明確である。技法の年代については、A・B形式では継続して①技法がとられるが、C形式では1例だけの東乘鞍古墳の③技法は、見上げ石を2段積み玄室高を高くするもので、①・②技法より新しく、①・②技法→③技法の変遷が考えられる。なお、①技法は、ここでとりあげる第3形式の石室固有の技法であるが、②技法は次期に現れる両袖式横穴式石室にも継続されている。また、③技法も単純に玄室幅いっぱいに2石積み上げる技法は、次期の両袖式横穴式石室にみられるが、東乘鞍古墳の場合下段は①技法であり、①技法との関係が窺われる。

奥壁は、①技法が7例、②技法が6例、③技法が1例ある。形式では、C形式のものに不明のものが多いが、とくに形式との対応関係は認められない。技法の年代については、①技法→②技法→③技法の変遷が考えられ、石材との対応関係が窺われる。なお、奥壁幅いっぱいに巨石を積み上げる③技法は、次期の両袖式横穴式石室に多くみられるが、当形式では緑山8号墳を除きまだ出現していない。

袖部では、①技法が10例、②技法が7例と①技法が多い。形式との対応関係では、A形式がすべて①技法で、B・C形式では両技法がみられる。技法の年代については、大型の石材の長辺を立てる②技法は、次期の両袖式横穴式石室に継続するもので、①技法→②技法の変遷が考えられる。

玄室天井石は、①技法が9例、②技法が4例、③技法が3例で、①技法が多い。形式との対応関係では、A形式はすべて①技法である。B・C形式は①～③技法それぞれを採用しているが、B形式では①技法は三島神社古墳の1例だけである。技法の年代については、基本的に天井石の枚数の多いものから少ないものへの移行が認められ、①技法→②技法→③技法の順が考えられる。

羨道天井石では、不明のものが多いが、天井石2枚よりなる①技法はB形式で1例、C形式で2例存在する。また、②技法はA形式で1例、B形式で4例、C形式で4例存在し、各形式とも両技法を採用している。技法の年代については、基本的に天井石の枚数の少ないものから多いものへの移行が認められ、①技法→②技法の順が考えられる。また、②技法のものでも天井に段差をもつものがあり、①技法の痕跡が認められる。なお、閉塞について、①技法では玄門部で、②技法では羨道入口部で行われている。

第4表 第3形式横穴式石室構築技法一覧表

No.	古墳名	玄室平面圖	石材			玄室平面形			前壁			奥壁			袖			玄室天井石			後室天井石			
			①	②	③	①	②	③	①	②	③	①	②	③	①	②	③	①	②	③	①	②	③	
13	雲雀丘C北4号墳	A	○			○	○		○			3		5								?		
15	中宮1号墳		○			○	○		○			10		8								5		
14	瑞巖寺6号墳		○	○		○			○			4		6								?		
18	三島神社古墳	B	○	○		○			○			5		5								2		
4	芝原2号墳		○	○			?		○			○			?							?		
5	珠城山1号墳		○		○		○	○				3							3		?			
10	南塚古墳		○	○			?		○			?			4		(1)							
12	勝福寺北墳		○	○		○			○			3			4				4					
9	物集女車塚古墳		○		○	○			○			2		4					7					
16	緑山7号墳		○		○	○			○			1		4					4					
11	海北塚古墳	C	○	○		○			○			3			3				5					
1	市尾惠山古墳		○		○		○	○				5		5					2					
8	天塚古墳		○	○		○			?			3	(4)						2					
2	椎現堂古墳		○	○		○			?			3	(4)						(2)					
3	笛吹神社古墳		○	○		○			?			1	5						3					
17	緑山8号墳		○	○		○			○			1	5						5					
7	石上大塚古墳		○	○			?		○			(1)		?					?					
6	東条陵古墳		○	○			○		?			2			3				3					

*袖及び天井石の数値は、石材数を示し、()は現存数を示す。

(5) A～C形式の型式編年

以上、第3形式の横穴式石室の企画・構築技法の検討を行ってきたが、玄室平面企画によるA～C形式の分類をもとにすると、明らかに形式に対応する要素が存在し、形式設定の妥当性が窺われる。一方、各形式をとおして時期的に変化する要素もあり、編年のてがかりとすることができる。ここでは、各石室をこれらの要素の「一括遺物」としてとらえることにより、型式設定を行い、系譜・年代関係を明らかにしたい。

まず、A形式は、企画において玄室高比がすべて1.0以下である。また、構築技法においては、石材がすべて①技法、前壁がすべて①技法、袖部がすべて①技法、玄室天井石がすべて①技法であること等共通要素が多く、袖部の②技法、玄室天井石の②・③技法等新しい技法がみられないのが特徴である。しかし、玄室平面形は、逆台形の雲雀丘C北4号墳・中宮1号墳と長方形の瑞

第5表 A形式石室の型式の組列

組 列	第1系列	雲雀丘C北4号	中宮1号	
企 画	第2系列			瑞巖寺6号
企	玄室高比	(0.8)	0.8	1.0
画	狭道幅比	0.4	0.3	0.6
	狭道長比	—	1.4	—
構 築 技 法	石材	←————①————→		
	前壁	←————①————→		
	奥壁	←————①————→ ←————②————→		
	袖部	←————①————→		
	玄室天井石	←————①————→		
	狭道天井石	?	—②—	?
出 土 須 恵 器	?		TK10	

巖寺6号墳に分けられ、2系列に細分することができる。また、各石室の構築技法の共通要素が多いため明確ではないが、奥壁・狭道天井石の技法をもとにすると、第5表のような型式の組列が推定される。雲雀丘C北4号墳と中宮1号墳の前後関係は明らかではなかいが、狭道天井石の技法において雲雀丘C北4号墳の場合おそらく短い狭道をもつと推定されることに対して、中宮1号墳の場合②技法をとっていることより、いちおう雲雀丘C北4号墳を先行させた。また、瑞巖寺6号墳も企画・構築技法とも他の2例と大差はないが、奥壁の基底石にやや大型の石材を用いているのを②技法とし、両石室より新しいものとした。

なお、石室以外の要素では、A形式の分布は先にも述べたように畿外が中心で散在して分布している。また、墳丘も、中宮1号墳のみ造り出しをもつが、すべて円墳で、前方後円墳が含まれていないこと等、B・C形式に対して異なった要素を多くもっている。また、石室内部には、B・C形式と異なり例抜式家形石棺・組合式石棺はみられない。

B形式の石室は、大半は第6表にみられるように企画・構築技法が時期的に変化しており、三島神社古墳から海北塚古墳に至る型式の組列を考えることができる。企画では、玄室高比は、ほぼ1.0のものから1.2・1.4の高いものへ、狭道長比は、ほぼ1.0から2.8の長いものへ変化している。また、構築技法でも、石材・奥壁・袖部・玄室天井石・狭道天井石等は、①技法から②技法へ、あるいはさらに③技法に変化しており、これらをもとに型式の変化はつかみやすい。一方、狭道幅比では最も新しい海北塚古墳を除くと0.5~0.6で一定していることや、前壁技法では一貫して①技法がとられていることは、B形式の特徴となっている。なお、この前壁①技法からすれば、B形式はA形式と系譜的に近いものと考えられる。

ところが、ここで問題となるのは珠城山1号墳の取扱いである。珠城山1号墳は、構築技法で

第6表 B形式石室の型式の組列

組 列	第1系列	三島神社 芝塚2号	南塚	勝福寺北	物集女車塚 緑山7号	海北塚
	第2系列				珠城山1号	
企 画	玄室高比	←→ 1.0~1.1			1.2	1.4
	羨道幅比	←→ 0.5~0.6			0.7	
	羨道長比	←→ 1.0~1.2		1.9	2.3	2.8
構 築 技 法	石材	①	②			
	前壁	①			②	
	第1	←→ ①			②	
	第2				②	
	奥壁	①	②			
	第1	①	②			
	第2				①	
	袖部	①	②			
	第1	①	②			
玄室天井石	第2	①			①	
	玄室天井石	①	②	③		
後進天井石	後進天井石	①	②			
		①	②			
出土須恵器		MT 15		TK 10		TK 43

も石材・袖部・奥壁からすると、三島神社古墳と共通する要素をもち、古く位置づけることができる。しかし、玄室高比が1.2であることや玄室天井石が3枚であること等新しい要素をもち、ここでは新しい要素を重視し、物集女車塚古墳・海北塚古墳と対応するものと考えたが、他の石室とは異なった技法の変遷スケールをもつて系譜の石室と考えた方がよいと考えられる。なお、芝塚2号墳と南塚古墳は前壁等の技法は不明であるが、判明する他の企画・技法より主流となる第1系列に含め、とくに芝塚2号墳については最古の三島神社古墳と同型式とした。

ところで、今回は取り上げなかったが大和には群集墳内にB形式の横穴式石室が存在する。それは、石上・豊田古墳群のホリノヲ4号墳・キタハラ5号墳と巨勢山古墳群のタケノクチ16号墳等である。これらの石室は、キタハラ5号墳は不明であるが前壁①技法をとることや、その他の構築技法もほぼ三島神社古墳に類似することより、第1系列でも初期の型式に該当することが知られ、出土須恵器の型式からも矛盾しない。また、規模の面では、ホリノヲ4号墳とキタハラ5号墳は基準長が1.6m・1.3mと小型であるが、タケノクチ16号墳は基準長が2.0mである以外に羨道幅・羨道高が三島神社古墳に近似しており、両石室の密接な関係が窺われる。B形式の分布は摂津・山城の淀川右岸地域に多いが、大和でも先にあげた第1系列の最古の型式と考えられる芝塚2号墳に加えて、このように群集墳内にも同形式・系列の小型の石室が存在することは、B形式の起源を考えるうえで重要である。

なお、B形式の墳丘は、前方後円墳と円墳があるが、前方後円墳の規模は全長40~50m級のも

第7表 C形式石室の型式の組列

組 列	第1系 列	市尾墓山	権現堂 天塚	(石上大塚)
	第2系 列		笛吹神社	真乗院 緑山8号
企 画	玄室高比	← 0.9~1.1 →	← 1.3~1.4 →	
	横道幅比	← 0.6~0.7 →		← 0.5 →
	横道長比	← 1.4~1.7 →	2.1	2.9
構 材	石	← ① →	← ② →	→ ③ →
	材			← ③ →
築 築	前壁	← ② →		
	第1			← ③ →
技 法	第2		← ① →	→ ② →
	奥壁	← ① →	← ② →	← ③ →
袖 部	袖部	← ① →	← ② →	→ ③ →
	第1	← ① →		
法 法	玄室天井石		← ③ →	
	第2		← ① →	
横道天井石		← ① →	← ② →	→ ③ →
出土須恵器		MT 15	?	TK 43

のに限られ、C形式のものに比べると小さい。また、石室内部には、組合式石棺を納める例は多いが、剥抜式家形石棺は見られないがこの形式の特徴である。

C形式の石室は、前壁技法をもとにし、②技法をとる市尾墓山古墳・天塚古墳・権現堂古墳等を第1系列とした。また、A・B形式の主流を占める①技法をとる笛吹神社古墳・緑山8号墳と①技法との関係が考えられる③技法をとる東乘鞍古墳を第2系列としたが、笛吹神社古墳・緑山8号墳の両石室の前壁の石積みはきわめて類似しており、密接な関係が窺われる。両系列を通じて企画・構築技法はB形式と同じく変化しており、第7表のような型式の組列が考えられるが、第1系列より第2系列への変化を読み取ることができる。石上大塚古墳については、企画・構築技法とも不明な点が多く、型式や系列は明らかでないが、袖部が②技法をとることより、笛吹神社古墳以降のものと考えた。ただし、横道幅比では系列を問わず緑山8号墳を除く他のすべてが維持して0.6~0.7と幅広いことや、大和の5例が系列とは関係なく企画面での共通点をもつこと、前壁技法が②技法より①・③技法に変化すること、第2系列では新しい段階にもかかわらず玄室天井石の枚数の多い①技法をとる点等は当形式の特徴である。なお、第2系列の笛吹神社古墳・緑山8号墳については、前壁①技法をとることや、緑山8号墳に隣接してB形式の緑山7号墳が存在することからすれば、系統的にB形式に近い可能性がある。また東乘鞍古墳の前壁③技法も①技法に近く、第2系列とB形式の関係が窺われる。

なお、今回は取り上げなかったが、従来より畿内の初期横穴式石室としてよく取り上げられる

第8表 A～C形式石室の組列

時期 形式		I	II	III	IV
A	第1	雲雀丘C北4号	中宮1号		
	第2		瑞巖寺6号		
B	第1	三芝島神社2号	南勝福寺北	物集山女車塚7号	海北塚
	第2				珠城山1号
C	第1	市尾墓山	権現堂天塚		(石上大塚)
	第2			笛吹神社	東興山8号
企	玄室高比	0.8~1.2		1.2~1.4	
画	羨道長比	1.0~1.7	1.9~2.3		2.8~2.9
構 築 技 法	石材	↔①↔		↔③↔	
	抽部	↔①↔	↔②↔		
	羨道天井	↔①↔		↔②↔	
	奥壁	↔①↔		↔②↔	↔③↔
出土須恵器		MT15		TK43	
			TK10		

河内の藤の森古墳や、最近調査された大和の新沢千塚221号墳は、小規模ながらも玄室長比は2.3でC形式に該当する。その他の企画・構築技法は明らかでないが、5世紀後半頃の構築と考えられており、C形式の初源にあたる可能性も考えられる。

なお、C形式の墳丘は前方後円墳と円墳があるが、前方後円墳はとくに第1系列に限定され、その規模は全長70m級の大型のものに限られる。また、大和の石上大塚古墳を除く4例には古式の削抜式家形石棺が納められるが、C形式が他の形式に比べて玄室長比が大きく、羨道幅が1.6~1.7mと幅広いこととの関連性が窺われる。

以上のA~C形式の型式の組列と細分について、各形式の企画・構築技法をもとにすると、第8表のようにまとめることができる。縦は各形式及び形式内での細分を示し、横は企画・構築技法よりみたⅠ期~Ⅳ期の時期を示すもので、各型式間で共通する企画・構築技法を基準にするとこのような結果が得られた。

時期の設定基準については、Ⅰ期は企画において玄室高比が1.0~1.1で基準長に近く、羨道長比が1.0~1.7、構築技法において小石材を用いる①技法、奥壁が小石材のみで構成される①技法、袖部がすべて横積みの①技法、玄室天井石が5~7枚の①技法、羨道天井石が2枚のみの①技法のすべてに該当するものをあてた。Ⅱ期は、Ⅰ期の要素を継承しながらも、企画では羨道長比が

ほぼ2倍のもの、構築技法では石材に比較的大型の石材を用いる②技法、奥壁の基底部に大型の石材を用いる②技法、玄室天井石を4枚とする②技法、羨道天井石を3枚以上とする②技法等この時期に出現するいざれかの要素に該当するものをあてた。Ⅲ期は、企画では玄室高比が1.2をこえくなるものの、羨道長比が2倍をこえるもの、構築技法では袖部が大型の長辺を立てる②技法等新たに出現する要素をもつものをあてた。Ⅳ期は、企画では玄室高比が1.4とさらに高いものの、羨道長比が3倍に近く長いもの、構築技法では奥壁に玄室幅いっぱいの巨石を積み上げるもの、玄室天井石を3枚とするもの等新たに出現する要素をもつものをあてた。

企画・構築技法のすべての要素の変化は、各形式間で必ずしも一致しないが、企画では玄室高比と羨道長比は時期とともに大きくなる傾向にあり、構築技法では石材が①技法（Ⅰ・Ⅱ期）→②技法（Ⅱ～Ⅳ期）→③技法（Ⅳ期）、袖部が①技法（Ⅰ・Ⅱ期）→②技法（Ⅲ・Ⅳ期）、奥壁が①技法（Ⅰ・Ⅱ期）→②技法（Ⅱ期～Ⅳ期）→③技法（Ⅳ期）と明確に分かれ、とくに明確な袖部の変化をもとにすると、古段階（Ⅰ・Ⅱ期）と新段階（Ⅲ・Ⅳ期）に大別することができる。一方、羨道幅比・前壁技法・玄室天井石技法は各形式間の変遷スケールが異なり、取り上げることはできなかった。

この表からすると、A形式はⅠ・Ⅱ期の古段階だけで、Ⅲ・Ⅳ期の新段階には存在しない。また、B形式では中心となる第1系列はⅠ期からⅣ期まで継続するが、Ⅰ期は群集墳例も含めると大和が中心となり、分布の中心となる浜津・山城の淀川右岸地域での構築はⅡ期以降であることがわかる。B形式中唯一前壁②技法をとる第2系列の珠城山1号墳については、類例がないため明らかではないが、Ⅲ・Ⅳ期の新段階にあたることより、C形式の技法の影響を受けながらB形式第1系列より派生した形式とも考えられる。C形式については、第1系列はⅠ・Ⅱ期、第2系列はⅢ・Ⅳ期と古段階・新段階に明確に分かれ。第2系列は、先に指摘したように前壁①・③技法をとるや、笛吹神社古墳と綠山8号墳の玄室天井石が依然①技法である等C形式第1系列とは異質なもので、Ⅲ期にC形式第1系列よりB形式の技法の影響を受けながら派生した形式の可能性が強い。

なお、実年代については、出土須恵器よりⅠ期（6世紀前半）・Ⅱ期（6世紀前半～中頃）・Ⅲ期（6世紀中頃）・Ⅳ期（6世紀中頃～後半）と考えられる。ただし、この表は從来の須恵器編年や家形石棺に基づく石室の年代觀とは若干異なるもので、実際の年代とも異なるかもしれない。また、ここにみられるように、企画・構築技法の諸要素の変化や組合せは単純ではなく、各企画・構築技法や各形式により異なったスケールで変遷していた可能性も強い。とくにA形式は出土須恵器に比べて古い段階の構築技法が集中しており、B・C形式と一つの表にまとめるこことはむりがあるかもしれない。

(6) 第4形式の設定

さて、これまでしばしばふれてきたが、畿内において定型化する大型の横穴式石室と今回とりあげた第3形式の横穴式石室との関係について若干検討してみたい。畿内では6世紀後半から7世紀にかけて大和を中心として大型の両袖式横穴式石室が多数構築される。これらの横穴式石室に関して、まず企画についてみると、構造では平天井で長方形玄室平面をもつ点が第3形式と同

様であるが、両袖式である点が大きく異なっており、第3形式とは別の形式設定が妥当と考えられる。これを仮に第4形式としてみよう。

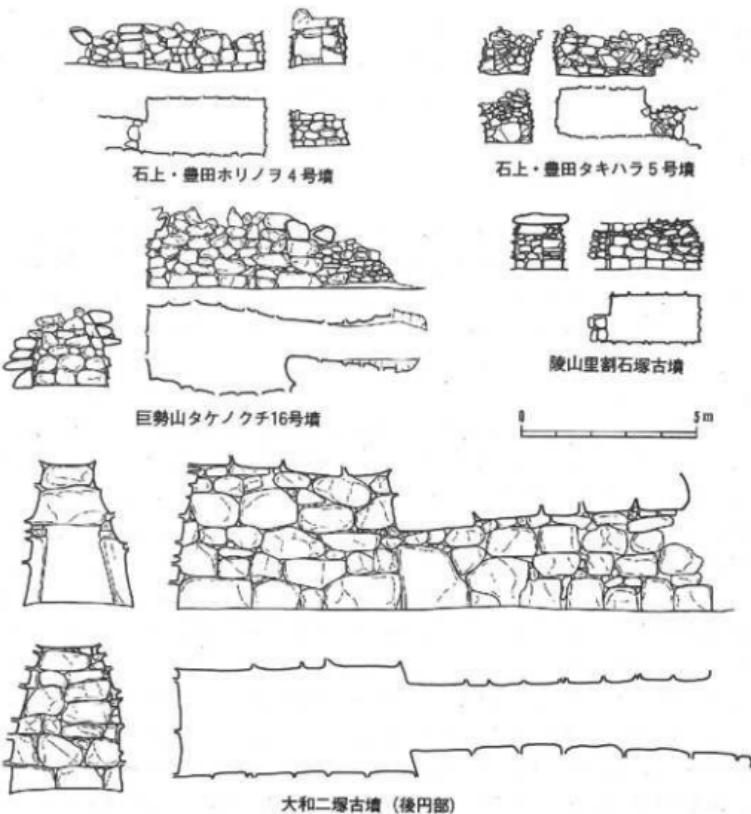
この第4形式の石室は、平面企画では前回にも指摘したように玄室長比がほぼ2倍のB型のものが大半を占めるが、2倍以上のC型も存在する。また、羨道長比では、ほぼ3倍のもののが4倍のものもある。一方、構築技法についてみると、石材では、②・③技法の大型石材を用いるもの以外に巨石を用いるものがある。前壁では、第3形式のA・B形式に多くみられた①技法は消滅し、C形式みられた②技法が継続して用いられ、さらに玄室幅いっぱいにもう一段積み上げる技法が現れる。奥壁では、②技法以外に③技法を継承し巨石を奥壁幅いっぱいに2・3段積み上げる技法が用いられる。袖部では、すべて横積みで数段積み上げる①技法は消滅し、巨石の長辺を立てる②技法が継続する。玄室天井石では、4枚の②技法、3枚の③技法のほか、2枚のものがある。このようにみてみると、企画・構築技法では、第3形式のⅠ・Ⅱ期の要素はほとんどないが、Ⅲ・Ⅳ期に並行ないしは新たに現れる要素が認められる。したがって、第4形式の石室は、第3形式とは別形式で明らかに後に現れる形式でありながらも、第3形式の系譜を引く形式としてとらえることが可能である。また、その分布状況からすると、この第3・4形式を「畿内型横穴式石室」という大形式にあてるのが妥当と考えられる。

さて、この第4形式の横穴式石室のうち早く現れると考えられるのは、大和二塚古墳後円部石室である。^{参考}この石室は、企画では基準長が2.98m、玄室長比が2.3、玄室高比が1.4、羨道幅比が0.7、羨道長比が3.3である。また、構築技法では、大型の石材を用いる③技法、玄室平面形は長方形、前壁は見上げ石を2石積み上げる新たな技法、奥壁は基底部に大型の石材を用いる②技法、袖部は大型石材の長辺を立てる②技法、玄室天井石は4枚の②技法、羨道天井石は5枚の②技法等がみられる。これらの企画・構築技法からすれば、当石室は、第3形式のⅢ・Ⅳ期の要素をもっており、なかでも大和を中心としたC形式Ⅳ期の東乗鞍古墳に近いことが指摘される。したがって、第4形式でも当古墳の石室は、第3形式のC形式よりⅣ期頃派生した形式としてとらえることができる。

なお、これまで両袖式横穴式石室で早い時期に位置づけられるものとして考えられているものに大和の市尾宮塚古墳と河内の愛宕塚古墳がある。市尾宮塚古墳については、袖部が大型の石材を立てる②技法で、第3形式のⅢ期以降の技法をもち、奥壁は基底部が2石であるがその上に奥壁幅いっぱいの大型石材を2段積み上げており、③技法に近いものである。この奥壁の③技法は、第3形式でもⅣ期の緑山8号墳だけにみられるもので、第4形式でも上記の大和二塚古墳ではまだみられない。また、愛宕塚古墳は、出土須器が陶邑輪年M T15型式にあたることより、6世紀前半のものとされているが、全体に巨石で構築されていることや、奥壁幅いっぱいの巨石を2段積み上げていること等構築技法からすれば、さらに新しい時期のものと考えられる。

(7) 第3形式の起源

このように、第3形式の横穴式石室からはそのⅣ期頃より第4形式が派生し、以後大型の横穴式石室としては第4形式が主流となるが、一方では第3形式の横穴式石室の起源が問題となる。すでに指摘したように、畿内の初期横穴式石室は1~3形式に分類されるが、それらは形式とし



第8図 第3形式及び第4形式横穴式石室

て全く異なっており、それぞれの起源は別のものを考えたほうがよさそうである。

第3形式の起源については、A形式の雲雀丘C北4号墳、B形式の三島神社古墳・芝塚2号墳や大和のタケノクチ16号墳等の群集墳内の石室、C形式の市尾墓山古墳やそれに先行する可能性のある藤の森古墳・新沢221号墳等各形式の最古型式の石室の系譜が問題となるが、時期的に先行する九州に例がないことからすれば、百濟に求めることができる。百濟でも時期的に該当するのは、熊津時代（475～538年）・泗沘時代（538～660年）の横穴式石室である。このなかで類似するのは泗沘時代（538～660年）の陵山里割石塚である。この石室は、玄室幅が1.29mと小さいが、玄室長はほぼ2倍のB型平面企画をもち、玄室高比は1.0、構築技法では小石材を用いる①技法、前壁は玄室幅に足らない見上げ石を用いる②技法、袖部はすべて横積みの①技法、玄室天井石は5枚以上の①技法等を用い、しかも玄門部において割り石で閉塞する等B形式Ⅰ期の三島

神社古墳にきわめて類似している。百濟におけるこの種の石室の正確な時期や類似が不明であるため、なんとも言えないが、第3形式のB形式の石室の起源が百濟にあることはまちがいないようである。ただし、B形式が入ってきてA・C形式が派生したものか、それぞれの形式の起源が百濟に求められるのかは今後の課題としたい。

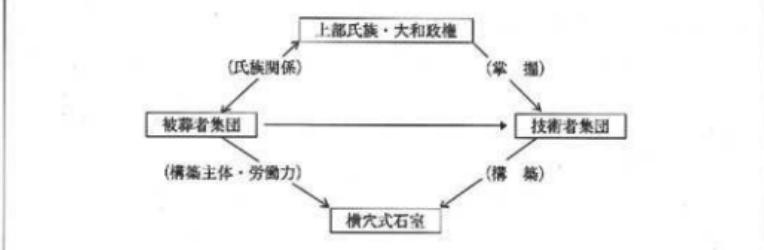
4.まとめ

以上のように、勝福寺北墳と雲雀丘C北4号墳の横穴式石室は、畿内における初期横穴式石室のうち第3形式に属し、第3形式はさらに企画と構築技法よりA～C形式に分類され、雲雀丘C北4号墳はA形式に、勝福寺北墳はB形式にあたることが明らかになった。各形式は、すでに述べたように分布地域や墳丘等にも特徴がみられ、のことからも両石室の性格を窺うことも可能である。しかし、ここではまず今回設定した形式の意義を問い合わせ、それから両石室について考えてみたい。

さて、横穴式石室構築のきっかけとしては、直接的には被葬者集団の意志があつて初めて考えられるものである。ただし、横穴式石室の分布が広範囲の地域に広がっているように、その背景には古墳文化の広まりがあるのであり、さらには社会的・政治的要因も考えられよう。しかし、横穴式石室という資料をとおしてそれらを考えようとする場合、直接その構築にあたった技術者をまず問題とせねばならないであろう。この石室構築を被葬者集団自らが行ったものとすれば、まったく別の論理が展開してこようが、技術者を想定するかぎり、石室形態を直接決定したのは被葬者集団ではなく、石室の基本的な企画や構築技法をもった専門技術者が行ったと考えてまちがいないものと思われる。

このような考え方で横穴式石室の構築と被葬者集団・専門技術者との関係を表したのが表9表である。横穴式石室の構築にあたり、被葬者集団は技術者を必要とするが、技術者は自らも企画・構築技法により石室を構築したと考えられる。おそらく、構築の指導を技術者が行い、労働力は被葬者集団が賄つたのである。この被葬者集団と技術者の関係は、自由に選択できたものではなく、技術者の背後には企画・構築技法を同じくする技術者集団が存在したであろうし、技術者集団も自立したものではなく、大和政權あるいは上部氏族の掌握下にあったものと思われる。

第9表 横穴式石室構築の諸要素



また、被葬者集団も技術者を選択するにあたっては、自らの氏族関係によったものと考えられる。したがって、被葬者集団がどのような形態の石室を構築するかは、大和政権や上部氏族との関係によったと言っても過言ではないであろう。

このように被葬者集団は、その氏族関係により大和政権や上部氏族より技術者を与えられ横穴式石室を構築したが、技術者も氏族関係により広い地域で構築を行っていたと考えられる。このことから、横穴式石室の系譜を明らかにすることは、被葬者集団の氏族関係の位置づけにも関係してくるのである。今回、畿内における初期横穴式石室で第3形式を設定し、さらにA～Cの小形式に分類したが、この形式はまさにこの技術者の系譜に対応するもので、各形式の石室の分布は大和政権や氏族関係に対応するものとしてとらえられるのである。

ここで、A～C形式の技術者及び被葬者像について考えてみよう。まず、大和に分布するC形式の石室は、第3形式中石室規模が大きいことや、ほとんどが大型前方後円墳で剝抜式家形石棺をもつこと等より、6世紀前半から後半にかけて大和の中央有力氏族のもとで活動した技術者集団の存在が考えられる。また、山城の天塚古墳や備中の縁山8号墳もこの関係により構築されたものであろう。ただし、6世紀中頃を境に第1系列から第2系列に明確に入れ替わっており、この時点での技術者の大きな変化を読み取ることができる。

B形式の中心となる第1系列の石室は、6世紀前半から中頃のⅡ期以降攝津・山城でも淀川右岸地域に多く分布するが、大和のC形式の石室とは別系譜の技術者が畿内でもこの地域を中心に構築を行っていたことがわかる。被葬者については、この地域の有力氏族が考えられるが、各氏族間のつながりを窺うこともできる。ただし、人和でも1期に芝塚2号墳や群集墳内にも第1系列の石室が存在することより、まず大和に出現し当地域に移った技術者の系譜や氏族関係を考えることができる。また、石室以外の要素では、前方後円墳でも全長規模が40～50m級に限られることや剝抜式家形石棺がまったくないことより、大和のC形式の石室よりは一ランク落ちる取扱いが認められる。

A形式は、畿内でも西端部の雲雀丘C北4号墳のほか畿外に離れて分布することから、B・C形式に対して地方で活動した技術者が考えられる。企画・構築技法からは、B・C形式とは別系譜ととらえるが、前壁の構築技法からするとB形式に近い。また、B・C形式に比べると、群集墳中だけに存在することや、前方後円墳がないことから、B・C形式よりは低いランクの被葬者像が考えられる。

このように、A～C形式に対応して三つの系譜の技術者とその背景となる大和政権及び上部氏族の存在が考えられるが、さらに当時の政治情勢との関係を問題にする場合、時期的にみて継体～欽明朝における位置づけが問題となる。「日本書紀」の記載によれば、継体は応神の五世の孫と称して越前より迎えられて即位したもの、20年かかって大和に入つており、その背景には継体を支持する近江・尾張等の地方勢力と大和の勢力との対立があったとする説がある。また、「日本書紀」の継体没年から安閑・宣化・欽明即位までの紀年が他の史料との間に矛盾があることより、継体没後蘇我・秦氏に支持された欽明朝と大伴・物部氏に支持された安閑・宣化朝の両朝が並立し、宣化没後欽明朝に合一されたとする説もある。今回問題とする第3形式の石室の年

代は、まさにこれらの動乱期にあたっており、形式の分類や型式編年が大和政権や氏族関係を反映するものであるならば、その関係を検討する必要があろう。

まず、大和を中心としたC形式の石室は、繼体~欽明朝の大臣・大連クラスかこれに次ぐ氏族が考えられる。市尾墓山古墳については、すでに繼体朝の大臣巨勢男人にあてる説があるが、各古墳の所在地より市尾墓山古墳・權現堂古墳は巨勢氏、石上大塚古墳・東乘鞍古墳は物部氏が該当するであろう。ただし、第8表でみる限り、巨勢氏関係のものは古段階（I・II期）に、物部氏関係のものは新段階（III・IV期）に分かれることは注目される。また、山城の天塚古墳については、欽明前紀に「秦大津父」の記載があり、中央勢力との関係が深かった秦氏のものと考えられる。一方、第2系列のうち笛吹神社古墳と緑山8号墳は前壁等構築技法はきわめて類似しているが、前者の被葬者と考えられる葛城氏が後者の存在する吉備での屯倉経営に蘇我氏のもとで活躍していることは興味深い。

B形式では、I期に大和の芝塚2号墳と群集墳内の中規模石室が現れるが、中・小氏族にまず採用されたと考えられる。また、II期以降攝津・山城の淀川右岸地域に多く分布する第1系列については、この地域でまとまりをもつ諸氏族の存在を指摘したが、地域的に見ると、繼体陵が大和の磐余玉穗宮に入る以前の宮の所在地と一部一致すること、繼体陵に比定される今城塚古墳が存在すること、安閑紀元年に三鷹県主飯粒が三鷹竹村屯倉を献上した記載がみられること等より大和政権の一勢力と結びついた諸氏族の存在が考えられる。また、「日本書紀」によると宣化の上殖葉皇子と火焔皇子は後の攝津国川辺郡に居住した偉那公・椎田君の祖とされることからすると、これらの氏族は繼体から安閑・宣化を支持していた勢力である可能性が強い。さらに、火焔皇子が大河内稚子媛の子であることや、先にあげた三鷹竹村屯倉獻上の記事からすれば、大河内氏や三鷹県主を含んでいたと考えられる。

A形式については、雲雀丘C北4号墳は不明であるが、美作の中宮1号墳は欽明紀16年記載の「白猪屯倉」に、瑞巖寺6号墳は宣化紀元年記載の「新家屯倉」の比定地にそれぞれ近接することから、大和政権による屯倉設置と関係するものと考えられる。なお、白猪屯倉には蘇我氏、新家屯倉には物部氏が関係しており、それぞれ中央氏族との結びつきが窺われる。

このように、A~C形式は大和政権や中央氏族との関係が考えられるが、「日本書紀」記載の年代や皇位継承については諸説あり、各古墳の年代をそのままあてはめることは慎重にならねばならないであろう。また、繼体~欽明朝の動乱期の諸勢力の動向についてはまだ不明な点が多く、今後このような横穴式石室の形式による検討が課題として残る。ただし、ここで得られた石室編年をもとにするとならば、I期は繼体期、II期は安閑・宣化期、III・IV期は欽明期にあたる可能性だけは指摘しておきたい。なお、この時期は朝鮮半島南部への出兵や百濟との交渉の記事が多く見られ、先に指摘したようにこの第3形式の横穴式石室が導入される条件は十分あったものと思われる。

さて、最後に今回の当面の目的とする勝福寺北墳・雲雀丘C北4号墳の位置づけについて考えてみよう。これまでみてきたように両古墳は畿内の初期横穴式石室でも第3形式の属するが、勝福寺北墳はB形式、雲雀丘C北4号墳はA形式と小形式では異なり、それぞれ異なる系譜の技

術者により構築されたものである。勝福寺北墳の属するB形式第1系列は、6世紀前半～中頃以降摂津・山城の淀川右岸地域を中心に分布し、大和を中心とするC形式と異なった企画・構築技法をもつ技術者集団の存在とそれを掌握した上部氏族の存在、各古墳の被葬者間のつながり等が考えられる。これらの諸氏族は、雄略～欽明天朝の動乱期において、雄略・安閑・宣化を支持していたと考えられるが、宣化の上種葉皇子と火焰皇子を相とする伴都公・椎田君が勝福寺北墳と同じ後の摂津岡川辺郡に居住していたことは興味深い。一方、雲雀丘C北4号墳の属するA形式は、この頃進行していた畿外の屯倉設置地域に分布するが、雲雀丘C北4号墳の被葬者もこれを担っていた中央氏族との関係が考えられる。長尾山丘陵では岡古墳以降6世紀中頃～7世紀前半の群集墳形成期には両袖式の異なる形式の横穴式石室構築されるが、当丘陵における両石室の特異性や両石室間の相違点は、以上のような状況に起因するものと考えられる。また、勝福寺北墳の周辺には以後古墳が造られず、雲雀丘C北4号墳の周辺に群集墳が形成されることはない、岡古墳以後の政治情勢を反映するものかもしれない。

(1991.3.1)

<註>

- ① 白石太一郎『日本における初期横穴式石室の系譜——横穴式石室の受容に関する一考察——』(『先史学研究』5 1965)
 - ＊ 「畿内の後期大型群集墳に関する一試考——河内高安千塚及び平尾山千塚を中心として——」(『古代学研究』42・43 1966)
- ② 河上邦彦『大和の大型横穴式石室の系譜』(『権原考古学研究所論集』6 1979)
 - ＊ 「大和の横穴式石室の概観と二、三の問題」(『権原考古学研究所論集』9 1988)
- ③ 北垣聰一郎『横穴式石室構築技法の一考察——特に大和を中心として——』(『権原考古学研究所論集』6 1984)
- ④ 森下浩行『日本における横穴式石室の出現とその系譜——畿内型と九州型——』(『古代学研究』111 1986)
 - ＊ 「畿内大型横穴式石室考——後期古墳時代・畿内型A類の様相——」(同志社大学考古学シリーズⅢ『考古学と地域文化』森浩一編 1989)
- ⑤ 山崎信二『横穴式石室構造の地域別比較研究——中・四国編——』 1986
- ⑥ 岡野慶隆『横穴式石室の平面企画について——長尾山丘陵の横穴式石室を中心として——』(『関西学院考古』6 1980)
- ⑦ ＊ 「横穴式石室の平面企画についてⅡ——畿内における主要横穴式石室の検討——」(『関西学院考古』8 1987)
- ⑧ ＊ 「長尾山丘陵における横穴式石室——その企画法と構築技法——」(『市史研究紀要たからづか』6 1989)
- ⑨ 木村次雄『摂津の鉛鏡出土の古墳』(『考古学雑誌』19-11 1929)
 - 梅原末治『摂津火打村勝福寺古墳』(『日本古文化研究所報告』1 日本古文化研究所 1935)
 - 亥野 弘『川西市史』第4巻考古資料 1976

- ⑩ 須恵器の編年は、山迢昭三『須恵器大成』角川書店1981による。
- ⑪ 白石太一郎 前掲書 (1966)
- ⑫ 関西学院大学考古学研究会「長尾山の古墳群」Ⅱ (『関西学院考古』5 1979)
直宮憲一「宝塚市雲雀山古墳群C北支群4号墳出土の須恵器」 (『関西学院考古』6 1980)
- ⑬ 森下浩行 前掲書 (1986)
- ⑭ 白石太一郎 前掲書 (1966)
- ⑮ 森下浩行 前掲書 (1989)
- ⑯ 支室高を玄室幅で割った数値を「玄室高比」、羨道幅を玄室幅で割った数値を「羨道幅比」、羨道長を玄室幅で割った数値を「羨道長比」とした。
なお、構造面では、袖部の構造以外に羨道床面が玄室より一段高くなるものがある。この構造についても分類すべきであるが、未調査の石室が多いことや、調査例でも閉塞施設との判別が困難な場合が多いため、今回は除外することにした。
- ⑰ 尾崎喜左雄『横穴式石室の研究』吉川弘文館 1966
柳沢一男「北部九州における初期横穴式石室の展開——平面图形と尺度について——」 (『九州考古学の諸問題』福岡考古学研究会編 1975)
- ⑱ 泉森俊・河上邦彦ほか「天理市石上・豊田古墳群」Ⅰ 権原考古学研究所 1975
⑲ タイ「天理市石上・豊田古墳群」Ⅱ 権原考古学研究所 1976
- ⑳ 田中一広「巨勢山古墳群タケノクチ支群発掘調査概報」 (『奈良県遺跡調査概要』1983年度 権原考古学研究所編 1984)
- ㉑ 西谷正「藤の森・春上山二古墳の調査」 (『大阪府文化財調査概要』1965・66年度 大阪文化財センター 1975)
- ㉒ 権原考古学研究所「新沢千塚古墳群 221・224・225号墳一現地説明会資料」1990
- ㉓ 上田宏範・北野耕平ほか「大和二塚古墳」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第2冊 奈良県教育委員会 1962
- ㉔ ただし、玄室前壁・奥壁の持ち送りは、B形式の物集女車塚古墳に類似している。
- ㉕ 河上邦彦「市尾墓山古墳」高取町教育委員会・権原考古学研究所 1984
- ㉖ 大阪府教育委員会「八尾市高安群集墳の調査 第2次」 (『大阪府文化財調査概要』1967 1968)
- ㉗ 金基雄「百濟の古墳」学生社 1976
- ㉘ 直木孝次郎「雜体朝の動乱と神武伝説」 (『日本古代国家の構造』青木書店 1958)
- ㉙ 林屋辰三郎「雜体・鉄明朝内乱の史的分析」 (『古代国家の解体』東京大学出版会 1955)
- ㉚ 河上邦彦 前掲書 1984
- ㉛ 『日本書紀』欽明天皇17年7月に、蘇我大臣稻目が備前児鷦郡に屯倉を設置するにあたり、葛城山田直瑞子を田令とする記事がある。また、瑞子は同30年4月の白猪屯倉関係の記事にも見える。
- ㉜ 『日本書紀』宣化天皇元年3月「立_前正妃億計天皇女橘仲皇女_為_皇后_。是生_一男三女_。……
次日_上殖栗皇子_。亦名輪子。是月比公・偉那公、凡二姓之先也。先庶紀大河内稚子媛生_一男_。是日_火焰皇子_。是稚田村之先也。」

編集後記

- ☆ 調査開始から四年の歳月をへて、ようやく9号発行のはこびとなりました。四年といえば、オリンピックがひとまわりし、当時の一回生は四回生になってしまったわけです。調査参加者のほとんどが社会人になってしまった今、当時を知る者もすくなくやっつけ仕事で印刷所に原稿をほうりこんでしまった。
- ★ 本づくりの事を何も知らないまま、まわりに聞きまわって、耳学問でこの雑誌はつくられました。編集者の力量のなさゆえいたらない点も多いと思いますが、川西市教育委員会の祭本教士氏、峰松明子氏をはじめとして根気よくご指導下さった皆様に、記して御礼申し上げます。
- ☆ 長尾山の調査もとうとう煮詰まってまいりました。先輩から後輩へとうけつがれて、じつに15年の月日が流れました。これからは、より広い視野にたった、体系的研究が必要であります。あせらず、じっくり取り組んでいきたいと考えています。
- ★ 岡野氏（川西市教育委員会）の石室研究も、回を追うごとに視野をひろげられ、ますますの深化がうかがえます。
- ☆ 兼康氏（滋賀県教育委員会）の石造品研究もシリーズ化しつつあります。氏独特のこだわりとユニークな発想は相変わらず冴えたり、思わずお目にかかるたびうなってしまう私です。
- ★ 白井氏（高島町教育委員会）も、公私ともに多忙な中、着実にご自分の分野を開拓されておられます。いつも研究会ぐるみでご迷惑をおかけいたしており、ついに原稿まで要求してしまいましたが、快くひきうけてくださいました。
- ☆ すっかり常連の坂井氏（新潟県教育委員会）ですが、今は今までとひと味ちがうジャンルでの登場となりました。
- ★ 一部では廃刊のうわさもある？関学考古ですが、そんなことはありません。たとえ四年に一度のオリンピック雑誌といわれようとも、これからも学生考古学のあるかぎり、よりよい雑誌づくりに努力していきたいと考えております。

今一度、皆様に心からの感謝を記して。

編集：福島好和（文学部・教授）
石島 三和（社・4） 遠藤 利忠（文・2） 塚本 優子（文・2）
田中 文子（文・2） 安田 貴史（文・2） 八幡 明美（文・2）
金山 新一郎（文・1）

関西学院考古 第9号

発行日 1991年12月21日

編集・発行 関西学院大学考古学研究会

西宮市上ヶ原1番町1-155 関西学院大学文学部内

印刷 富士出版印刷株式会社

